

Scribed a bullet hole

b y とろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五反田弾は強かった。立ちふさがる総てを粉碎し、薙ぎ倒していくその姿から、『魔人』と呼ばれることもあった。

そんな快楽主義者の彼が、女性にしか動かせないマルチフォーム・スーツ『IS』を動かした時、物語は静かに始まりを告げる――！

インフィニット・ストラトスの脇役、五反田弾君への憑依ものです。

息抜きに書いたものなので、更新は期待しないでください。

目次

k e	136	The y p r o m i s e m i s t a	112	S e c o n d i n v a s i o n o f	94	m e e t	73	F a t e s h o u l d n e v e r	46	B l o o d y l o r d	21	N o r m a l d a y ?	9	T h e f i r s t d a y	1	A l l g i r l s i n s c h o o l	P r o l o g u e
--------	-----	--	-----	--	----	------------------	----	---	----	--	----	--	---	---	---	--	--------------------------------------

O n l y r e g r e t r e m a i n	282	T h i n g c a l l e d f a m i l	258	M i l i t a r y a n d g i r l	231	B r e a k t h e p u p p e t	205	e	M e a n i n g o f v i o l e n c	180	t u d e n t	T h e t w o t r a n s f e r	157	G r a v i t y a t t r a c t i o n
--	-----	--	-----	---	-----	--	-----	---	--	-----	----------------------------	--	-----	---

i f — D e a r y o u —	486	T w i l l i g h t f i n a l e	453	D y e d r e d r e q u i e m	S a n c t u s —	412	g i n n i n g —	387	R h a p s o d y o f t h e b e	e d e e p s e a —	360	T h e d e e p e r t h a n t h	O l d t a l e —	331	s —	306
---	-----	---	-----	--	--	-----	--	-----	---	---	-----	---	--	-----	------------	-----

P r o l o g u e

五反田弾は強かった。

異常なまでに、異質なまでに強かった。

赤みがかった髪を長く伸ばし、すらりと細く長い体からは想像できない強さ。生物学、人体の構造、物理法則といった常識をはるかに超える規格外。

地を割り、天を裂き、万物をことごとくに吹き飛ばす。

そんな強さが五反田弾には存在していた。

おそらくそれは、なぜか持っている前世の記憶に起因しているのだろうと彼自身思っているが、しかしそんなものは関係ないとばかりに己が道を生き続けた。

なぜなら前世でも同じであつたから。

化け物のような強さも、快樂主義者のような性格も、自分が自分である証拠であり、他の何物でもない証明しているのだから。

前と何も変わらない。畏怖される態度だろうが恐怖される視線だろうが、己が変わらないのだから、当然他人が変わるはずもない。

そう、思っていた。

けれど違った。

五反田弾は変わらなかつた。変わったのは他人。

畏怖もある。恐怖もある。しかし家族は、数少ない友人は受け入れてくれた。変わった。変わった。

ならば己も変わらなければならぬだろう。

せめて彼らが誇れるように。

それが。

たった一つ、五反田弾ができる恩返し。

そして――

たった一つ、五反田弾と、その周囲の人間との取り返しのつかないすれ違いだった。

∨
1

「お寒い」

二月某日、五反田弾は寒い寒いとぼやきつつ道を歩いていった。中学三年生、受験真つ只中である。

かくいう今も、駅を四つ超えて高校の入試会場に行く最中だ。カンニング防止のため、受験会場が二日前に知らされるとか意味が分からない。私立藍越学園。それが弾と、今隣を歩いている少年が受ける学校だ。

「ああ、確かに寒い……。なのになんでお前はちつとも寒そうじゃないんだ？」

その少年、同じく寒さに体を震わせている織斑一夏が怪訝そうに尋ねた。

それもそのはずだ。なにせ弾は寒いと言いながらもシャツにコートを羽織っているだけであり、隣の一夏が体を震わせているのに、弾は澄ました顔で身震い一つ起こさない。

疑問に思っても当然だ。

しかし当の本人は「気合だ、気合」と言ってはぐらかしてしまった。

納得いかねえ、と一夏は愚痴りつつ、会場までの道を二人で歩いていく。

いろいろとくだらない話をしていると、目当ての建物が見えた。

名前は知っているが場所までは知らないという場所の代名詞、市立の多目的ホールで

ある。

中に入っつてうろろろするが、目的の試験会場が見つからない。
つまり。

「迷ったよな完全に」

そういうことである。

「おいおい一夏。てめえの案内で来たんだぜ。迷ったつてどういうことだよ」

何ともやるせない顔をした一夏にそう言うと、さらに残念な顔になってうめきだした。

「いや、ほらなんだ。二階にさえ行ければどうにかなるつて。な？」

「そうか。まあ、この『常識的に作らない俺カッコイイ』みたいな建造物をてめえが把握してらつていうんならそれも可能だろうよ」

「うっ……」

「無理だよなあ？」

「い、いや……まだ……」

「むりだよなあ」

「む、無理です……」

がつくりと首を落とす一夏をしり目に、弾はため息をついた。

「ったく、中三にもなって迷子とか恥ずかしすぎんぞ」

「ええい、皆まで言うな。じゃあ、次に見つけたドアに入ろう。それで大体正解だろ」

「あ、おい一夏」

一夏はそれだけ言って、弾の静止の声も聞かずに丁度あったドアの中に入っていった。仕方がないので、弾もそれに続く。

部屋に入った途端に神経質そうな女性が、移動しろだの着替えをしろだの一夏と弾をろくに見もせず指示を出して出て行ってしまった。

呆然とそれを眺める一夏と弾。

「着替えってなんだ？」

「知るかよ。カンニング対策じゃあねえのか」

「ああ、なるほど」

納得している一夏を促しカーテンの奥に進むと、奇妙な物体が鎮座していた。

『IS』、『インフィニット・ストラトス』と呼ばれる、マルチフォーム・スーツだ。宇宙空間での活動を目的とされていたが、兵器へと転用、さらにスポーツとして定着したそれが、まるで騎士が忠誠を誓うように跪いている。

人型の、鎧のような印象を受けるそれを見て、一夏が顔つきを変えた。

それもそうだろう。なにせ、一夏の実姉がこれで『世界最強』なんて呼ばれているのだから。

だが、弾と一夏（というより全男性）には関係ないものだ。

『IS』は、女性にしか反応しないという、謎の性質があるのだから。

だからこそ、一夏が『IS』に触れようとしても、特に気にすることはなかった。

「——な、なんだ!?!」

情けない声を出して、一夏が飛びのく。

一瞬、光が駆け、次の瞬間には、一夏が『IS』に乗っていた。

何が起こったのか分からないというような、なんともアホみたいな顔をしている一夏を見て、

「マジかよ……」

弾は啞然とするしかなかった。

女性にしか扱えないという常識が、目の前で覆されたのだ。弾自体、常識外れといわれることも、その自覚もあるが、まさか友人がそれをやるとは思わなかった。

ありていに言って、少し引いた。

静まり返るその場に、不意に爆発音に似た音が響く。一夏が何をどう間違ったのか、スラストをふかしたようだ。それも、絶句している弾に向かつて。

「ちよつ、だ、弾っ!？」

「!・馬鹿やろ……ッ!」

弾はとつさに、向かつてくる一夏に腕を突きだした。

その腕が一夏にあつた瞬間、また光が駆け、今度は弾がそれに包まれる。

光が収まつた後から姿を見せたのは、『IS』を身に纏つた五反田弾その人であつた。

「……」

「……」

二人の間に、言葉は——なかつた。

All girls in school

高校入学後、第一日目。

本来、間違いさえ起こさなければ、これほど人生に希望を与える日はないだろう。定義的な子供から解放され、自由を謳い、青春を謳歌するための大切な日だ。

そのはずなのだが……。

「なあ、一夏よお……」

「どうした……弾」

「いや……なんでもない……」

「そうか……」

そのはず、なのだが……。

「弾……」

「……なんだ」

「……やつば、いいや……」

「ははッ……」

さつきから、ただこれだけのやり取りを何回もしている。

意味はない。意味はないが、会話が途切れることに一夏と弾は恐怖する。

今現在、このクラス、いやIS学園全体の中に、男子は一夏と弾の二人しかいなかった。

IS学園はその名の通りIS操縦者を育成する学校だ。そしてISを動かせるのは女性だけ。つまり、IS学園は女子高なのだ。本来ならば。

しかし、ここにイレギュラーが誕生した。一夏と弾という、男性なのにISを動かせる異物が。

故に、IS学園内で男性は彼ら二人だけ。当然、注目の的になるわけである。

「……くん。織斑くんっ」

もはや現実逃避し始めた一夏に、突然声がかかった。

「は、はいつ!？」

一夏にとっては完全に不意打ちで、思わず声が裏返ってしまう。案の定、クラスのあちこちからくすくすと笑い声が聞こえて、一夏はさらに落ち着かない気分になった。

声の主はこのクラスの副担任、山田真耶女史。背丈が低く、大きめの眼鏡にだぼっとした服装で、『子供が無理して大人の格好をしました』的な不自然さが出ている。

「あつ、あの、大きな声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

そんな真耶は、もはや挙動不審とも言ってしまうていいような雰囲気で一夏にぺこぺこ頭を下げた。

「いや、し、しますから自己紹介。落ち着いてください先生」

「ほ、本当? 本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ、絶対ですよ!」

自己紹介をするといったただけで真耶は一夏の手をぎゅつと握ってきた。どれだけ緊張してたのだろうか？

ともあれ、やるといったのだからさつそくやるとしよう。そう思い、立ち上がった後ろを向く。向いたのだが、さつきから背中に集中していた視線をまともに受ける体になつて、一夏はたじろいだ。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

無難にあいさつを終えるが、クラス全体から『もつと色々喋つてよ』的な視線をうけた。『これで終わりじゃないよね？』という空気がヒシヒシと感じられる。先程まで一緒になつて気まずい思いをしていたはずの弾すらも、露骨に『もつと話せ』という視線を飛ばしてくる。

何を言え方がいいのか全く分からない一夏は、窓側の席にいる六年ぶりに再会した幼馴染である篠ノ之箒に助けを求めるが、空しく視線をそらされてしまった。

これ以上しやべらずに『暗いやつ』のレットルを張られたくないので、意を決して口を開く。

「以上です」

がたたつ、とずっこける女子が数名いたが、一夏は気に留めない。ていうか、何言え
ばいいんだよ。

弾がこらえきれなさそうに体を震わせていて、なんだかむかついた。

ふてくされたその瞬間、

バシンツッ！

といい音をさせて頭を叩かれた。

「いつ、つう……」

痛みに思わず頭を抱えるが、しかしこの叩き方には覚えがある。

弾が笑いをこらえていたのは、つまりこつちか。

「げえつ、関羽！」

バアンツッ！

恐る恐る振り向いたところをまた叩かれてしまった。あまりの音に、女子が若干名ひいている。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの凜々しい声を響かせたのは、何を隠そう織斑一夏の実姉、織斑千冬である。

混乱する一夏を置いて、千冬は真耶に向き直った。

「織斑先生、会議はもう終わったんですか？」

「ああ、山田君。クラスへのあいさつを押しつけてすまなかったな」

真耶はいえいえ、と若干熱っぽい視線を送りながらはにかんだ。

「さて、諸君。私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にする育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。できないものにはできるまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいい

が、私の言うことは聞け。いいな」

まるで暴君だ、と一夏は思うが、教室には黄色い声が上がった。

「キャ————！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです。北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「わたし、お姉様の為なら死ねます！」

黄色い声が多数上がる中、千冬はうつとうしそうにため息をついた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。特に今年は、厄介なものが二つもあ
る」

厄介なものとは、一夏と弾の二人に違いない。

「ひでえな、千冬サン」

「ひどいぜ、千冬姉」

一夏と弾の抗議の声が被った。

バシンツッ！ババシンツッ！

またもや出席簿が振り下ろされた。一夏は避けようもなくそれを食らうが、弾はにやにやと千冬を見ている。

「避けるな、馬鹿者」

「断りますよ。あんなのろいんじやあ、ね」

「五反田ア……！」

千冬が怒りに体を震わせた。プルプルと震える出席簿が超凶悪的。

ちなみに、教室ではクエスチョンマークであふれかえっている。先程の応酬は、実力がないものには全く分からないだろう。単に、千冬が出席簿を振り下ろしただけに見えるはずだ。

実はさっきの出席簿、弾には当たっていない。

つまり、千冬が振り下ろした出席簿を、弾がそれ以上の速度ではじき返したただけなのだが、いかんせんそれが速すぎて、当事者と一夏を除いて誰も理解できていなかった。

「チツ……まあ、いい。で？お前は満足にあいさつもできんのか？」

「いや、千冬姉。俺は——」

Bannon!

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

四回目の出席簿を食らって、しぶしぶと訂正するが、時すでに遅し、教室中に一夏と千冬が姉弟なのもろバレだった。

「え……織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「なにそれすごい」

「ああつ、いいなあつ。かわってほしいなあつ」

「だまれ、お前ら」

色めき立つ教室を、千冬が手をはたいて静まらせる。

「五反田、お前も自己紹介ぐらいしておけ」
「ういーす」

ババシインツ！

出席簿が以下略。

「……避けるなと言ったが？」

「断りますよ。あんな以下略」

「五反田ア……！！」

「おお、怖い怖い。——つと、そういうわけで五反田弾だ。趣味は料理、実家も定食屋をやってる。気が向いたら来てくれ。まっ、時間もないからこんなもんだな。んじゃあ、これからよろしく」

もはや開き直ったのか、さつきまでの緊張を微塵も感じさせないにこやかスマイル&颯爽とした自己紹介だ。

一人だけ自己紹介を成功させた弾に、一夏は恨めしげな視線を送る。滅べ。

それを察知した弾が一夏に向かっていやらしい笑みを浮かべたところでチャイムが鳴った。

「さあ、ショートホームルームは終わりだ。諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作はこれも半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事を「ういーす」——お前は黙っている、五反田！」

へらへらと笑っている弾を、千冬が射殺さんばかりに睨み付ける。一般人なら卒倒するレベルの威圧を直に受けているはずだが、弾は意に介していない。

まだ千冬が一夏のもとから失踪する前から、この二人は仲がいいのか悪いのか分からなかった。なんだか、あのころに戻つたみたいで、一夏は知らず知らずに胸を躍らせる。とんだ初日になるところだったが、これなら大丈夫そうだと一夏は思った。

「何をにやにやしている。早く座れ、馬鹿者」

訂正。 やつぱり酷い。

親友のからかいの言葉と姉の暴力、幼馴染の不機嫌な視線も受けながら、一夏はこの先の学園生活に不安を隠せなかつた。

The first day

出席簿で頭を叩かれ続けるショートホームルームが終わり、さらに一時限目のI S基礎理論が終了して、今は休み時間。

ちなみに、女子から一夏と弾の二人に送られる好奇の目は一時間ちよつとで止むはずもなく、現在も絶賛さらされ中だ。

「あー……きつい。おまえは楽そうだなア、弾」

いかにもぐつたりといった様子で、一夏が弾に尋ねる。

もはや女子からの視線にもともしなくなっていた弾は胸を張った。

「文句言っても仕方ないからな。慣れろ」

「相変わらず男らしい……」

「他にどうしろってんだ。ここから抜け出して、別の学校にでも行くか？」

「そりゃあ無理だろうけどよ。しかし、あれだけ」

『あれ』といいながら、一夏が廊下を見る。そこには、一夏と弾を一目見ようと他のクラス、二年、三年からも人が来ていた。そのせいで、廊下はとんでもなく人口密度が高そうだ。

一夏と弾が視線を送っただけで体を硬直させるあたり、彼女たちも緊張しているようだ。というか、『あんた話しかけなさいよ』的な空気がものすごく伝わってくる。

ISが世界に広まってから、男性の地位は落下の一途をたどった。それはISが現存する兵器のすべてを凌駕し、無効化する強度を持ち、そしてそのISを動かせるのが女性だけだからだ。当然、どの国も女性優遇の措置を取った。

それから十年、女尊男卑の風潮は瞬く間に浸透し、今に至る。

故に、男性に免疫のない女性が増えている。一夏と弾を見る女子生徒の多くが、それに当てはまるのだろう。

「……ちよつといいか」

「え？」

突然一夏に声がかかる。顔を上げると、そこには六年ぶりに再会した幼馴染みがい

た。

篠ノ之箒。一夏が普通っていた剣術道場の娘。長い髪をポニーテールにしているのは、六年前から変わっていない。

「……箒？」

「……………」

名前を呼んだら、きつと睨まれてしまった。六年前から日本刀のような少女だと思っていたが、さらに鋭さが増している。

「廊下でいいか？」

「え……ああ、つと」

「俺のことはいい。一夏の知り合いなんだろう？積もる話もあるだろうさ」

空気を察し、弾は気遣いは無用だといった。五反田弾は優秀なのだ。一夏と違つて。

一夏と違つて（強調）。

「……すまないな」

「いいって。篠ノ之サン？」

「……箒でいい」

「そうかい。なら、そう呼ばせてもらおう。俺も弾でいいぜ」

「……分かった」

「よろしくよろしく。……頑張んな」

小さく、箒にだけ聞こえるように耳打ちしてやる。

「……！な、何を言って……！く、ほら早く来い、一夏！」

すると箒は顔を真っ赤にして一夏と廊下に出て行った。強引に掴まれて困惑している一夏を見れば、彼女の思いが伝わっていないのは明白だ。

「青春だねえ」

口元を綻ばせながら、しみじみとつぶやく。

同じく一夏に好意を寄せている弾のもう一人の親友——二年ほど（正確には一年ちよつと）前に中国へ転校していった幼馴染みと、これまた一夏に好意を寄せている妹の顔を思い浮かべ、今度は苦笑が出てきた。

どれもが成就するわけではないが、後悔だけはしてほしくないとと思う。いつか思い返して、笑って盃をかわせ合えるような。

そんな結末になってほしいと思うが、それは無理な話なのだろう。痛み無くして、愛は無い。

「まったく、世知辛い世界だぜ」

＜＜ 1

2時限目を知らせるチャイムが鳴って、一夏と箒が教室に戻ってきた。

ばかげた身体能力を誇る弾には、廊下での二人の会話が鮮明に聞こえていた。たとえば何重もの人垣ができていてもだ。その気になれば、学園どころかささらに遠くまで完全に把握できる。プライベートの問題でやりはしないが。

先程の二人の会話はそう多いものではなく、ただ一夏が唐変木つぷりを発揮していた

だけだった。

「つまらんなあ」

「ん？なにがだ？」

「いや、なんでもない」

「？変な奴だな——」

パンツ！

「さっさと席につけ、織斑」

「……すいません。織斑先生」

一夏のやつ、また叩かれてやがる。
いい気味だ。

陰でこっそり笑う弾だった。

というわけで2時限目である。

黒板の前では真耶がすらすらと教科書を読んでいる。
だがしかし。

「……………」

一夏には全く理解できなかつた。

アクティブなんちゃらとか広域うんたらとか、机に積まれた5冊の教科書が、もはや何かの魔術書のようだ。

しかし、ちらつと周囲を見渡しても、わからないと思っている生徒は一夏以外にはいない模様。

一夏と同じ程度の学力しかない、あの弾もである。

意味もなく裏切られた気分だ。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

そこに差し伸べられる救いの手。真耶が気を利かせてくれたらしい。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

誇らしげに胸を張る真耶。大きな服の上からでもわかる、たわわに育つた2つの実が揺れた。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません！」

「え……。ぜ、全部、ですか？」

救世主であるはずの真耶の顔が引きつる。滅茶苦茶困っているのが見て取れた。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階で分からない人ってどれくらいいますか？」

シーンと静まり返る教室。誰も挙手しない。

見かねた千冬が教室の端から訪ねてきた。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パシインツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「うおお、おおお……あ、頭が……割れる……！」

「後で再発行してやるから、1週間以内で覚えろ。いいな」

「……いい、いや、1週間であの厚さはちよつと」

「やれと言っている」

「……はい」

ぎろりと睨まれ、一夏はしづしづ了承する。

それを見て、千冬がやりきれなさそうにかぶりを振った。

「まったく、五反田でも理解しているというのに」

「そうだぞ一夏。おまえ、馬鹿になったんじゃないのか？」

「うっ、いや、でも、お前本当に理解してんのか!？」

弾にまで馬鹿扱いされた一夏はかつとなつて叫ぶ。さつきからやたらしたり顔をしている弾を見るのは、正直限界だ。

「当たり前だろ?」

すると弾は、さらにむかつく顔をして胸を張った。

「よし、じゃあ五反田。今までの授業を要約してみろ」

「ええ、いいですよ」

自信満々に答えた弾は、ぐつと親指を立て、

「要は、気合ですよね」

全く理解していなかった。

「五反田、お前というやつは……！」

「うおつ、千冬姉、何とか怒りを抑えてくれ！頼むから！」

「止めるな一夏ア……！今日という今日は叩きのめしてやる！」

先生と呼ばれていないことにも気づかず、こめかみに青筋を立て、今にも弾に襲い掛かりそうな千冬。そしてそれを羽交い絞めに行っている一夏。

カオスだった。

「あつ、振りほどかれた！」

「五反田アアアアアアアッ！」

一瞬の隙を突き、一夏を振りほどいた千冬が五反田に襲い掛かる。

弾は千冬の一撃を後ろに飛ぶことよってかわし、そのまま窓の棧に着地する。

「はっはっは！後は頼んだぜ、一夏！アデイオス！」

それだけ言い残し、弾は窓から外に飛び出していった。

あとに残されたのは、怒髪天を衝くとばかりに怒っている千冬と、一連の出来事を呆然と眺めていた一般生徒&真耶。そしてその全てに対して頭を抱えている一夏だった。

その後、中断されると思われた授業を普通に進めていったあたり、さすがはエリート
の学校だと一夏が感心するのはまた別の話だ。

〈 2

「ちよつとよろしくて?」

「へ?」

とてつもなく疲れた二時限目が終わり(弾はまだ帰ってきていない)、これからの学園生活は大丈夫なのかと一夏が頭を抱えていると、いきなり声がかかった。

話しかけてきたのは、金髪とブルーの瞳がきれいな、いかにも『高貴』といった感じの女生徒だ。金髪ロールとはあざとい。

IS学園は世界の一つしかないというその性質上、日本以外の国から入学してくるのも珍しくはない。IS運用協定の中でも無条件に受け入れなければならないと決めら

れている。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……何の用だ？」

「まあ！なんですよ、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるのではないかしら？」

一夏は重たい頭をさらに抱えたくなくなった。

女尊男卑の風潮が広まってから、男が女に尽くすのは当たり前という考えが浸透したのだ。多くはないが、街へ繰り出せばたまに会う。

正直、そういう輩は得意じゃない。

ISは確かに強力だが、粗暴な力はただの暴力だ。一夏はそれを、千冬と弾から嫌になるほど聞かされているし、理解している。

だからこそ、ISを動かせるだけで偉ぶっている女性は苦手なのだ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席

「この私を!？」

「あ、質問良いか？」

「ふん。下々のものの要求にこたえてやるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

「がた、とずっこける生徒がちらほら見えた。自己紹介の時もそうだったが、結構ノリがいい。」

そしてその時、教室のドアが開いた。

「ははははははははははッ！お前馬鹿だろ一夏。字面から分かれ」
「弾、戻ってきてたのかよ」

開いたドアから大笑いしながら入ってきたのは、さつき窓からどこかへ逃走した五反田弾だ。わきに紙袋を抱えている。

ちなみに代表候補生というのは読んで字のごとく国家代表の候補のことだ。

「つて、お前それ！鷹羽ベーカーリーのパンじゃねえか！」

「おう、ちよつと小腹がすいたんでな。行つたら、丁度焼き上がりだよ。何個か買つてきた。何がいい？」

「カレーパン」

「迷いなく一番人気を取るかよ。いい性格してやがるぜ」

「うっせ。千冬ね……織斑先生をなだめるの大変だったんだぞ」

「わかつた、わかつたよ。ほれ」

ぼん、と一夏にカレーパンを投げる弾。そのまま紙袋から自分のカレーパンを取り出して食べ始める。

「うそ、鷹羽ベーカリーって超有名店じゃん。行つても大体売り切れつていう」

「すごいすごい」

「いや、でも鷹羽ベーカリーって隣の県じゃなかった？こつちにできてたっけ？」

教室がざわめく中、セシリア・オルコットが怒りに体を震わせていた。千冬といい、セシリアといい、体を震わせるのが流行っているのかもしれない。

「あ、悪い。で？国の代表候補生さんが俺になんか用か？」

「なんですのその言い方！私を誰だと思っっていますの！」

「だから、エリートなんだろう」

「そう！エリートなのですわ！」

びしつと胸を張るセシリアを見て、弾が一夏の後ろで少し吹きだしていた。幸いセシリアは気付いていないため、余計な面倒事は起きないようなのでほっとする。

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「そんなことはないぞ」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを動かせると聞いて、少しくらい知的さを感じさせるかと思いましたが、期待はずれですわね」

「ははは。滅茶苦茶言われてんじゃねえか、一夏」

ついに堪えられなくなったのか、弾が大笑いしながら会話に割り込んできた。

「何を笑っていますの？あなたも入っているのですわよ？」

「え、マジで？一夏と一緒にされてんのかよ。ひでえ」

「いえ、あなたの方がもっと酷いですわね。なんなんですか？さっきの授業は。さすが極東のサルというところですよ。——まあ、ISのことで何かわからないところがあれば、そうですね……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。なにせ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一という部分をずいぶんと強調して自慢するセシリア。だが、一夏はちよつとした引つ掛かりを感じた。

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試はありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。というか、弾も倒したよな？」

「ああ、やってやったぜ。あれは楽しかったな」

「わ、私だけと聞きましたか……?」

「女子ではっていうオチじゃないのか?」

「つ、つまり、私だけではないと……?」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!?! たぶんってどういう意味かしら!?!」

「えーつと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キーンコーンカーンコーン。

話に割ってきたのは三次元目開始のチャイムだ。一夏には福音に聞こえていた。

「つ……! またあとでできますわ! 逃げないことね! よくつて!?!」

「おう、いつでもいいぜ」

「いや、弾。何勝手に答えてんだよ」

「いいじゃねえか。面白そうだろ?」

「全然面白そうじゃねえよ……」

ぼやきつつ席に座ると、真耶ではなく千冬が教壇に立った。どうやら、この時間は千冬が教鞭をとるようだ。

「再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めようと思う。クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議などいろいろやってもらうから、要はクラス長と考えてくれればいい。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大差はないが、競争は向上心を生む。一度決まれば一年間変更はないから、そのつもりで」

「はい！織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「私は五反田君を推薦します！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！」

なんだか流されそうになったが、思い直して驚愕した。立ち上がってしまったので、教室中の視線を独占する羽目になった。今日で何度目ですかね？

「というか、なんで弾は推薦されたのに候補に入らないんだよ!？」

「あー……五反田はだめだ。大人の事情で」

「大人の事情ってなんだよ!？」

「とにかく、他になれば無投票当選だぞ」

「ちよつ!?!お、俺はそんなのやらな——」

「待つてください! 納得がいきませんわ!」

バンツ、と勢いよく机を叩いて抗議したのはさっきのセシリアだった。

きりつと整った顔を怒りにゆがませている。

「そのような選出は認められません! だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ! 私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

セシリアは机をバンバンと叩きながら猛抗議。

ちなみにそんな喧騒の中、弾だけはすやすやと夢の世界に旅立っている。

「実力からいけば私がクラス代表になるのは必然！それを物珍しいからという理由で東のサルに任されては困ります！私はこのような島国までIS技術の修練に来たのであって、サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

いいですか!?代表は実力トップの人間がなるべき、そしてそれは私！

だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなきゃいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で——」

一夏は限界だった。とさかに来たってやつだ。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!!あ、あなた！私の祖国を侮辱しますの!?!」

「先に侮辱したのはそっちだ」

「決闘ですわ！」

パンツ、と先程よりも断然強い力でセシリアが机を叩いた。一夏としても、これ以上は我慢がならなかった。

——いいさ。決闘でもなんでも受けてやる。

「おう。いい」その勝負、俺が買おう!」ぜ——つて、弾!いつ起きた!」「さつきだ。こううるさくちやあな、おちおち眠つてもいらねえ。

——というわけで、俺も混ぜてもらおうぜ? エリートさんよお」

「ふん。いいですわよ。どうせあなたも叩き潰さなくちやいけないのですから」
「……ふむ、五反田はさつきも言った通り代表にはなれないが、いいんだな?」
「ええ、千冬さん」

はっ、と鼻で笑つて、弾は愉悦に口をゆがませる。一夏としても久しぶりに見る、弾が面白いおもちゃを見つけた時の顔だ。

「言つておきますけど、わざと負けたりしたら小間使い、いえ、奴隷にして差し上げますわ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐つちやいない」

「真剣勝負? 何言つてるんだ一夏。こんなの、ただの遊びだろ」

「なっ!あなた、ふざけているの!?!」

「ふざけてなんかねえよ。あんなおもちゃを身に着けて勝負だなんだとほざいてる方が、よっぽどふざけてるぜ」

「あ、あ、ああ、あなたは……ッ!」

「んなことはどうでもいいんだよ。で？ハンデはどのくらいつけるんだ？」

「は、はは、なんですか？息が割った割には、さっそくお願いかしら？」

「何言ってるんだ。俺がつけるハンデの話だよ」

そう弾が言った瞬間、クラスは大爆笑に包まれた。

「ご、五反田君、それ本気で言ってる？」

「男が女より強かったのは、大昔の話だよ？」

「五反田君も織斑君も、そりゃISは使えるかもしれないけど、言い過ぎよ」

口々に弾と一夏をたしなめる言葉が笑いと共に吐き出される。一夏はそれを聞き、不愉快に眉をひそめることしかできなかった。

今、男性は圧倒的に弱い。ISが生まれてから、腕力は何の役にも立たなくなった。いや、腕力自体は兵器が生まれてから使われなくなったが、ISでそれが極まったと

いったほうがいいだろう。

だが、一夏は知っている。

腕力の強さを。その究極系を。

教室が笑いに包まれる中、千冬がそれを手を叩いて黙らせる。

「織斑はハンデなしだが、五反田は必要だろう。右腕一本だ」

その言葉に、教室は先程とはまた違った意味でざわついた。

あたりまえはあたりまえだが、一番食いついたのはセシリアだった。

「な……っ、織斑先生！それはどういうことですか！私が極東のサルに腕一本封印されないで勝てないと思っっているのですか!？」

「勘違いしているようだが、右腕一本の封印じゃない。右腕一本だけの使用だ」

「な……っ！」

その言葉に、完全に絶句させられる一同。

それに構わず、千冬は続ける。

「さて、話はまとまったな。それでは、勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。対戦の順番は追って知らせる。各々、準備しておくように。さあ、実戦に使用する各種装備の特性についての授業を始めるぞ」

数々の不満と困惑を残しながらも、千冬は授業を進め始める。これ以上長引かせてもどうせ収集はつかないのだから、勝手にやらせようということらしい。何とも千冬らしい、と一夏は思った。

ふと横を見れば、弾が本当に楽しそうに笑っている。遊びだなんだとは言っておきながら、相当楽しみらしい。

そんな親友の姿を見て一夏は、戦いまでに最大限の努力はしておこうと、慣れない教科書を開きながら机にかじりついた。

Normal day?

現在、一夏と弾は寮内の廊下を歩いていた。IS学園は全寮制なので、これから三年間、ここで生活していくことになる。

一夏は1025室。弾はその隣だ。

寮は一部屋二人なのだが、なぜか一夏と弾はわけられている。元々、一夏と弾は一週間ほど自宅から通う手筈だったが、事情も事情なので急遽部屋を割り振った為、変な部屋割になったらしい。真耶がそう言っていた。

その時に一悶着あり、一夏にホモ疑惑がかかったのだが、それは割愛する。

「おつ、こつこつだな」

しばらく歩いて、一夏が自分の部屋をみつけた。

弾はその奥なのでここで別れ、一夏はドアに鍵をさす。すると、ドアがもう開いていることに気づいた。

特に気にせず、そのまま部屋に入る。まず目についたのは大きなベッド。ビジネスホ

テルのものよりも確実に良いものだろう。それが二つ並んでいる。

「これはすげえな。流石国立」

ベッドを触りながら呟いた。ぎつと見渡しても、質の良いものがいろいろ揃えられている。

「誰かいるのか？」

ベッドの柔らかさにはしゃいでいると、突然部屋の奥の方から声が聞こえた。声に曇りがあるので、ドアごしだということがわかる。

真耶が、全室にシャワーが付いていると言っていたことを思い出した。

「ああ、同室になった者か。これからよろしく頼むぞ」

聞き覚えがある、なんてレベルの声じゃない。それは間違いなく、今日再会したばかりの幼馴染みのものだ。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之——」
「箒」

どうやら相手が女子だと思っていたらしく（それはそうだ）、シャワーを使っていたままの、体にバスタオル一枚巻いただけの姿である。白いバスタオルの面積はいろいろな意味でギリギリで、その端から下はみずみずしい太ももが露出していた。健康的な白い肌を、水滴が脚線に沿って滑り落ちる。

「……………」

一夏の行動は迅速だった。呆然としている箒のもとからすぐさま離脱、背をむける。弾とつるんでいれば、このぐらいはできないと生き残れない。過酷な中学生活に初めて感謝した。

「ひ、ヒャウっ!?!」

ようやく箒の思考が正常作動したようだ。慌てて体を隠して後ずさったのが音でわかる。

一夏はというと、幼馴染みの（どことは言わないが）成長した姿を見て緊張していた。箒は意外と着痩せするタイプのようで、本来制服に隠されている綺麗な肢体が、わざとではなくても脳裏に焼き付いて離れない。

「な、なぜお前がここにいる？」

「い、いや、俺もこの部屋なんだけど」

瞬間、一夏は身の危険を感じて横に跳んだ。

直後、ドスツと鈍い音が部屋を貫ける。恐る恐る振り向くと、一夏の体が在った場所に木刀が振り下ろされていた。

「ほ、箒サン？それは一体どこから!？」

「そんなことはどうでもいい！男女七歳にして同衾せず。常識だ！」

そのまま箒は一夏の制止の声も聞かずに切っ先をかえす。上段から繰り出される打

突を避けて、飛ぶように廊下に出た。

「助かった——」

鬼神と化した幼馴染みより逃れ、安堵したその瞬間、

ドスンッ！

もたれ掛かっていたドアを貫き、顔面のすぐそばに木刀が出現した。

数秒制止した後、ゆっくりと切っ先が部屋の中に沈んでいき、

ズドンッ！

「つて、危な!?死ぬ!これ当たったら死ぬッ!」

「さつきからうるせえな。何してんだよ、一夏」

かったるように、弾が隣の部屋から出てきた。小指で耳の中をかいて、ついたカスをふっと吹く。

「だ、弾。丁度良かった。ちょっと、そっちに匿ってくれ!」

「あア……?」

懇願する一夏を、弾は黙ったままじつと見つめた。いや、見つめたというより、品定めか状況を読もうとしているようだ。

その間に、騒ぎを聞きつけた女子たちがわらわらと集まってくる。

「……なにになに?」

「あつ、織斑君と五反田君だ!」

「えーつ、あそこつて二人の部屋なんだ!いい情報ゲット!」

きやいきやいと騒ぐ女子は全員がラフなルームウェアで、男の目など気にしていない恰好だった。すらりと覗く生足や、大胆に開いた胸元を意識しない男などいないだろう。当然、一夏もそんな奴の一人だ。

「頼む、弾!早くしてくれ!」

「ふうん……大体理解したぜ。つまりは、お前がヤっちゃまったってわけだな?」

「ヤってねえよ!?!てか、お前わかってんだろ!?!」

「俺、ちよつと用事思い出したわ。……ガチャガチャと。よし、戸締りオツケー」

「わざわざ擬音語を言ってるのがむかつく！てか、え？本当にいつちやうの？俺は？
ねえ、俺は!？」

「さーて、群馬はどつちだったけなあ？」

「お前どこ行く気だあああ！弾、弾！弾ああああんんんんッ！」

〈 1

あれから翌日、一年生寮の食堂で、一夏と箒は同じテーブルについているにもかかわらず会話もなく朝食を口に運んでいた。

別に一人でもないのに会話のない朝食は、意外とつらい。

昨夜、弾が一夏を見捨てた後、徐々に増えていく人ごみに耐えきれなくなった一夏は箒に懇願して部屋に入ることができた。しかし色々あつて口論になり、発展して暴力へ。結局、一夏が木刀を頭に食らうという形でけりがつく。

それ自体は思うところがないわけではないが、おおむね一夏の失態なので甘んじて受けた。問題は、さらにその後、というか今現在まで続くガン無視である。

「なあ……」

「……………」

「なあって、いつまで怒ってるんだ？」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

といった感じだ。にべもない。

ちなみに一夏の朝食は和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁。それと浅漬
け。箸も同じ和食セットだ。

「箸、これうまいな」

「……………」

やはり無視された。

昨日からずっとこんなもんだから、気が休まらない。

そしてこんなものといえば、女子の視線も変わらない。現に今も、

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬様の弟らしいわよ」

「なにそれすごい」

「もう一人は？」

「今はいないみたいね……」

とこんな感じである。

「なあ、箒——」

「な、名前で呼ぶなっ」

「篠ノ之さん」

「……」

言われたとおり、名前で呼ばなかったのに無視された。しかも今度はあからさまに不機嫌顔だ。この苗字はいろいろと因縁があるから仕方ないのかもしれないが。

「お、織斑君、隣いいかな？」

「へ？」

みれば、朝食のトレーを持った女子三人がいた。一夏の返事をそわそわしながら待っている。

特に断る必要もないので承諾すると、三人が三人とも喜んでいた。周囲はそれを見てなぜか悔しがっている。

「あれ、五反田君は？」

「ああ、弾か。あいつは朝弱いんだよ」

「え！意外……」

本当に意外。初めて知ったときは一夏も驚いたものだ。なにせ、無理やり起こされて不機嫌な弾にぶん殴られたのだから。それ以降、一夏は弾の眠りを極力妨げないようにしている。

ちなみにそれは朝だけの限定条件だ。朝以外なら大丈夫なのだが、それが不思議で仕方ない。

「つと、やつときたか」

弾がゆつくりとした足取りで食堂に入ってきた。ぼさぼさの髪、肩まではだけた『ブルジョワジー』とかかれたT―シャツ。短パンがずり落ちそうになっているあの姿は、五反田弾に違いない。

「うわあ、なんかすごい」

「同感だ」

バイキングの料理を根こそぎとってくる弾を見て、皆が息をのんだ。食べる場所を探している最中でこちらに気づいたらしい弾が、のろのろとやってくる。

「よお、おはよう。朝はだらしないな」

「……ああ、おはあ」

半ばおはようとあくびが一緒になってしまっていた。もさもさとサラダを食べ始め

るその口も、微妙に開いている。

「……織斑、私は先に行く」

「ん。またあとでな」

箒が学食から出ていった。後姿がもうサムライのような感じで、昔からかわっている。
い。

それから三人組とちよつとした会話を楽しんでいると、千冬が来て時間が押していることを告げた。どうやら、千冬は一年寮の寮長もやっているらしい。

そのころには弾もようやく覚醒して、朝食をぱつと済ませてしまった。
だから食堂を出るとき、一夏は弾だけに聞こえるように言っただけでやる。

「弾。今日はばれなかったが、食堂にパンツで来るのはやめろ」

「ん？あ、本当だ。これ短パンじゃなくてパンツじゃん」

「気づいてなかったんかい！」

二日目の授業、ついていけません。

二時限目が終わった時点でもうグロッキーだった。

ISはうんたらかんたら、パートナーとみることでなんとか。意味が分からない。馬の耳に念仏のような状態だ。

キーンコーンカーンコーン、という授業の終了を知らせるチャイムがものすごくうれしかった。

「あつ。えっと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりまますからね」

真耶がそれだけ言って授業が終わる。真耶と千冬が教室から出て行ったのを見計らって、女子たちが押し寄せてきた。

「はいはいはい！質問質問！」

「お昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

「いや、一度に訊かれても——」

矢継ぎ早に飛んでくる質問に四苦八苦していると、こちらをにらんでくる視線に気が付いた。箒だ。

相変わらず怒ったような、不機嫌な顔をしている。

「放っておいていいのか、一夏？」

「うーん、ISのことを聞こうと思ってたんだけど、これじゃあな」

「お前は……」

弾は顔に手を当ててため息をついた。

ダメだこいつは、という顔だ。むかつく。

「休み時間は終わりだ。散れ」

千冬が教室に入ってきたことで、蜘蛛の子を散らすように女子は自分の席に帰っていった。まるでモーゼだ。

「ああ、そうだ。織斑、五反田。おまえらのISだが、準備に時間がかかる」

「……?」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「??」

一夏と弾がちんぷんかんぷんでいると、教室がざわついた。

「せ、専用機?!一年の、この時期に!」

「つまりそれって、政府から支援が出てるってことで……」

「なにそれすごい」

く。
何がすごいのかよくわからないでぼけっとしてっていると、千冬が呆れたようにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え?えーと、『現在、幅広く国家・企業に（中略）状況下で禁止されています』」

「つまり、そういうことだ。本来ならIS専用機は国家、あるいは企業に所属している人間にしか与えられない。が、お前らは特殊だからな。特別、データ採取の為に専用機が

贈られるわけだ。まあ、本当はどちらか一人だったんだが、馬鹿が介入してな。二人とも授与されるから、そのつもりで」

「馬鹿って……」

「それはどうでもいいんだ。さて、授業を始めるぞ」

千冬は早々に切り上げてしまいが、一夏は『馬鹿』がだれだか簡単に想像できた。

篠ノ之束。ISを作った張本人であり、現在行方をくらましている篠ノ之箒の実姉。

ちらと箒を見れば、変わらず不機嫌顔だった。ただし、さつきとは違いどこか棘を感じさせる、そんな顔だった。

〈〈 3

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、あのセシリア・オルコットが一夏と弾の前に来ていた。腰に手を当てていて、相変わらずの高貴（笑）具合である。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」
「？なんで？」

「ばっか、一夏。こいつはイギリスの国家代表候補生で、専用機は国家、あるいは企業に所属する人間に与えられるんだぜ」

「ああ、なるほど。つまり、専用機を持っているわけだ」

「そうですわ！さっきの授業でやっていた通り、ISは467機だけ。その中で専用機を持つ者は、全人類のなかでもエリートというわけですわ！」

ほへえ、と一夏が感心していると、セシリアの話にまったく興味のない弾が箒のもとへ歩いていっていた。

どうやら、飯を食いにいこうと誘っているようだ。

「つて、あなた！聞いてますの!？」

「——いいじゃねえか、行こうぜ？あいつと二人になれるぜ」

「な、なんでここであいつの名が出てくるのだ」

「聞いてませんわね？聞いてませんわね!？」

セシリアが騒ぐのにも構わず、弾と箒は楽しそうに（？）喋っている。箒が弾に何か言われて顔を赤くしているのが見て取れた。

「くっ……そのあなた！」

「ん？……どうした」

「あなた、篠ノ之博士の妹なんですってね？」

「妹というだけだ。私はあの人じゃない」

箒の目が鋭く光る。その威圧に気圧されたセシリアはうつとひるんで、三下の雑魚が
いうようなセリフを残してどっか行ってしまった。

「それじゃ、飯食いに行くか。な？箒」

「……いや、一夏。私は……」

飯に行こうと誘つてもなかなか乗り気にならない箒に、弾は呆れたように肩をすくめて、一夏に何とか連れ出すように頼んだ。まかせとけ、と頼もしく頷いたので、一夏は強引にでも連れて行くだろう。それからは二人で仲良く学食デートしていればいと

思う。

邪魔してもあれなので、弾は密かに教室を出た。

〽 4

放課後、剣道場。昼に箒を学食へ連れ出すことに成功した一夏は、ついでにISの縦を見てくれるように箒に頼んだわけだが、なぜか打ち合うことになっていた。まあ、実力を確認するという意味ではいいのかもしれない。中学に入ってから剣道をやめてしまったので、かれこれ三年ぶりだ。鏑を落とすためにも、本気でかかろうと思う。

ギャラリーがめっちゃやるけども。

剣道場は結構広めなのだが、周りにびっしりとギャラリーがいるせいで狭く見えていた。どれだけ興味があるのだろうか。

気にしても仕方がないので、目の前の箒に集中する。

「始めっ！」

踏み出したのは同時。しかし性別による身体能力の差か、一夏の方がわずかに早い。

そのまま竹刀を振りかぶった。

「面ッ！」

振り下ろす。まっすぐに落とされた竹刀は、しかし箒によつて横から払われてしまつた。

「っ……っ！」

即座に後退、反撃を警戒しながら構えなおす。

お互いに硬直。ゆっくりと間合いを計りながら、相手の行動を読むことに腐心する。先に仕掛けたのは箒だった。

突然の強襲。おそらくまだ読み合いが続くだろうと思つていた一夏は意表を突かれた。どうやら、読み合いでは向こうが上らしい。

一歩で詰められ、竹刀が上から——来ない。

「胴ッ！」

フエイントを入れ、それに反応して竹刀を上にあげている一夏のがら空きになった胴に竹刀が襲いかかった。

瞬間、一夏は後ろに跳びながら自身の竹刀で箒の一撃をはたき落す。間一髪間に合、箒の竹刀は空を切った。

今度は一夏が仕掛ける。後退の為に下げた足に力を入れ、飛び出すように攻める。竹刀同士がぶつかって鏝ぜり合いになるが、腕力で勝る一夏が強引にこじ開けた。

そして、振り下ろす。

「め——！」

「籠手ッ！」

こじ開けられたと同時に重心をずらし、反撃の体勢を整えていた箒が一夏の籠手を打った。一本先取なので、これで終了だ。

静まり返っていたギャラリーが、ざわざわと騒ぎ始める。

「負けちゃったね、織斑君」

「でもすごかったよ！」

「さすがは千冬様の弟ね」

そんな声を聞きながら、一夏は防具を脱いだ。

「ふう……。やつぱきつい」

「ふんつ。弱くなつたんじやないのかお前。昔は負けなかつただろう」

「昔は昔だろ。箒が強くなつたんだよ。それに、こっちは三年もブランクがあるんだ」

「ブランク？一夏お前、中学校では何部に入っていた？」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「帰宅部で、今の動きか？そっちの方が信じられん」

「ああ……。まあ、普通じやなかつたからな。弾とつるんでは、必然的に体が鍛えられるんだよ」

「またあいつか……。一体、どれくらい強いんだ……。？」

「実際に見てみれば？ほれ、噂をすればなんとやらつてやつだ」

一夏が剣道場の入り口を見ると、ひとりの男が立っていた。Y—シャツに黒のズボン

という普通の格好をしたそいつは、もちろん弾だ。手に何か長いものを持っている。

「ほらよ。取ってきてやったぜ」

「悪いな、弾」

ぽいつと投げられる長いもの——二振りの木刀を見て、箒が顔つきを変えた。なにせ、木刀自体に傷が縦横無尽に走っているのだ。それも、何かに打ち付けたりされた外
部によってつけられた傷だから、余計に目を引く。

「一夏、これは……」

「俺の愛刀。二刀流なんだよ、俺」

木刀が手に馴染むかどうか確認しながら答えた。ちなみに、公式の剣道でも二刀流は認められているが、さつき一夏が使わなかったのはそれが完全に我流だからだ。型も何も関係ない、もつとも戦いやすいやり方を追求した結果、あそこに落ち着いた。

「んじゃあ、久しぶりに組手するか」

「おう。ルールは？」

「いつも通り。無制限一本勝負、今回は腕」

「了、解——！」

始めの合図も無しに一夏は駆けだした。一夏と弾の模擬戦に無粋な制限など何も無い。ただ、強くなれるようにと始めたのがこれなのだ。

まずは一閃。弾はそれを上体をそらすことでかわした。

続けて突きを放つ。容赦なく顔面を狙った一撃を、弾はこともなげに顔を動かしただけで回避する。

さらに、さらに、さらにさらにさらにさらに。

息をつかせることなく打ち込んでいく。だが、弾はそれらすべてをその場から一步も動かさずにかわしてしまう。

「おおッ！」

一夏が咆えた。不意を突いて体を回転。勢いのまま遠心力を取り入れた一撃が弾を襲う。

そこでやつと弾が回避以外の方法、右腕で竹刀を掴むことで攻撃を凌いだ。ルールの『腕一』とは、腕一本だけの使用ということ。セシリアと戦う時と同じ条件であるが、弾はまだ本気も全力も出していない。弾にしてみれば今のこれも遊びに他ならないのだから。

それが悔しくて、一夏は止まらない。止まらない。掴まれたのなら、掴ませておけばいい。木刀を掴むために伸ばした腕は、格好の餌食だ。

「はあッ！」

腕をめがけて木刀を振り下ろして、そこで気づく。自分が空中に投げ飛ばされているということに。

いつの間に飛ばされたのかすら認識できなかったが、いるのは弾のほぼ真上。好都合だ。

空中で一回転して、天井に足をつける。天井を蹴るなんて馬鹿げたやり方で落下、脳天に木刀を叩き込んだ。

しかし、それも腕で防がれる。防がれたままにしておくほどのんきしている一夏ではなく、さつと身を引いて構えなおした。

「はっ。そろそろ終わりにするか、一夏」

「……そうだな」

短く答え、意識を集中する。残されたのは後一撃。それに全てをかける。

「おおおおおおおおおおおッ！」

咆哮と共に駆け出し、弾から唯一教えてもらった技を使う。胸の前で二刀を交差し、突き出すように振りぬくその技は、速さにして時速1200キロメートル。音速に迫ろうかというその一撃をかわす術など、どこにもない。

「——瞬剣ッッ」

気合一閃。腕がかすむように見えるほどの速度で斬りつける。
だが、

「――瞬拳」

それよりも速い一撃によつて淘汰された。拳の衝撃波が木刀を吹き飛ばし、刀身に罅が入ったのが分かる。弾の持つてきたあの木刀は特殊樹脂と特殊合金、その他もろもろで作られた『世界一壊れない』木刀のはずだが、二、三回使つたら取り替えなければならぬ。驚愕するべきは、弾の力だろう。

胸を打つ衝撃に意識を暗転させながら一夏が最後に見たのは、力加減を間違えて「やっちまった」という感じにこちらを見ている弾の姿だった。

Bloody lord

対戦の順番は、まず一夏とセシリア。その次にセシリアと弾。最後が一夏と弾、というように決まった。弾からしてみればおおよそ期待通りの順番である。

そして今日はその対戦当日。なのだが、肝心の専用機が届かない。後で戦う弾はともかく、一夏としては気が気でならないだろう。さつきからそわそわしている。

関係者以外はいれないピットになぜ箒がいるのかは置いといて、一夏と弾は専用機が来るのをじっと待った。

「……」

「……」

「……（こねえな）」

「……（こないな）」

「……」

「……」

「……帰っていいか?」

「いや、だめだろ……」

「だよなあ……」

「……素数でも数えれば？」

「俺は神父じゃないし、あれは落ち着くためにやるもんだ」

「なら、ロードローラー持って来い」

「ああ、そいつはいいな」

「千冬姉がプッツンするだろうけど」

「はあ……。おまえらはさつきから何を話しているんだ？」

收拾がつかなくなり始めたところで箒が割り込んでくる。当たり前だが、知らない人はついてこれない。

弾との会話は途切れるが、一夏には一つの懸念があった。

「ていうか、俺らISの操縦方法知らないんだけど？」

この一週間、ISの操縦を箒から学ぶ算段だったはずだ。それがなぜ、弾対剣道部全員十一夏になったのだろうか？

いや、百歩譲ってそれは良いということにしよう。ではなぜ、それ以外の時間にも縦を学べなかつたのか？

「……」

「箒、目をそらすな」

「……仕方ないだろう」

「実はISのことよく知らないなんてオチねえよ……」

そう実は、箒さんはISのことをよく知らなかつたのです。

姉である束を嫌っている節があるし、そしてISがその姉によつて作られたものなら知らなくても不思議はないのかもしれないが、一夏に教えるといった手前それはどうなのだろう。

疑問が尽きないが、真耶がやってきたので会話は終わりだ。

どうやらやつと専用機が到着したらしい。さつそく専用機のもとへ。

——それは『白』だった。

兵器とは思えぬほどに綺麗な、まるで芸術品のような『白』い機体。

それが一夏を待っていた。

ピット内のリアルタイムモニターで、弾とその他もろもろは一夏の試合を見ていた。

開始から十分、一夏はセンスがあつたらしく、大方の操縦法を体で覚えたようだ。ただ、武器が近接ブレードしかないようで、五機のピットとレーザーライフルを繰るセリアとの相性は最悪。今も何とか耐え忍んでいるという感じである。

真耶は「初めてなのにすごい」と褒めていたが、弾からすれば一夏の動きは稚拙に限る。ISを使っているという事実もあるだろう。だが、慣れない銃を扱っているというわけでもないのだ。明らかに冷静さを欠いている。

例を挙げるのならあのピット。あれが自分の反応が一番遠い角度をついてくるのは、少し考えればすぐ分かるだろう。セリアがピットを動かしているときに動くことができないのは、一分もすれば見当がつかはずだ。

それに気づかない。

平凡な一般人ならともかく、一夏は弾が認め、そして三年間つるんだ奴だ。この程度なわけがない。

あるいは、やはりISというぬるま湯が一夏の温度を下げてしまったということか。

「……」

モニターの中でやっと、一夏がセシリアのビットについて気づいた。得意げに語り、見破られたセシリアがあからさまに動揺している。

「……茶番だ」

吐き捨て、弾はモニターに背を向けた。

「おい五反田。どこへ行く?」

「機体の調整を終わらせます。すぐ、終わりますから」

特に止められるわけでもなく、弾は自身の専用機のもとへ行く。あの試合がそう長くならないということは、千冬も感じているのだろう。

弾がモニターの前から去った十分後、試合はセシリアの勝利で幕を閉じる。一夏の敗因は、技の特性を考えず、エネルギー残量の注意を怠ったことであった。

弾が言ったように、それはぬるくなつたということだろう。だが、弾は肝心なところを見逃していた。あるいは、らしくもなく忘れていた。

織斑一夏のバカは感染する。

◇ 2

ピットに降り立つた一夏は、拳を壁に叩き付けた。負けたから悔しくて、なんて理由じゃない。己の不甲斐なさにだ。

さっきの試合はなんだ？あの無様はなんだ？

思い出すだけで腸が煮えくり返る。

ISに乗って気分が昂揚していたことは認めよう。途中やられそうになって、漫画のように進化し、尊敬する姉と同じ剣を持って戦うことに胸を躍らせたのも認める。

それで冷静さを欠いた、とでもいうつもりか自分は。
なんて、恥知らずな。

「……くそッ！」

ISを解除して、素の拳で壁を殴った。何度も何度も。止められるまでずっと。千冬の止め方は乱暴だった。出席簿で叩く、それだけ。

一夏を止めた千冬が言う。

——そろそろ五反田の試合が始まるぞ。

弾。魔人と称されたあの男が戦うか。

頬を叩いて、一夏は気合を入れなおす。それが終われば、次は自分だ。弾に不甲斐ない格好は見せられない。

かつてを取り戻すために、一夏はリアルタイムモニターを食い入るように見つめた。

◇ 3

弾がアリーナへ出たとき、それを見ていた人間は全員息をのんだ。

誰もがISを纏っていないことに疑問を浮かべ、そしてISを纏っていることを理解して驚愕した。

弾のISは、もはやISではなかった。

第一に、体を覆う装甲がない。

あるのは黒い籠手と脚絆、体にぴったりと合う袖のない戦闘衣に、ゆったりとしたズ

ボン。ただそれだけ。

次に、装備がない。

武器もスラストターモ、ハイパーセンサも無かった。

異様すぎる。異質すぎる。

当然、対戦者であるセシリアも驚きを隠せなかった。

「なんなんですよ、それ……？」

「さあな、俺にもよくわからん。こんなものもできちまったし」

弾は自身の右肩を指差す。そこには赤黒い刺青があった。見るだけで総毛立ちそう
な、烈火のごとき刺青だ。

それはただのISの待機状態であるが、なぜ展開しているのにあるのか。

セシリアはハイパーセンサで刺青を見て、理解した。

それは血だ。間違うことなく、弾自身の血である。

セシリアはある意味納得した。さつきからセンサが送ってきていた敵機の名称に合
点があったのだ。

弾の繰る機体の名。

——『ブラッディ・ロード』

なんという皮肉か。貴族（ブルーブラッド）であるセシリアと戦うのが魔人だとは。まったく笑えない。笑えなくて笑えなくて、笑ってしまいそうだ。

ほんの少しだけ男という生物を、セシリアは理解したから。織斑一夏から、ほんの少しだけ垣間見ることができたから。

ゆえに、淘汰して見せよう。

それが、純潔（ブルーブラッド）の誇りだ。

「へえ、いい顔してくれるじゃねえか。一夏も伊達じゃなかったってか」

「ええ。なかなか、刺激的でしたわ」

また一夏に惚れたやつが出たらしい。どんどんライバルが増えていつていることを知ったらあの娘はどんな顔をするだろうか？

おそらく蹴られることになる一夏にはご愁傷様といっておこう。

「言っておきますけれど、さっきまでの私ではありませんわよ」

「はっ。なら少しは、本気を出せそうだ」

一夏はぬるくなったが、他を温める程度の温度はまだ保っていた。嬉しい誤算だ。惜しむらくは、一夏が以前のようであつたならば、セシリアはさらに飛躍したであろうということ。

それでも、退屈だと思つていたものが芳醇な香りを漂わせてきた。それだけで弾は良かった。

弾に課せられたハンデは腕一本だけの使用。今となつては、余分なハンデかもしれない。

「叩き潰してあげますわ」

笑う弾を前に、セシリアは見栄を張る。

魔人を前に啖呵を——切った。

「セシリア・オルコットの本気の全力、魅せてあげますわ！」
「いいぜ、来いよ。——テメエに弾痕を刻み付けてやるッ！」

開幕、セシリアは手に持つ『スターライトMkⅢ』で弾を狙撃する。弾のISは装甲がない。ということは、それだけ『絶対防御』が発動しやすいということだ。ビーム一つでも喰らえば、たちまちエネルギーを馬鹿食いしてそれが発動する。

当たればの話だが。

迫るビームを、弾は叩き落とす。拳でビームを叩き落とすなどあまりにも非常識だが、弾はこともなげにやってみせる。

「ああ、まったく。規格外ですね、あなたは」

セシリアは顔をひきつらせてつぶやいた。まあ、正面からの一撃はすべて無効化されるのだから、やっつけられないだろう。

「諦めんのか？」

「馬鹿なことを言うもんじゃありませんわ……！」

だが、闘志は消えない。彼女の瞳に満ちるのは、勝利への渴望だ。

弾はそれがたまらなくうれしい。ISが絶対防御などという無粋なものを搭載して

いなければ、さらに高みへ至ってくれただろうに。

それが無理でも、今は楽しもう。やっと彼女は敵になりえたのだから。

「はっはアツ！気合入れてけよオツ！」

地を蹴つて跳ぶ。この機体にはP I Cすら存在しないので、浮遊も飛翔もできない。だが、それでいい。それがいい。

一瞬でセシリアの前へと躍り出た弾はそのまま殴る。もちろん、右腕一本でだ。

超音速の一撃を出せることを考えれば遅い一撃だが、それでも威力は十二分にある。セシリアは抵抗もできずに吹き飛び、そのまま壁に激突した。

今のでどれだけ削れただろうか？ハイパーセンサがない弾にはよくわからないが、そうそう終わらせる気はない。加減に加減をして、遊んでやろう。

久しぶりに昂揚しているのだ。もっと長く味わっていたい。

おそらくセシリアは分かっているだろう。分かっているはずとも、今ので理解したはずだ。

セシリアでは弾に勝てない。

右腕一本だろうが指一本だろうが、セシリアは勝てない。

それで心が折れるか？しつぽを巻いて逃げ出してしまふのか？

「簡単に終わつてくれるなよ、セシリア・オルコット」

弾は、ただそれを願うのみである。

「終わりませんわよ……そう簡単には！」

六機のビットから一斉にビームが射出された。一夏に使った死角からの攻撃ではない、文字通りの一斉掃射だ。空中での移動方法がない弾は避けようがない。

だからといって甘んじて受ける弾でもない。微妙な発射タイミングのずれを見切り、コンマの差で早く来たビームから叩き落としていく。

「当たり前なさい！」

六機のビットを操る中で、セシリアが『スターライトMkⅢ』を撃った。ビットとの並行攻撃。この短時間でものにして見せたらしい。

「はっはア！そう来なくっちゃあな！」

叫び、ビームを蹴る。その反動でセシリアへ駆け、その銃身を掴んだ。そのままハンマー投げの要領で振り回して、上空に投げた。

「きゃあああああッ?!」

高速戦闘の訓練は受けているだろうが、高速でぶん投げられることなどなかっただろう。セシリアは悲鳴を上げて飛んで行く。

その隙にビットを破壊していく。命令がなければ動かないのだから、攻撃するわけでもなく止まっているビットを潰すのはたやすい。一つを残して、全部壊す。

我に戻ったセシリアからの狙撃を難なく避けて、弾はそれ以上の追撃をしない。

「くっ……馬鹿にして！」

激昂するセシリアの攻撃を、弾は何もせずに回避していく。

まだ何かあるだろう。出しきって見せろ。

「魅せてくれるんだろう、セシリア……!」

「あああああああああああああああッ!」

その時、変化が起きた。弾の横を通り過ぎたはずのビームが曲がり、さらに襲ってきたのだ。

他のビームも全て考えられないような軌道で弾に迫る。

『偏向射撃（フレキシブル）』。BT兵器の行きつく先。

ビームの軌道を変えるそれは、決して読ませぬ射撃を可能にする。

「ヒヤアハアアアアッ! いい、いいぜ! 最高だ!」

弾はさも嬉しそうに笑う。悪魔のような凶悪な笑みだ。

そして、弾の姿が掻き消えた。

瞬間、セシリアのハイパーセンサから上空へ警戒が鳴る。反射的に上を見て、セシリアは驚愕した。

弾がいる。魔人が拳を握ってそこにいる。

「刻み付けろ。これが俺のツ！」

——一撃だアアアアアツツ！」

——瞬拳。

音速を超えた拳がセシリアをとらえた。阻むものを尽くに破壊する魔人の拳。それが寸分たがわずセシリアの体を貫いた。絶対防御が発動し、シールドエネルギーの残量がゼロになる。

そして試合の終了を知らせるブザーが鳴り、ここに勝敗は決した。

◇◇ 4

一夏がアリーナへ出る。弾は当然のように、その王として君臨していた。
一夏は白く、弾は黒い。対照的な二人の姿がアリーナに描かれた。

「お前のおかげで楽しめたぜ」

弾が一夏に言う。そう言われて救われた気持ちになるが、しかし腑抜けた姿を見せたことには変わりがない。

「無様を晒した側として耳が痛い」

「無様はぬけたか？」

「……どうかな。そうだといいいけど」

一夏は苦笑して、頬をかく。締まった顔ではないけれど、眼光は鋭かった。

「だから、ちよつと借りてきたんだ」

そう言った一夏の手には本来の白式の武器である雪片式型の他に、もう一降りブレードが握られていた。ただの近接ブレードであるが、これで一夏得意の二刀流が使える。

それはすなわち、瞬剣が使えるということだ。

「弾。一撃だ。一撃で終わらせよう」

「いいのかよ?」

「ああ。そうしないと、俺は腑抜けたままだ」

それは、事実上の敗北宣言。一夏と弾の一撃決殺に、一夏の勝つ余地はないのだから。それを承知で、一夏は提案した。勝ち負けではなく、行うことに意味があるのだ。

「へえ、格好いいじゃねえか」

「……そうか」

「褒めてやったつてのにひどくねえか」

「言葉に心がこもってたらな。で、どうなんだ?」

「わかりきったこと聞くなよ。答えはYESだ」

一夏は二刀を交差するように構える。対して弾は自然体だ。

瞬剣、あるいは瞬拳というものに構えは存在しない。音速又はそれに準ずる速度での攻撃を、総じて『瞬剣(瞬拳)』という。

一夏の瞬剣は、二刀で攻撃しているように見えるが、実際は一刀だけで斬りつけてい

る。それは斬りつけない片方が速度を生み出すための触媒として使われるからだ。

踏み出しの速さに体の各所で生み出した速度を乗せ、さらに刀の反発力を利用した加速をつける。

その果てに繰りだされるのが一夏の『瞬剣』だ。

ISのスラスターを使える今、一夏の瞬剣は更なる高みへと昇る。

それができてこそ、腑抜けを返上できるというものだ。

「……」

力を溜める。まだ、解放の時じゃない。

相手の出方を見切ること。一撃で決まる戦いにおいて、これ以上に重要なことはない。

やがて時間が経ち、ギャラリーが一様に生唾を飲み込んだ瞬間、

「おおおおおおおおおおおおおおおッ！」

疾走。最高の一撃を放つために練り上げた力を一気に爆発させる。同時に『零落白

夜』を発動、あわよくば弾すらも切り裂いてみせんと咆哮を上げた。

「——瞬剣ッ！」

「——瞬拳ッ！」

拳と刀がぶつかり合い、甲高い音と共に衝撃波が吹き荒れる。数瞬の拮抗の後、弾が雪片式型を強引に吹き飛ばした。

がら空きになった一夏の胴体に、弾は次の一手を叩き込む。

——瞬閃。

その速度は瞬拳の倍。超音速の拳が一夏を穿ち、その体を木の葉のように吹き飛ばした。

吹き飛ばされながらも、一夏は悪い気分ではなかった。

一夏の一撃は音速を超えることができたのだから。手加減されてなお数瞬だとはいえ、弾と拮抗できたのだから。汚名返上には十分だろう。

そう考えたら、笑いが出てきた。こんな晴々とした気分はいつ以来だろうか？ 少なく

ともここ一年内にはない。

アリーナに大の字で倒れながらも、一夏は笑いをこらえることができなかつた。

Fate should never meet

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

試合の翌日、ホームルームで言われたその言葉に、一夏は一瞬何を言われたのか分からなかった。というより、わかりたくなかった。

青春熱血系マンガみたいな終わり方をしたが、それで終わりではないということですっかり忘れていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に全敗したわけですが、なんでクラス代表になつているんでせうか？」

「それは——」

「それは私が辞退したからですわ！」

がたんと音を立てながら、セシリアが立ち上がった。いつもの腰に手を当てたポーズ

である。だが、今日は一段と優雅というか気品が出ているっぽい。しかも嫌味じゃない。

何があつた？

「あの試合を終え、私もいろいろと考えさせられましたわ。一夏さん、あなたが男としてプライドを持っているのならおやりなさい！私に構うことはないのです！」

ぐっと親指を突き立ててくるセシリアさん。こいつ昨日の試合で頭打つたのかもしれない。そういえば弾に投げ飛ばされてたわ。

というか、弾はどうした？姿が見えない。あいつは昼食時とかときどきいなくなるけど、どこに行っているんだ？

まあ、いい。いないならばあいつに丸投げしてしまおう。

「織斑先生！弾でもいいんじゃないですか!？」

「あいつはだめだといったらう」

「そうだった……!」

最初に弾は代表になれないとか言ってた。大人の事情ってなんですかね？
いずれにしても、弾は実害が全くないわけだ。

「や……野郎オ〜」

「一夏さん、代表を任されるのに「野郎」なんてセリフを吐くもんじゃありませんわ。
こういうんですよ。」

『我が名は織斑一夏。我がクラスの期待の為に。前にいる姉織斑千冬の尊厳の為に。こ
の俺がクラス代表を務めてやる』

——こう言っただけで決めるんですよ！」

「セシリア、お前マジで大丈夫か……？」

本格的に頭打ってしまってるぞこいつ。薬もやってるかもしれない。

「さあ、一夏さん！」

「うあ……や、やめろ！催促するな！お、俺は代表にやりたくなんかない！」

「あきらめろ一夏」

「いや、でも千冬姉——」

バシインツ！

そんなこんなで、織斑一夏はクラス代表を務める運びとなったのだった。

＜ 1

「ではこれよりI Sの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。飛んで見せろ」

四月の下旬。今日も今日とてI S学園生徒はまじめに授業を受けていた。千冬の授業は厳しいから、とりわけまじめに取り組んでいるんだろう。

実際にやって見せろという千冬に頷く一夏とセシリアだったが、疑問を持つものがない。弾だ。

「千冬さん、俺は？」

「お前はP I Cがないのだろうか？というか織斑先生だ」

「おりいむらせんせえい」

「なめてんのかテメエ！」

千冬の口調が荒くなった。

真耶になだめられて冷静になった千冬が咳払いを一つして、一夏とセシリアに早くISを展開するように促す。若干頬に朱が混じっているの、恥ずかしかったらしい。それを見てきゅんとした生徒がいるとかいはないとか。

滅多に見れない姉の姿に一夏は苦笑し、ISを展開するために意識を集中させる。一夏のISの待機状態はガントレットだ。セシリアはイヤークラス、弾は右肩の刺青ということを考えると、少々ごつい印象を覚える。

『白式』（一夏の専用機）を呼び出すために一夏は右腕をつきだし、ガントレットを左手でつかむ。このポーズが一番イメージしやすいのだ。

光の粒子が舞い、体全体に膜のようなものが広まっていくのがわかる。スキンバリアが形成され、IS装甲が展開されるまで0.7秒。ふわりと体が軽くなり、各種センサーから莫大な量の情報が送られてきた。世界がさらに色鮮やかに染まっていくようで、一夏は地味にこの感覚を楽しみにしているのだ。

セシリアも展開を終えて、ふわりと浮遊していた。

「よし飛べ」

千冬の言葉でセシリアが急上昇し、遙か上空で静止する。一夏も拙いながら上昇のろのろと後に続いた。

「何をしている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

「まあまあ、千冬さん。乗り始めて一ヶ月もたつてねえ奴には酷だぜ」

「甘やかすとつけあがるだろう」

「手厳しいねえ」

地上で千冬と弾が会話しているのがわかる。ずいぶん離れているのに、近くで言われたように鮮明に聞こえてくるのだ。つくづくハイパーセンサとやらには感服させられる。

セシリア情報だと、これでもまだ機能制限がかけられているのだとか。

優等生セシリアさんのわかりやすい説明を聞いていると、箒の説明のひどさを思い出してしまう。

ぐつとする感じ。どんつという感覚。ズカーンという具合。これを聞いて理解できればすごい奴だ。もはや天才だろう。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地面から十センチだ」
「了解です。では一夏さん、お先に」

セシリアはそれだけ言つて、地上に向かう。あつという間に小さくなる背を見て、一夏はさすが代表候補生だと感心した。

完全停止も難なくやって見せたようなので、一夏も後に続く。スラスターをふかし、一気に地上へ。

ギユウンツ——ズドオオオウンツ！

地上にはついたが、一般的にはこれを墜落というらしい。クラスメイトの笑い声が一夏の心中を容赦なくえぐった。

「馬鹿者、誰が地面に激突しろといった。グラウンドに穴をあけてどうする」

「さすが一夏！俺たちにできないことを平然とやってのけるッそこにシビれる！あこがれるウー！」

「これ見よがしにネタ持つてきやがった、こいつ……」

とりあえず上昇し、姿勢を正す一夏。土煙がすごいことになっているが、シールドバリアのおかげで白式には汚れ一つない。

「情けないぞ一夏。昨日私が教えてやっただろう」

肩を落としている一夏を、箒がずばずばと切り捨てた。擬音と感性の塊を押しつけられては、ちつとも理解できないということに気づいてほしい。

仕方のない個性なのか、と半ば諦める一夏。

「貴様何か失礼なことを考えているだろう」

そんな一夏の気持ちを読み取ったのか、箒が小言を言ってきた。しかしセシリアがそれを遮る。

「一夏さん、お怪我はありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そうですか。それは良かったですわ」

「……I Sを装備していて怪我などするわけでもないだろう」

「あら、他人を気遣うのは当然のことですわよ？それがI Sを装備していても、ですわ」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

セシリアと箒の視線がぶつかり合い、火花を散らした。仁義なき女子の戦いというやつだろうか？なぜかこの二人は日に日に仲が悪くなっていっている気がする。

「いつまで馬鹿をやっている。次は武装展開だ、早くしろ。五反田、お前もI Sを展開しろ」

「おっけーおっけー」

「一夏ア、早く雪片を出せ！ぶった切ってやるッ！」

「おちつけええええッ！落ち着くんだ千冬姉ッ！なんかマンネリ気味だからアアアッ

！」

ガクガクと千冬に体を高速で揺さぶられながら、一夏が叫んだ。世界最強の駄々っ子ゆすりは、いろんな意味で凶器のようである。

弾は千冬を無視して制服の上着を脱ぎ、シャツ一枚になった。弾以外の生徒は肌をびったりと合う一見ただけでは水着と間違えるであろうISスーツを着ているが、弾だけは制服だ。それは弾のISが通常とは違い、装甲のほかに衣服までも形成するためである。

制服を脱いだのにはもう一つ意味があるのだが。

「……………」

ブシュツと、右肩の刺青から決して少くない量の血が噴き出た。それが膨大な赤の粒子となり、弾の体を包み込んでいく。次の瞬間には、弾は『ブラッディ・ロード』を身に纏っていた。

それを見て、一夏がしみじみとつぶやく。

「ぎやあああああああッ！千冬姉が激昂したアアアアアッ!?」
「お、落ち着いてください！織斑先生！」

この日も、割といつも通りにカオスだった。

◇ 2

その日、更識簪は昼食を屋上にある倉庫の上で食べようと思っていた。入学から一週間が経ち、屋上で昼食をとる風情のある生徒などいないことを見越してのことだ。

しかしそれでも、一人ぐらいは居るんじゃないかと考えていた。そうだったら諦めて帰ろうとも。

結果から言えば、人は居た。

だが、簪は帰らなかつた。居たのが、話題の男子である五反田弾だったからだ。組んだ腕を枕にして仰向けで寝ていた。

彼がとんでもない規格外だということは知っている。セシリア・オルコットとの試合はこれまでの常識を覆すものだった。

もう一人の男子、織斑一夏とはちよつとした因縁がある簪だが、五反田弾にはない。

簪には珍しく、彼女自身から近づいたのも、そういう要因があったからだろう。

じつと五反田弾の顔を見つめる。こうして見ると普通の少年だ。馬鹿げた珍事を起こす人間とは思えない。

「……」

特になにかをするわけでもなく、ただ五反田弾の挙動を観察する。まあ、挙動といっても寝ているのだから、目立った変化はないが。

そのうち簪は観察するのも止めて、当初の目的である昼食をとって帰る。

簪が横にいた間、五反田弾はついに動かなかった。

◇ 3

次の日も、五反田弾は昨日と同じように寝ていた。簪も同じように観察する。やがて昼食を食べて、同じように帰った。

この日も、五反田弾は動かなかった。

次の日もいた。その次の日も。

実はずっとここで寝ていたと言われても、簪は疑わなかっただろう。それぐらい変わらないうちで寝ているのだから。

「……」

だから今日も、簪はもはや日課になりそうな観察をしていた。最近はずいぶん突いたりしているが、やはり反応はしない。口と鼻を塞いでも反応しなかった時は、さすがに死んでいないかと心配になった。ちゃんと生きていたが。

故にこの日も反応などないと思っていたから、突然五反田弾が目を開いた時は心臓が飛び出るかと思った。

聞けば、弾は最初から簪に気付いていたという。簪が弾を観察していたように、弾も簪を観察していたのだ。けれど一向に話し掛けてくる気配がないので、痺れをきらして弾の方から話し掛けようと思っただけらしい。

弾が起きてからは、いろいろなことを話した。趣味、好きな物、果てにはI Sの悩みまでも。

人見知りをするというか、有り体に言って暗い性格の簪だが、まるで人と会話していないのではないかと思う程饒舌に話してきた。

「へえ、ISを自作してんのか。すげえな」

「……自作というか、システムの……構築」

「どっちでもいいさ。十分すげえ」

「でも……なかなか進まなくて……」

「大変なんだな」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「え……終わり？」

「なんだよ、他に何か言うことあんのか？」

「いや普通……手伝うとか言うものじゃない？」

「手伝って欲しいのか？」

「……そうじゃないけど」

「だろ」

「でも……頑張れよとか……君ならできるとか」

「んな無責任なこと言えつかよ。ガキじゃねえんだ、それぐらいで嬉しくなるもんじゃねえだろ」

「……」

確かにその通りだ。簪は陳腐な言葉など求めていない。だが、それを言わないのはあの意味で強さだ。物事を正面から受け止めて、逃げださずに立ち向かっているということだ。

簪にはそれを簡単に言ってしまう弾がひどく輝いて見えた。

「あなたは……どうしてそんなに強いのか？」

「生まれつきだ。天才ってやつだな」

「……」

「なんだよその不機嫌面は。笑えよ」

「……あなたにはわからない。……天才のあなたには」

「ああ、そうだろうな。だが、天才だっていいもんじゃない」

「なにそれ……励まし？」

「ちげえよ。いいから聞け。」

俺はな、この力を自覚した時、自分の為の暴力以外には使わないと決めた。社会の為とか、誰かの為じゃない。自分の為だけの暴力だ」

「……たまにもう一人の男子に……稽古つけてる」

「あれだって俺の為さ。そして暴力でもある。なにせ強引に和に入れてもらおうとしてるんだからな」

「……?」

「きつと、あの篠ノ之束もそうだったんだ。ただ、既存の和に入ろうとせず、造り替えてしまったというだけで」

「……」

後半から、簪にはわけがわからなかった。弾自身も、簪と話しているというよりも独り言をしているという感じだ。

「まあ、この話はいいさ」

簪が手持ち無沙汰になっているのを察したのだろう。弾は強引に話を終わらせた。簪も深くは聞かない。

簪と弾は午後の授業をサボって話を続けた。初めてのサボタージユに簪は不安だったが、それ以上に弾と話していたのだ。おそらくは弾もそう思っているだろう。

話したいことは全て話した。愚痴も悩みも全て。

日が暮れる頃の簪は、ISのシステム構築を何とか完成させたいと強く思っていた。一人じゃなくてもいい、どうせなら幼馴染みの手を借りたっていいだろう。

今ならできる気がする。

希望を胸に、簪は弾と別れた。もともと出会うはずのない者同士、在るべき場所に帰るのだ。

——さあ、始めよう。

◇ 4

これ以降、彼らが出会うことはなかった。

それが当然。

それが必然であり、運命だ。

だから、運命を破って二人が出会ったあの一瞬は、まさに奇跡。

誰かを救う為の——小さな奇跡だったのである。

Second invasion of

鳳鈴音にとって織斑一夏は特別な存在だ。

小学四年生の時に中国から引越してきて、日本の生活に慣れず軽いイジメにあつていた鈴を救つてくれた。まるで童話の王子様のようで、惚れるのに時間はかからなかつた。

我ながら単純だとも思うが、しかし彼を恋い慕う感情は不快ではない。むしろ感情が暴走しないように毎日気を遣うほどだ。

中学二年生の時、都合で中国に帰らなければならなくなつてつい抑え切れずに爆発させてプロポーズまがいのことを言つてしまつたが、それも後悔してない。

それほど、鳳鈴音にとって織斑一夏の存在は大きいのだ。

では、五反田弾とはどういう関係かと問われれば、少し考えてこう言うだろう。

親友であり師だ、と。

善くも悪くも、五反田弾という存在は鳳鈴音に多大な影響を与えた。

強くあれ。鳳鈴音と織斑一夏が五反田弾と知り合い、行動をともし始めた時に言われた言葉だ。

それは物理的な強さであり、精神的な強さ。なにものにも決して屈せぬ大樹のような優しさを兼ね備えた強さだ。

五反田弾が何を思つてそう言ったのかはわからなかつたが、見るものを惹きつけて止まぬ太陽のごときその姿に憧れた。憧れ、自分を研鑽しようと努めた。

鳳鈴音の在り方を指し示してくれた故に、尊敬の意を持つて師と呼ぶのだ。決して本人の前では言わないけれど。

きつと、五反田弾に関わつた全ての人が差異はあれどそう思っているはずだ。織斑一夏の実姉、世界最強と称される織斑千冬でさえも、傍目にはわかりにくいが確かに彼には敬意をはらっている。

だからこそ、思うのだ。

私たちが彼を目標にしているのなら、彼は何を目標としているのだろうか。

実際、何の意味もない問いかけなのかもしれない。本人に聞けば、適当にはぐらかされる程度のものなのかもしれない。

けれど、想像せずにはいられない。

到達点からはどんな景色が見えるのだろうか、思い描かずにはいられないのだ。

風鈴音は中国の国家代表候補生だ。本来IS学園に入学する予定はなかったのだが、『ISを動かせる男性』が確認されたため、急遽編入することになった。

四月の暖かな夜風になびく艶やかな黒髪は側頭部で左右一つずつにまとめられ、小柄ながらきりつとした目が彼女を只者ではないと感じさせる。見る人が見れば、ただの大人びたちびつこにしか見えないだろうが。

学園のゲート前におかれた大き目のポストンバッグは見た目を裏切らない重量を持つているはずだが、鈴はそれをひよいと持ち上げる。

「えーと、受付ってどこだっけ？」

そう言つて鈴はポケットからくしゃくしゃになったメモ用紙を取り出した。『本校舎一階総合事務受付』と書かれているが、そもそもそこがわからない。このメモは役立たずのようだ。

「自分で探せばいいんでしょ、自分で」

愚痴をこぼしつつ、鈴は歩きだす。考えるよりはとにかく行動。それが鈴のスタイルだ。

そのせいで第二の故郷ともいえる日本での思い出の地を散策し、そして学園に到着するのが夜になってしまったので自業自得といえるが、『考えるな、感じろ (Do not think, feel)』である。悔やんでいては仕方ない。行動あるのみだ。

しかし、転入手続きも終わっていないうちは学園内でISを展開することもできない。もともとISの展開は制限がかけられているが、外交問題にすら発展する可能性があるるので迂闊に空を飛んで受付を探すという手も使えないのだ。

鈴はそつとため息をつく。今回鈴が学園に来ることになった最大の要因であるアイツは、今どうしているのだろうか？まあ、織斑一夏の朴念仁は筋金入りだから、周りが女子だけでも間違いは起こらないだろう。

もう一人の方はどうか。五反田弾はその性格からしていろいろとやらかしてしまう印象があるが、なんだかんだ言って律儀な男なのだ。ちゃんとした手順を踏むだろう。こう考えると、意外と心配な要素はないようだ。

「ふっふーんっ」

幼馴染みであり、鈴が思いを寄せている一夏の顔を思い出すだけで、不思議と体が軽くなる。胸が躍り、ISがなくとも空に向かって羽ばたいていけそうだ。恋つてすごい。

「だから……でだな……」

ふと、声が聞こえた。訓練施設から生徒が出てくるようだ。丁度いいので受付の場所を聞こうと小走りに近寄ると、ぼやけて聞こえていた声はつきりと聞こえた。

「そのイメージがわからないんだよ」

不意を突かれ、鈴はびくつとふるえてそのまま硬直する。

男の声、それも忘れることのないアイツの声だ。予期しない再開に、鈴の鼓動は急ピッチでペースを上げていた。

不安と喜びを胸に、少女は歩みを再開する。

「いち——」

「一夏、いつになったらイメージを掴めるのだ。先週からずっとだぞ」

「説明が雑すぎるだろう。『くいて感じ』ってなんだ」

「……くいて感じだ」

「意味不明だ——あ、おい待て箒！」

歩みを早める女生徒を、一夏が追いかけていく。それを見て、鈴の心からは先程までの昂揚が嘘のように消え去り、冷たい感情といらだちが雪崩れ込んできた。体が鉛のように重くなる。

ふらふらと歩いていると、総合事務受付はすぐに見つかった。訓練施設のすぐ後ろにあつたようだ。

愛想のいい事務員の言葉を、鈴はほとんど聞いていなかった。それどころではないのだ。

——決めた。

——決めてやったわよ、一夏。

「ぶっ潰す」

「織斑くん、クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとお！」

クラッカーの鳴る音が寮の食堂に響いた。夜の自由時間を使ってクラスの皆が織斑一夏のクラス代表決定を祝ってくれているのだが、当の一夏は全くめでたい気持ちではなかった。

やりたくなかったのに就任パーティーまで開かれてはやるせないだろう。さらに断りづらくなってしまったし、もう腹をくくるしかないのだろうか？

「……はあ」

「景気の悪い顔してるな一夏。祝ってもらってるんだから、笑顔の一つでも見せろよ」
「分かっているけどさ……」

一夏はぽんと肩を叩いてくる弾をとりあえず無視する。せめて心の整理をさせてほしい。弾もそれがわかつているのか、肩をすくめるだけだった。

「はいはい！新聞部です！インタビューしてきました！」

盛り上がる一同をかき分け、一人の女生徒がやってきた。おそらく先輩だ。先輩には悪いが、インタビューは断ろうと思う一夏だったが、

「私は二年の黛薫子。新聞部部長やってるから。これ名刺」
「あ、どうも」

名刺を出され、反射的に受け取ってしまう。しまったと思ってももう後の祭り。これではインタビューを断れない。それを狙ってやったとすれば、この人は一筋縄ではないか。

そんな一夏の心中を知ってか知らずか、薫子はずっと一夏へボイスレコーダーを近づけてきた。

「ではではズバリ！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「えーと……まあ、なんとというか、がんばります」

「うえー。もつといいコメントちようだいよお。俺に触るとヤケドするぜーとか」

「自分、不器用ですから」

「うわつ、前時代的！……じゃあ五反田君、なにか一言！」

「『てめーは、この五反田弾がじきじきにブチのめす』」

「まさかのネタ！いいね！次、セシリアちゃん」

「わたくし、こういうものはあまり好きではないのですが……ふふん、仕方ありませんわね。ではまず、どうして私がクラス代表を辞退したかという……」

「あー、長くなりそうだからやっぱいいや。写真だけ頂戴」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造するから。ほら、並んで並んで」

セシリアは薫子にぐいぐいと背中を押されて一夏と並ばされる。弾も強引にくつつけられた。

「ほい、じゃあ撮るよ。35×51÷24は？」

「え？えつと……2？」

「ざんねーん、74・375でした！」

パシャツとデジカメのシャッター音が切られた。

……のだが。

「なんで皆入ってんの？」

「いいじゃねえか一夏。クラス写真みたいなものだ」

「いや、明らかにクラスじゃない奴が混じってるんだが……」

「気にしな—い、気にしな—い」

「いいのかそれで……」

いいんだよ、と笑う弾を見て、一夏も開き直った。別に何か困るわけでもないのだから、好きにさせればいいだろう。

しかし、セシリアは納得しなかったようだ。

「あ、あ、あなたたちねえ!？」

「まあまあ」

「セシリアだけ抜け駆けなんてずるい」

「クラスの思い出になっていいでしょ」

「ねー」

「う、ぐっ……」

見事な連携を發揮し、クラスメイトがセシリアを丸め込む。何も言えないセシリアは苦虫を噛み潰したような顔になった。

ともあれ、このパーティーは10時過ぎまで続くのだった。

〈〈 3

「ねえ、2組の転校生の話聞いた？」

朝、一夏と弾は席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。この数週間で割と仲の良くなった友達達は結構できた。というより、最近は向こうから話しかけてきてくれるので交友には困らない。

「転校生？この時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」
「ふうん」

一夏があまり興味なさそうに相槌を打った。するとセシリアが話を聞いていたのか、こちらによつて来る。いつもの腰に手を当てるポーズだ。

「あら、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるわけでもないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい」

いつの間にか箒も来ていた。うわさ好きなのは箒も同じか。

「しかし、中国か。中国といえば思い出すよなあ、一夏？」

弾がしみじみと呟く。中国に関わる共通の知り合いは一人しかいないので、一夏にも簡単に理解できた。

「ああ、二元気にしてっかな？」

「元気だろうよ。それが取り柄みたいなやつだったしな」
「確かに」

「……一夏、誰の話をしているのだ？」

「ん？ああ、俺と弾の友達。親友というか悪友というか」

一夏がそういつた時だった。

突然、教室のドアが開く。

「——悪友はないでしょう、悪友は」

そこにいたのは、ツイントールの小柄な女生徒だ。腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている。

「鈴……？お前、鈴か!？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たのよ」

「宣戦、布告?」

「ええ。実は私もクラス代表になったの。もちろん、専用機持ちよ」

「織斑先生だ。さっさと教室に戻れ、そして入り口をふさぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」

さっきの勢いはどこへやら。鈴はすごごと引き下がった。

やはり、千冬と対等にできるのは弾ぐらいのものなのか。というか、千冬が「五反田もこれぐらい素直ならいいのに」とか言っているので、もう訂正するのは諦めたっぽい。

「またあとで来るからね！逃げないでよ！」

「早く戻れ」

「は、はいっ！」

鈴は猛ダツシユで2組へと帰っていく。昔と変わらない鈴の姿に、一夏はちよつと安心した。

「鈴か。あいつ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

「俺もだ。中国に帰ってからなったのか」

一夏と弾が感心したように言うが、それが悪かった。箒やセシリア、他クラスメイトから質問が雨のように投げかけられる。

バシンバシンバシンバシン！

「席につけ、馬鹿者ども」

「あれ、千冬さん、俺は叩かねえの？諦めた？」

「ああ、『叩く』のは諦めた。だから、これだ」

そういつて、千冬は教卓から人より大きい長方形の物体を取り出した。

「千冬姉え!?!それIS用近接ブレードじゃん!どっから取り出したの!?!」

「……斬る!」

「いや、『斬る!』じゃないから!そんなもんを教室で振り回さないで!」

「笑止ツ!そんなもので俺が止められるとでも?」

「弾も乗らなくていいから!」ブオオンツ!「うおいつ!今マジでかすつたんですけど!?!」

「千冬流決戦奥義——」

「千冬姉!? 何その物騒な技は!?!」

「いいぜ、受けてやらあ……!?!」

「弾も止めるオオオオツ! 壊れちゃうう! 教室壊れちゃうからあああツ!」

「ゆきみちのはなに たつちどり
雪道花立——千鳥ツ!」

「瞬間のさらに倍!——瞬天ツ!」

「ちよつ、ヤメヤメヤメツ——ぎやあああああああああああツツ!?!」

〈〈 4

「待ってたわよ、一夏!」

昼時、一夏と弾と箒とセシリアとその他もろもろ（いっぱいいいすぎだろう）が食堂に行ったら鈴が立ちふさがった。手に持つお盆にはラーメンが鎮座している。

「とりあえず、そこどいてくれ。食券出せないし、通行の邪魔だし」

「う、うるさいわね! わかってるわよ!」

一夏に言われ、鈴はいそいそと退いた。一夏は日替わりランチ、弾はカツカレーを頼む。

「元氣だったか鈴？」

「元氣だったわよ。あんたもたまには怪我しなさい。弾は……無理か」
「無理だな」

弾が胸を張った。一夏も鈴も「こいつ人間じゃねえな」というような顔で弾を見る。

「あー、ンンッ！」

「一夏さん！注文の品、できてましてよ？」

と、そこで箸とセシリアによって会話が中断された。おばちゃんから料理をもらってテーブルに着く。

10人近くが一斉に移動するから、かなり珍妙だ。
すると鈴が、一夏の顔色を見て気づく。

「あんた、やけにげっそりしてるわね。どうしたの？」

「弾と千ふ、織斑先生をなだめるのが、な……」

「ああ、いつもの。変わってないわねえ」

「大変だったんだぞ。あの朝の後、教室の備品の8割が全壊したし」

「褒めるな。照れる」

「褒めてないから」

「そういえばものすごい音がしてたわね、と鈴が言ったところで、箒とセシリアがこらえきれなくなったのか、一夏を問い詰めた。

「一夏、そろそろどういう関係か教えてほしいのだが？」

「そうですね！一夏さん、あなたまさかこちらの方とお付き合いらっしやるの!？」

かなり大きな声だったので、周囲の生徒も聞き耳を立ててくる。

「べ、べべ、別にあたしたちは付き合ってるわけじゃあ……」

「そうだぞ。ただの幼馴染みだ」

「……」

「？鈴、何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよ、馬鹿」

「無理だつて鈴。こいつに期待しちゃだめだ」

「分かってるわよ……。はあ、ちつとも変わらないんだから……」

何かを諦めたようにため息をつく鈴を、弾が慰めていた。一夏にはなぜなのか分からないのだが、箒やセシリアでさえ残念なものを見る目でにらんでくる。

「しかし、幼馴染みだと……？」

「あー、えつと、箒が引越してつたのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに中国に帰ったから、会うのは1年とちよつとぶりだな」

「ちよつと一夏。あたしにも紹介しなさいよ」

「ああ、こつちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染みで、俺が通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ。はじめまして。これからよろしくね」
「こちらこそ」

あいさつを交わす二人の間に、火花が散ったように見えた。

「そして俺が五反田弾だ」

「いや、知ってるし。なんで言った？」

「さあ？」

「ちゃんと考えて行動しろよ！」

一夏が叫んだ。

「ちよつと、私の存在を忘れてもらっては困りますわ。凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なつ、私を知らない!? イギリスの代表候補生であるこのセシリア・オルコットを!？」

「なんかデジャヴを感じるんだが。なあ、一夏」

「しっ! 黙ってる弾」

「……あたし、他の国とか興味ないから」

「い、言っておきますけれど、私あなたのような方には負けませんわよ！」

「そう、でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど、あたし強いもん」

「いってくれますわね……」

「……………」

セシリアがわなわなと肩を震わせ、箒が箒をばしんと机に置く。まさに一触即発と
いった状況だ。

心なしか空気も震えている気がする。

ゴゴゴゴゴゴ……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……」

「いや、弾。口で臨場感出すのやめてくれ」

ズズズズズズ……

ズズズズズズズズズズ……」

「いや、鈴。無言でラーメン食べるのをやめてくれ」

雰囲気がぶち壊れた。

「ちよつと弾さん！この方はそれほど強いんですの!？」

「ん？ああ……どうだろうなあ。俺が知ってるのは昔だから誤差はあるけど、中坊のころは一夏といい勝負だったぞ」

「今やつたら負けないけどね」

「と、いうことはですよ。凰鈴音さんも音速を超えたりしますの?」

「一応瞬拳は教えてあるけど、鈴はちっちゃいから無理だったんだよなあ」

「ちっちゃいゆーなっ！私は音じゃなくて空間をとらえるからいいのよ!」

「お、もしかしてあれ完成させたのか？すげえじゃん。難易度だけなら瞬拳の比じゃねえのに」

「ええ、やってやったわよ。けど、なにあれIS使っても再現するの滅茶苦茶大変だったんだけど」

げんなりしながら鈴が愚痴る。しかし、セシリアたちはそれを聞いて戦慄した様子だ。

圧倒的な脅威であつた瞬拳を、難易度で凌駕する技とは一体どんなものなのか？

弾の瞬拳よりはマシなのだろうが、脅威であることに変わりはない。セシリアは一度瞬拳を直に食らっているだけに、想像するだけで震えそうだった。

「……あれかあ」

ちなみに、それを知っている一夏は内心結構ビビッていた。難易度と弾は言ったが、凶悪さでも瞬拳を超えていると思うから。

ともあれ、そこから鈴が一夏にISの面倒を見てやると言つてそれに反発した筈とセシリアがまた鈴と言ひ合ひになったりし、しかも一夏の意見なぞ介入もさせずに言い合っているものだから休む暇がない。

弾も弾で、早々に昼食を平らげいなくなつてしまった。

結局、鈴が強引に話を打ち切つてその場は収まったのだった。

They promise mistake

ある女性が、薄暗い部屋で巨大なモニタを見つめていた。鼻歌交じりに画面を操作する女性の横顔はあどけない少女のそれであり、新しい玩具に目を輝かせる子供のようだ。

「いふふん」

室内に女性の鼻歌と画面の操作音だけが響いている。流れるように操作していくその様はまるで一流のピアノ奏者であり、まだ幼さを残す顔には不釣り合いに思えた。

しかし、部屋にそれを指摘するものはいない。否、全世界を探しても、彼女にそんなことをいう人間はいないだろう。

誰もがこの女性を見て納得してしまう。意図的ではなかったとしても、そうであるように世界を造り替えたのが彼女自身なのだから。

けれど、そんな世界に一つのイレギュラーを見つけた。

彼女を凡人と言ってしまうような存在だ。

故に彼女は何年かぶりに気分を高揚させている。といっても、年がら年中ハイテンションな彼女の気分を読み取れるのは長い付き合いである『世界最強』だけであろうが。そんな彼女が操っているモニタには、意味不明な数字の羅列とデータグラフの他に『白式』と『ブラッディ・ロード』の文字があった。

「いっくんも彼も、なんで動かさせたのかなあ？いっくんはとりあえず納得できるとしても、彼はできないよねえ」

ぶつぶつと呟きながら、女性はある施設の監視カメラにハッキングする。ある市営の多目的ホール。IS学園の入試が行われたところである。

その中にある、噂の男性操縦者である織斑一夏と五反田弾がISを動かした時の映像を探し、抽出する。

ハックに要した時間は数秒もなかった。

とりだした映像を確認し、次に彼らの動かしたISの情報を引き出していく。

「ふうん、いっくんが乗った時点でバグが出てるねえ。さすがの私でもわからないなあ」

表示されたデータを分析し、さらに調べていったところで、今まで休むことなく動いていた彼女の動きが止まった。

呆然と口をぽかんと開いたその姿は、彼女を知るものがいれば例外なく、自身の目を疑ったことだろう。

「……うそでしょ」

思わずそうつぶやいた女性の先には、ある結果が出ていた。

それは五反田弾が動かしした時のデータ。

「ISのコントロールを、力尽くで奪うなんて……」

そんなことはあり得ない。

ISが、究極の科学兵器が生身の存在に屈服するなど、非常識にもほどがある。だが同時に、それならばISを動かせることに納得が行く。

事実を事実として受け入れるのが現実だ。

それを否定するのは馬鹿のやること。そして女性は馬鹿ではなかった。

女性は、彼に送ったIS『ブラッディ・ロード』のデータを見る。血盟の王を意味するその機体は、本来動かせるものではないのだ。

あまりにも癖が強すぎた。実験と称して様々な改造を施した結果、女性にも反応しなくなった欠陥機の欠陥機。

まるで孤高の王のようだったからこそ、女性は『ロード』と名づけたのだが、それすらも無理矢理に従わせてしまうとは。

わがままな王女すらも手懐けたその男に、女性は興味が尽きなかった。

◇◇
1

「よう、鈴。さっきぶり」

「あら、弾」

放課後の第三アリーナに向かう途中の廊下で、五反田弾は凰鈴音とぼったり出くわした。ちらと見れば、鈴は抱えるようにスポーツドリンクやタオルを持っている。

そういえば、アリーナでは織斑一夏が篠ノ之箒とセシリア・オルコットに訓練をつけてもらっていたはずだ。終わりを見計らって献身的に奉公でもするつもりなのだろう。

「まめだねえ。一年ちよつとで冷めたりしねえのか」

「んなわけないでしょ。むしろ、俄然やる気になったわ」

「ははは、そうかい。そいつはいいや」

えへんと胸を張る鈴の頭を、弾はよしよしと撫でてやる。その手つきはかなり雑で、鈴の髪がくしゃくしゃになるのだが気にしない。

その手を、鈴は強引に振り払った。

「うがー！止めなさいよつ。子供扱いなつ！」

「ははは、悪い悪い」

鈴はいかにも怒ってますという感じで睨んでくるが、弾としてはやかましい餓鬼を扱っている感じではほえましくすらある。

くしゃくしゃに乱れた髪型を直してから、鈴はいぶかしげにこちらを見てきた。

「ていうか、どうしたのよ？頭撫でるなんてらしくない」

「ん？ああ……」

そう言われてみればそうだ。つるんでた時期にもからかうことはあっても、頭を撫でるなんてやったことは一度もなかった。

確かにらしくない。

しばし考えると、一つの結論にたどり着いた。

「最近、蘭を撫でてやってねえんだ」

「はあ？あんた、定期的に妹の頭を撫でてんの？」

「ああ、結構な」

五反田蘭。弾の実の妹で、今は中学三年生だ。有名お嬢様学校の生徒会長をやっている、普段はきりつとしていたのだがその実態は甘えん坊。小さなころから行ってきいたということもあり、もはや頭を撫でてもらうのが癖になっている。

どこに出しても恥ずかしくない自慢の妹だ。

「このシスコンめ……」

鈴がそう言つて、『こいつもか』という目で弾を見てくる。ちなみに、身近にいるシスコンの代表格といえは一夏だ。

まあ、そのシスコンに恋しているのが鈴であり、蘭である。そのほかにも多数存在しているのに、シスコンはモテるのかもしれないと思う。そんなことは全くないが。

「いいんだよそんなことは。そろそろ終わるみたいだぜ、一夏のやつ」
「えっ、急がなきゃ！」

一夏の訓練が終わるらしい内容がアリーナから聞こえてきたので鈴に教えてやると、あたふたと慌ててスポーツドリンクを取り落としそうになりながらもアリーナへ駆けだしていった。

「幸せもんだな、一夏は。まったくうらやましい」

呟いて、弾も鈴を追つてアリーナへと歩き出す。一夏に鈴、箒にセシリアといれば、面白いことが起こるのは必至だろう。みすみす見逃す手はない。

鈴より少し遅れてアリーナのスライドドアを開けて入ると、鈴が一夏にスポーツドリンクを投げたりタオルをあげたり世話しているのを箒が呆然と眺めていた。

「サンキュー。あー生き返る……」

スポーツドリンクを飲んで一息つく一夏の姿はものすごく年寄り臭い。どうせ、運動の後は生ぬるい飲み物のほうが体に良いとか考えているのだろう。思考も年寄り臭かった。

「変わってないね、一夏。若いくせに体のことばかり気にしてるところ」

「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんのだぞ。クセになるからな。後に泣くのは自分と自分の家族だ」

「ジジ臭いよ」

「う、うつせーな……」

にやにやと見透かすような視線で見てる鈴に、一夏は落ち着かなかった。自分をわかっていような眼差しは、妙に落ち着かない。

というよりも、一夏は鈴に落ち着かない。一年とちよつとしか経っていないはずなのに、昔のやかましさがなりを潜め、『女の子らしさ』が態度の節々から感じられるせいだ。簡単に言えば、一夏は鈴の可愛らしさにあてられていた。

あの唐片木・オブ・唐片木ズ、織斑一夏としては考えられないようなことである。

そして面白くないのは箒だ。さつきから完全に蚊帳の外。どうにも入り込めない『結界』ともいえる空気があり、それが彼らの関係の深さを如実に表していた。

「一体、なんなのだ……」

そうつぶやいた箒に答えたのは、意外にもさつきから二人の様子を弾だった。

「面白くないのはわかるが、今日ぐらいは勘弁してやってくれ。一年ぶりだからな。色々話もある」

「それはいいが……お前は話さなくていいのか?」

「これでいいんだよ。俺は鈴を応援できない。箒、お前の肩を持つこともできない。セシリアも言わずもがなだ。見守るのが、俺の役割なのさ」

「……そうか」

弾の口ぶりから何かを察し、箒は黙る。傍観者にしかなりえない現状をよく思っていない彼女だからこそ分かったのだろう。

それはそれとして、内心どきまぎとしている一夏に、鈴はにこにここと笑いながら問いかけた。

「一夏さあ、やっぱあたしがいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手がいなくなるのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくってさあ」

「……鈴」

「ん？なにになに？」

「何も買わないぞ」

「なんでそうなるのよ……」

がつくりとうなだれるた鈴はやるせないといった様子でため息を一つ吐く。甘酸っぱいロマンスが香る空気を破壊する機能が一夏には付いているとしか思えなかった。

「アンタねえ……久しぶりに会った幼馴染みなんだから、いろいろと言うことがあるでしょうが」

「……………」

「例えばさあ——」

「あー、んんっ。話を折ってすまないが、私はそろそろ帰らねばならない。一夏、今日は先にシャワー使つていいぞ」

「おお、ありがたい。つか、もうそんな時間か」

また後で、と箒は言つてピットを出ていく。剣道場にも顔を出さないといけないようだし、彼女も彼女で大変なのだろう。

『こちら』の方も、ちよつとした会話の応酬でも気は抜けなかつたようだ。邪魔してはいけないという常識と、言わせてはいけないという敵対心がぶつかり合つた末でのあの態度だ。

それ以上を話させず、しかももう邪魔をしないためにはあれが一番。しかも爆弾を残していくとなるとずいぶんな高等手段だ。

あれ、箒さん結構策士じゃね？

……まあいい。

さてその後、爆弾を無視できない人間が一人存在する。

「……一夏、今のどういうこと?」

「ん? いや、いつもはシャワーは筈が先なんだが、今日は汗だから順番を代わってくれって頼んで——」

「し、し、シャワー!? 『いつも』!? い、一夏、アンタあの子とどういう関係なのよ!?」
「どうって、前に言っただろ。幼馴染みだよ」

「お、お、幼馴染とシャワーの順番と何が関係あんのよ!」

ヒステリックに叫ぶ鈴を、一夏が若干理解しきれていないので弾は助け舟を出してやることにした。とりあえず、鈴に説明してやらねばなるまい。

「鈴。一夏の奴は、今あの子と同じ部屋なんだよ」

「は? 弾、アンタと一緒にじゃないの?」

「ちげえよ。急な部屋割りで都合がつかなかったらしくてなあ。特殊な措置を取ってんだよ」

「じ、じゃあ、あの子と寝食を共にしてること!」

「そういうことだな」

『『そういうことだな』じゃねええええ！ちよつと一夏！今の話本当なの!!』

「あ、ああ。でもまあ、箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら、緊張して寝不足になっちまうからな」

一夏がはっはっは、と笑いながら言うと、不機嫌面をしていた鈴がうつむいて肩を震わせ始めた。そして、ぶうぶつと何かを呟いている。

「……………」

「ん？どうした、鈴？」

「……………つたら、いいわけね」

「？」

「幼馴染みだったらいいいわけねっ!？」

「うおっ！」

うつむいた状態から一気に顔を上げて叫んできた鈴に、一夏は驚いて身を引いた。

「分かった、分かったわよ。ええ、分かりましたとも。一夏っ！」
「お、おう！」

「幼馴染みは二人いるってこと、覚えておきなさいよ」
「いや、忘れないが……」

じゃあまた後で、と言ひ残して、鈴はピットを飛び出していく。後に残された一夏は不思議そうに首をひねり、弾はまた面白いことが起こると笑っていた。

「なあ、弾。さっきのどういう意味だったんだ？」

「そのままだろ。面白いことになりそうだ」

「わっかんねえ」

「くはは。まあ、そう遠くないうちにわかるだろうぜ。今夜あたりとか」
「マジか……」

楽しみにしとけ、と言つて弾もピットを出ていく。

結局、終始女心を理解できない一夏だった。

「最つっつ低！女の子との約束も覚えていないなんて、男の風上にも置けないやつ！犬にかまれて死ぬ！」

隣の部屋から聞こえてきた騒音で、弾はおおよそその事態を把握した。少し前から部屋を代われだの無理だの終いには木刀の振られた音とそれが金属にでもぶつかつたような鈍い音も聞こえていたので、実は最初から把握していたのだが。

それなりに防音がしっかりしている壁を突き抜けてくるとは、どれだけ騒いでいたと
いうのか。十代女子の活力には舌を巻く。それとも、恋する乙女というジョブの補正なのか。

いずれにしろ、この状況は一夏がまたボカをしたという一点に尽きる。

乱雑にドアが開閉する音と直後に聞こえた荒々しい走行の振動が、さらにそれを裏づけした。走って行った人間の背丈を推測すればかなり小柄。やはりというか、鈴だろ
う。

「アフターケアは俺の仕事か……」

ベッドに寝転がっていた弾は仕方なしに立ち上がり、ドアから外に出る。廊下には何事かと出てきた生徒の姿がちらほらと見られたが、事の発生源が一夏であることを理解しました部屋に戻っていった。

お騒がせキヤラが定着しつつある一夏が部屋から出てくる様子はなく、やはり弾がいつてやるしかない。ここで追いかける程度の甲斐性があればアイツも苦労しないのに、と弾は思った。

空気の微細な振動を感じ取り、音の反射を聞き分けることによつて鈴の位置を特定する。

鈴は通路の端、自動販売機の置いてある区画でうずくまっていた。

近づいて、弾はポンと頭に手を乗せる。

「大丈夫かよ？」

「うう……ぐす」

弾が声をかけると、鈴は涙を見られたくないのか顔をこそあげなかったが「弾……」とつぶやいた。

自動販売機に硬貨を入れて、コーヒーとお茶を買う。

「ほれ」

「ありがとう……」

鈴は目元をごしごしと拭いてお茶を受け取ったが、飲もうとはしなかった。飲まずとも受け取ったのを確認して、弾はコーヒーに口をつける。

「……」

「……」

会話はない。鈴は手元でお茶を弄んでいるだけであり、弾は弾で喋る気はなく、鈴が落ち着くまで待つているのだ。

鈴がやつと口を開いたのは、弾がコーヒーを飲み終わってからだった。

「……弾。弾は、昔あたしが一夏にした約束覚えてるよね？」

「ああ、あれ。酢豚のやつ。確か『料理が上達したら、毎日酢豚を食べる』だったな」

「そう。それ、どんな意味に聞こえた？」

「回りくどかったが、プロポーズだろ」

「うん……」

プロポーズという言葉に反応して、鈴は顔を赤くしながら伏せる。いまだ十五才の彼女には、破壊力のある言葉だったようだ。

「一夏さ、あれ、ちゃんと覚えてなくて。奢ってもらうとか言ったのよ」

「一夏らしいな」

「うん……。すごくアイツらしい。あたしが好きなのはそういうアイツだけど、やっぱり許せないよ」

「……」

「でもね、許せないけど、考えてみればあたしも回りくどかったなっと思う。誤解してても、仕方ないなとも思うの」

「でも、許せないのか？」

「うん……」

あたしはどうすればいい？と鈴は弾に問いかけてきた。

正直、弾だって分からない。常軌を逸した経験もあるし、前世の記憶もある。様々なキャリアを含めて、弾は鈴や一夏よりも年上になる。

だけど、恋愛はからつきしだ。人を愛すという心はわかるが、行動なんて知らない。知らない、と言いたい。分からない、と。綺麗ごとを述べて問題を無かったことにすることもできるだろう。

しかし、鈴が頼ってきたのは弾で、求められたのは弾で、収められるのも弾なのだ。だからこそ、弾は思ったことを口に出す。

「許さなくてもいいんじゃないか」

「でも……」

「譲れないんだろ？勇氣を出して言葉にしたその気持ちを否定されたくないんだろ？
だったら、退くな。譲ってやるな。」

間違っているのなら、矯正してやれ」

「力尽くでも？」

「力尽くでも、だ」

言い切つてやる。少しでも不安を取り除けるように。

鈴は数秒心の中で葛藤をしていたようだが、すぐに立ち上がった。そして、いつものはつらつとした笑みを浮かべて弾を見る。

「大丈夫かよ？」

同じ質問。

「うん」

今度は迷いなく。

「なら、行け。うずくまってるのはらしくない」

「言われなくても行くわよ。あたしらしくね」

にっと笑つて、鈴は飛び出していった。弾には鈴が何をする気かはわからないが、そこでも彼女を救えたのなら僥倖だ。

自分を救ってくれた恩返しは、こんなものでは返せないけれど。
それでも、力になれたのなら気分が良い。
薄く笑って、弾は自室に戻っていった。

Gravity attraction

初めての感情だった。それまで感情というものがなかったのだから、それはビックバンにも等しい衝撃だった。

知りたいと思った。この人をもっと理解したいと思った。

愛しいとも感じた。さらに愛したいと感じていた。

彼はこちらに気づいてすらいないだろうけれど、私はあなたのそばにいる。

あなたに引かれ、落ちたのだ。なんと清々しい墮天だろうか。

ああ、気づいてもらえなくてもいい。

あなたの為に、私は使われる。それだけで幸福なのです。

あなたが私に体を預けてくれる。その事実はどうしようもなく感謝したいのです。

願わくば、これからも共にいたい。

あなたもそう思ってくれているでしょうか？

ねえ——五反田弾様。

あれから一ヶ月が過ぎた。鈴は鈴で怒った理由を語らず、一夏も一夏で意地になつてずると問題を先延ばした結果、今日が訪れた。

すなわち、クラス対抗戦である。

仕組まれたように一試合目は鈴と一夏。第二アリーナでの試合が、そろそろ始まろうとしている。

一夏と鈴の物珍しさからか、アリーナは全席満員だ。だが、ハイパーセンサで見渡してみても弾の姿はない。見ないということはないだろうから、ピットでリアルタイムモニターを通して見るのだろう。

「……」

一夏の視線の先では、鈴とそのIS甲龍が試合の開始を静かに待っている。セシリアと同じアンロック・ユニットが特徴的で、肩の横に浮いたスパイク・アーマーがやたら攻撃性を主張していた。

両者ともに規定の位置へ移動してください、というアナウンスに促され、一夏と鈴は空中で対峙する。距離は五メートル。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛め付けるレベルを下げてあげるわよ」

「いらねえよ。全力で来い。俺も全力だ」

互いに手を伸ばせば触れ合えそうな近さで、一夏と鈴は言葉を交わした。

鈴は一夏の言葉を聞き、無意識に口元を綻ばせる。思えば、昔から手加減を嫌っていた。それはきつと、一番近くにいながら決して触れられぬ場所にいるアイツのせいでもある。

一夏は変わらない。良い意味でも、悪い意味でも。

それが本当にもどかしくて、鈴は素直になれないのだ。とりあえずは、一夏の言う通りに全力で闘おう。

「一応言っておくけれど、I Sの絶対防御も完璧じゃあないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

「知ってるさ。弾は普通にそれを振り切ってくるからな」

「ああ、そう。余計なお世話だったわね」

無駄な会話はここまで。一夏は雪片式型を、鈴は異形の青龍刀を構える。そして、試合開始のブザーが鳴った。

「おおおおおおおおお！」

「はあああああああああ！」

二人ともがその手に持った得物を振り下ろす。風切り音を鳴らして二つがぶつかり合った。

一夏はセシリアに習ったクロス・グリッド・ターンをこなして、鈴を正面に捉える。

「これぐらいはしてもらわなきゃつまらないわよね。けど」

鈴が青龍刀をクルクルとバトンの様に回して、縦横無尽に切り付けてきた。

鈴の乱舞を一夏は何とかいなしていく。だがその時、鈴の肩の装甲が開いた。

まずい、と一夏が思った時にはもう遅い。突然、見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「ぐおおッ！」

続けて二発目、三発目と何かが撃ち出されていく。しかし、一夏もやられているだけではない。瞬時に判断し、鈴に向かってスラスタをふかす。

イグニッション・ブースト。

使い時さえ間違えなければ、代表候補生とでも渡り合えるようになる加速技術だ。

一気に接近し、その速度を乗せた瞬間を叩き込む！

だが、一夏が雪片式型を振ろうとした瞬間、鈴は両手を前に突き出した。

二度目の失敗。一夏は己の迂闊さを呪う。

そうだ。鈴はあれを完成させたと言っていたではないか。

なぜ忘れていた。さっきの見えない衝撃は、あれを暗示していたというのに。

鈴が、その技の名を刻む。

「空礫」

刹那の間一夏の身体が止まり、そして気が付けば壁に叩きつけられていた。

「な、なんなのだあれは？」

ピットのリアルタイムモニターの前で、箒は呻いた。画面では一夏が何度も鈴に突っ込んで瞬間的に壁に埋まっている。

先程の見えない衝撃については教えてもらった。あれは衝撃砲といい、空間自体に圧力をかけて砲身を形成、衝撃波を弾丸として撃ちだしているらしい。

では、あれはなんだ？セシリアを見ても、目の前の現象を理解している様子はない。

「織斑先生、あれは一体？」

「空礫。五反田の使う非常識な技の一つだ。だが、私も名前しか聞いたことがなくてな。何が起こっているのか見当がつかん」

そう言った千冬の顔は苦々しかったが、知人の成長を喜んでいようでもあった。

「織斑先生！これを見てください！」

「どうした山田君」

興奮した真耶から呼ばれ、千冬はモニタに目を向けた。モニタには先程の攻防を分析した結果が出ている。

「これは……」

「鳳さんがその技を使った時、空間が異常に歪んでいるんですよ。おそらく織斑くんが吹き飛んでいるのはこれが原因かと……」

「そういうことか……アイツの技は本当に非常識だな」

「どういうことなんですか?」

「ああ、つまり、空間自体を押ししているのだ。空間を押しせずらすことによつて相手を決して近づけることなく制圧できる。おそらく、衝撃砲の技術を応用したのだろう」

「そんなことが、できるのですか?」

「できるさ。あの馬鹿が教えたのだからな」

そう言った千冬の顔はどこか誇らしげで、そして尊敬しているようにも見えた。普段いろいろな珍事を引き起こしてはいるが、あれはあれで彼らしいといえるのだろう。千冬も満更ではないのかもしれない。

「しかし、あの馬鹿はどこにいるんだ？ピットにはいないし客席にも姿が見えないが……」

「弾さんのことですから、観戦しないということはないとは思うのですけれど……」
「まあ、そこらにいるだろう」

それだけ言つて、千冬はリアルタイムモニターに視線を戻した。

〈 3

五反田弾はIS学園で最も高いところ、管制塔の頂上から試合を見ていた。もちろん人が存在することなど考えられていない場所だ。少し動けばすぐに落ちてしまうが、弾は器用にバランスを取つて胡坐をかいて座つていた。

ここからだとアリーナがよく見える。特等席だと感激する弾だが、どうせ弾以外には使用するものはいないので意味のないことだった。

そんなことはどうでもよく、弾は鈴が使っている技を見て目を細める。

「空礮か。威力も規模もしよつぺえが、まずまずの完成度だな」

自身の使う空礮と比較して、弾はそう評価した。本人が聞けば『アンタと比べるな』と怒り出すだろうが。

「しかし、一夏も無様さらしてんなあ。対抗策の一つでも練ってなかったのかよ。それとも、忘れてたのか」

確率的に後者の方が高そうなので、たぶん忘れていたんだろうと弾は思う。実際そのとおりなので、一夏の思考は手に取るようにわかるほど単純なものだった。

「……あ？」

突然、上空に気配が生まれる。飛行機などのものではなく、敵意ある何かだ。

それはまっすぐアリーナへと落ちてきていて――

「チッ………！」

それがアリーナへ到達する前に、弾はすでにアリーナに向かって跳躍していた。

◇◇
4

「ぐあッ……!」

何度目か分からぬ空礫で一夏の体が吹き飛ぶ。

「いい加減諦めたら?」

「諦められるかよ。俺は、退きたくない」

雪片式型を握りしめ、一夏は言った。

一夏にも意地がある。世界最強の弟で、五反田弾と鳳鈴音の幼馴染みというプライドがあるのだ。

「……そう。私だって譲れない。譲ってやらない」

「だったら、白黒つけなきゃな」

「ええ。全力で来なさい」

「最初に言っただけだぜ、『全力で』ってな！」

一夏が咆え、両者が飛び出て――

それを引き裂くように閃光が走り、轟音が駆けた。

鈴の衝撃砲とは比較にならないほどの衝撃が、アリーナ全体を揺らす。遮断シールドを貫通してきたそれは、アリーナの中央で土煙を巻き上げながら佇んでいた。

アリーナに緊急警報が鳴り響き、破壊された遮断シールドが高レベルで再編、構築されていく。生徒たちが混乱する中、一夏と鈴はその侵入者に目を見張っていた。

灰色のISだ。無骨な、鋼鉄からそのまま削り出したようなフォルム。腕だけが異常に大きく、四つの砲口が見えていた。

フルスキン、通常露出する操縦者の地肌が見えない完全装備の装甲である。

「お前なんだよ……？」

一夏の問いかけは、直後に発射された熱線によって答えられた。

遮断シールドを貫通する威力ということは、つまりISのシールドも貫通する威力を持つているということ。絶対防御があるにしろ、当たればただでは済まない。しかし。

その一撃は、上空から飛来した膨大な重圧によって掻き消えた。

「……よお」

弾がいる。一夏や鈴と所属不明の機体の間に立つように、弾はISを纏って立っていた。

一夏と鈴からは背中しか見えなかったが、その顔を見れば息を飲んだことだろう。彼らとて一度しか見たことのない、弾が本気で怒っているときの顔だったのだから。

「……この戦いには、様々な思いがあった」

弾は言う。語りかける。

その一言と共に大地が割れ、天が揺れた。

「この程度も反応できねえのかよ……ッ！」

ISのハイパーセンサすら処理しきれない速度で接近、そのまま殴りつけたのである。

しかし襲撃者はその一撃を意に介さず、巨大な腕を弾に突き付けた。エネルギーが収束され、打ち出されようとした瞬間に、弾は襲撃者の横へと移動していた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」

腕と足で突き出された腕を挟むように上下から攻撃を放つ。その威力に耐えきれなかった腕が、千切れるように吹き飛んでいった。

さらに流れるような動作でもう一つの腕をつかみ、勢いよく上空へ投げ飛ばす。後を追うように弾も地を蹴った。

中空で地面に叩き付けるように蹴りを放つ。頭部を穿たれた襲撃者が地面へと激突し、着弾点を大きく隆起させながら撥ねた。

そして、襲撃者は再び弾の前に現れる。

ダメ押しに回転蹴りを叩き付けた頃には、襲撃者の体はボロボロになっていた。四肢は半ば千切れかけ、装甲は無残にもひしやげている。

「弱え弱え弱え弱えッ！どうしたテメエ、こっちはまだ全力も本気も出してねえぞッ！」
弾は地面に激突したまま動かない襲撃者を片手で持ち上げ、思いつきり投げ飛ばした。誰もみ回転しながらアリーナのシールドに衝突する。

「だ、弾……。やりすぎだ……」

「人間は入ってねえんだ。大丈夫だろ」

「は？入ってないって、無人機ってことか？」

「無人機なんてありえないわ」

「んなこと言っても、乗ってねえんだから仕方ねえだろ」

弾が肩をすくめていると、襲撃者が動き出した。投げられたことにより頭部の半分が消し飛んでいるが、それでも各部を軋ませながら動き出している。

「な？」

「本当に無人機なの……？うそ……」

鈴が絶句した。ISは人間が乗らなければ動かないという常識が、目の前で覆されたのだから当然かもしれないが。しかし、立ち直りも早かった。弾が片っ端から常識を打ち破っていくので、その辺の耐性は付いているのだ。

「あれ動き出しちゃったけどどうするのよ？」

「ドカンとやっちゃまうか」

そう弾が言った時。

謎の襲撃者が最初にアリーナのシールドを破壊した時の数十倍以上の衝撃が会場を揺らした。

「本当にドカンと来たんだけど」

「俺は何もやってねえぞ」

「じゃあ一体……？」

三人が上を見上げると、そいつは簡単に見つかつた。光を吸収する黒いプラスチックで作られたような人型が、まるで空中に仁王立ちしているかのように立っている。

「あれも無人機？つていうかISなの……？」

「……」

「弾？」

返事を返さない弾を不審に思い一夏が顔を覗き込むと、弾が緊張したような顔でそいつを一身に睨んでいた。

初めて見る顔。切羽詰まっていると言つてもいいかもしれない。

「弾？」

「……一夏、鈴。悪いが向こうを頼む」

先程の襲撃者を指差しながら、弾は呼吸を整えていく。

「お前は？」

「あいつをやる。理解はできんが、あれは俺がどうにかしなきゃいけない気がする」

「……分かった」

一夏の了承の声を聞き、弾は黒い人型に向かって跳んだ。ほぼ同じタイミングで、人型もその場から動く。

「フッー！」

呼吸と共に弾は正拳突きを放った。常人では視認することも不可能な速度での一撃だったが、黒い人型は事も無げにそれを受け止める。

続けて二発。しかしそれも、簡単にいなされてしまう。

「——瞬拳！瞬閃！瞬天！」

さらに音速を軽く超える拳打を立て続けに放った。瞬拳の二倍の速度を誇る瞬閃、そして瞬閃の四倍である瞬天。音速を超えたことによつて生まれたソニックウエーブで

アリーナのシールドに罅が入る。

だが、それらも止められてしまった。

たしかに全力ではなかったが、反応できるようなぬるいものではないはずなのに。

驚愕によって弾の動きが一瞬止まる。黒い人型は、それを見逃さなかった。

弾の突き出した腕をくぐるようにして自身の体を絡め、後頭部に容赦なく蹴りを叩き付ける。

「ツガア！」

アリーナの隔壁に叩き付けられ、弾は苦悶の表情を浮かべた。今ので腕を一本折られてしまったようだ。

「デメエ……！」

弾の双眸がさらに赤く輝いていき、黒い人型に飛び出そうとすると、急に『ブラッティ・ロード』がアラームを鳴らした。

目の前には『グラビティ・アトラクション』と表示されている。確認すると、データ

が脳へ直接送られていった。

「いっしょ……」

口元を綻ばせ、弾はそれを惜しみなく使用する。追撃のため接近してきた黒い人型が、突然弾き飛ばされた。

重力と引力の操作。それが、『グラビティ・アトラクション』の能力だ。ISの無効できる範囲を超えた莫大な奔流を生み出すことが可能。

新しい、そして唯一の『ブラッディ・ロード』の武器である。

進化した『ブラッディ・ロード』と共に弾が黒い人型に襲い掛かろうとした瞬間、そいつは溶けるように虚空へ消えていった。

「ああ……う？」

弾が怪訝そうな声を上げると、一夏と鈴が丁度襲撃者を倒したところだった。鈴の空礫の後押しを受け、一夏が瞬剣を当てたのだ。どうやら一夏は音速を超える感覚を掴んだようで、もはや二刀でなくとも瞬剣を発動させることができる。

向こうの決着はついた。故にあれは退いたということか。

あるいは、長年弾が懸念していたことが現実になったということなのだろうか。

「なんなんだよ……くそッ」

握った拳を隔壁に叩き付ける。隔壁が陥没するが、弾の苛立ちは消えなかった。

今の攻防で、確証はないが黒い人型が何者なのかある程度理解できた。理解できてしまったからこそ、弾の苛立ちは深くなるばかりだ。

そんなはずはないと思う。確証は得られていないのだから、弾の思い違いという可能性も十分あり得る。

だが、一度その考えを持ってしまえば簡単に拭うことなどできはしない。

「くそ……」

もう一度呟いて、弾は一夏と鈴のもとへ降りていった。

結局、試合は中止となった。あんな事件が起これば当たり前だが、一夏と鈴は残念がつていた。それでも、試合を通じて和解したらしく、前と同じように会話し、ふざけ合っている。

仲直りができたのならば、弾の当初の目論見は達成できた。尾を引く思いこそあるが、素直にまた三人でつるめることを喜んでおくことにする。入学から一ヶ月も経ったが、予想以上にハードスケジュールで大変だった。区切りをつけるという意味でも、最適だったはずだろう。

とりあえず訪れた平穩の中で、今は羽を休めることにする。きつとこれから、今まで生きてきて培ったものすべてをひっくり返すような何かが起こるはずだから。

あるいはその時こそ、五反田弾は■■■されるのかもしれない。

気に入らぬ運命ならば刃向って見せよう。

受け入れるべき運命ならば笑って受け入れよう。

いずれにしろ、覚悟をつけなければいけない。

全てを失う覚悟を。

やがて動き出す、運命をむかえるために。

The two transfer student

五反田弾が持っている前世の記憶、つまり■■■■であった時。

弾同様に彼は強く——否、この場合は彼同様に弾が強いというべきだろうが、とにかく彼は強かった。

音速をはるかに超える人間がいるか？

空を蹴り、水面に立つことができる人間がいるか？

核兵器にすら耐えられる体を持つ人間がいるか？

そんな常識を、超えてはいけない境界線を、軽々と飛び越えてしまった。

そして今、ここに五反田弾が存在しているのは、彼が死んだということだ。

その最後。

天寿をまっとうしたわけではない。——彼は十五年しか生きなかった。

事故や病気で死ぬほどに軟でもない。——その程度ならばそもそも強いとは言えない。

殺されたわけでもない。——彼を殺せる存在など無い。

では、死因は何か？

彼を殺せる他人はいないが、彼を殺せる自分はいたのだ。
すなわち、自殺である。

——右目を潰し。

——喉を抉り。

——左腕を千切り。

——腹を穿つ。

あらゆる存在を駆逐する呪詛をまき散らし、憎悪に狂った血涙を流しながら。

彼はようやく死んだ。

死ぬことができた——はずだった。

けれど彼はここにいる。 ■■■は五反田弾として生を受けたのだ。

その生は劇的だった。彼の望んだものがそこにあつた。

馬鹿を言い合える友人と、恋に悩む友人と。

叱ってくれる年長者と、自分を兄と慕ってくれる妹と。

受け入れてくれる家族と、彼がいるべき場所がある。

命を賭けてでも守るべき存在たち。

五反田弾という世界をなげうってでも残したい場所。

——十分だ。これ以上を望めば、身を滅ぼしてしまうかもしれない。

けれど。

けれど、もし。

それ以上を望めるのなら――。

◇ 1

休日、五反田弾は実家である五反田食堂に帰ることにしていた。入学から一ヶ月と少し経っているが、いろいろあつて今まで顔を見せることもなかったのだ。ようやくトラブルも収まったので、こうして帰ることができる。

久しぶりに見る実家は昼時ということも合わさってだいぶ繁盛していた。五反田食堂から出てくる人が皆、嬉しそうなのを見るのは気分が良い。

「おや、弾ちゃんじゃあないかい」

「ひさしぶりつすねえ、おばさん」

家の前まで行くと、顔見知りの近所のおばさんが声をかけてきた。近くで八百屋を営んでいて、五反田食堂もお世話になっている。

そのおばさんが食堂の厨房に向かつて叫ぶ。

「ちよつと巖さん！お宅の孫が帰ってきてるわよ！」

「なにい！弾か!？」

野太い声と共に現れたのは弾の祖父であり五反田家の大黒柱、五反田巖だ。中華鍋を一度に二つ振るうその筋骨隆々の体軀は、八十を過ぎてもなお健在である。そのあたりは、やはり血筋だろうか。

「よおじいちゃん」

「『よお』じゃあねえだろ。ちったあ連絡を入れやがれ。馬鹿もんが」

「だからこうして顔を見せに来たんじゃあないか。親父は？」

「あいつは出かけてるよ。おい、蓮！弾が帰ってきたぞ！」

「聞こえてますよ、お父さん」

優しい笑みを浮かべた女性が店の奥から出てきた。五反田蓮、弾の母親である。

「ただいま母さん」

「ええ、おかえりなさい。上に蘭がいるわ。あなたがいなくなつて寂しがつてたから、行つてあげなさい」

「おっけ。んじゃあまた後で顔出す」

敵と蓮にそう告げ、弾は裏口から家に入った。面倒くさいが、これにより店の喧騒が私生活に入らないようにしてあるのだ。

蘭の部屋の前に立ち、ノックする。すぐに「はい」と間延びした声が聞こえたのでそのまま扉を開けた。

弾と同じく赤みがかつた髪を後ろで一つにくくつている蘭が、ラフな格好でベッドに寝転がりながら雑誌を読んでいた。

「一ヶ月じゃ何も変わらねえなあ」

「ふえ？——つて、お兄!?!帰つてきてたの!?!」

声をかけられてやつと弾だと気付いた蘭が驚愕の声を上げた。雑誌を読むのをやめて上半身を起こし、ベッドのふちに腰掛ける。

弾もその辺にあつた椅子を引き寄せ、蘭の正面に座つた。

「ああ、さつきな。俺がいなくて寂しかったんだつて？」

「ち、違うよ。そんなことないもん」

「はっはっは」

顔を赤くして唇を尖らせる蘭の頭を、わしやわしやと撫でてやる。意地を張っていた蘭も、撫でてやると途端に機嫌をよくした。抵抗しないのを確認し、少しずつ手つきを優しくしていく。

「あうう……気持ちいいよお兄……」

「……まあ、こんなもんだな」

蘭の目がトロンとなつてきたところで撫でるのをやめた。昔知人に見られたときに『性犯罪の現場に行くわしたのかと思つた』と言われて以来、過度なスキンシップは控えるようにしている。

しばらく呆けていた蘭ははつと我に返り、さつきより顔を赤くしてほこほここと弾の体

を叩いてきた。

「もう！止めてよああいうの。私中三なんだよ？」

「お兄ちゃんの愛情が嫌なら抵抗しろ。嫌がるそぶりをちよつとでもしたら止めてやるよ」

「うう……」

そういつてやると、蘭は呻いて体を縮こめた。兄離れは当分先のようなのだ。

「まったく、そんなんじやあ一夏の奴を盗られちまうぞ。鈴も日本に帰ってきてるし」

「えっ？鈴さんが？」

「ああ。他にも一夏に好意を寄せてるやつは結構いるぞ。ただでさえアイツはモテるのに、周りが女子だらけじゃあな」

「うわあ……。そんなような気がしてたけど、やつぱりかあ……」

蘭は深くため息をつきながら、ベッドに寝転んだ。そのまま天井を仰ぐ。

肩を落としているようだが、思ったよりもショックではないらしい。普通、意中の相

手の競争率が高いとなればもつと落ち込むと思うのだが。

弾は恋をしたことがないのでその辺は勝手な想像だ。

「もつと気落ちするかも思っていたんだが、そうでもないな」

「まあ、予想はしてたしね。それに、なんて言うかな……冷めたつていうわけじゃあないんだけど、あんまり気にしなくなっただよね」

「……？」

「一夏さんと私じゃあ住む世界が違う、みたいなの？うくん、うまく言えないんだけど

……」

「??？」

「つまり、神様みたいなものかな。触れられないけど、力をくれるっていう感じ」

「……俺にはわからない。わからないが、半端な気持ちじゃあないのならいい」

理解できなかったが、蘭は割り切ってしまったということだろうか。これも一種の失恋なのか、弾にはさっぱりわからなかった。だが、蘭の表情は晴々としている。ならば、いいのだろう。

「しかし、一夏が神格化されるとはな。アイツとんでもねえな」

「さっきのは諭えだよ。諭え。それより、お兄はどうなの?」

「どうって、なにが?」

「好きな子とかできないの?告白されたりとか」

一瞬、呆気にとられてしまった。

好きになる?俺が?だれを?

それだけならまだしも、好意を寄せられるなんてありえない。

「何を言い出すかと思えば、そんなことあるもんかよ」

「なにそれ。時々不安になるんだけど、お兄って実は不能?それともホモだったりするの?」

「おまつ、何言ってるんだ。気持ち悪い」

妹の口から不能とかホモとか聞くことがあるなんて思いもしなかった。

嫌な汗と共に鳥肌も立っている。こんな戦慄を覚えたのは初めてだ。

サイキョーはうちの妹だった件について。

「その様子じゃあ違うんだよね。でも、それならそれでやっぱりおかしいよ。だって、女子高でしょ？女子だけでしょ？選び放題の食べまくりじゃん。食べまくりんぐじゃん」
「日本語で頼む」

「若さが迸ったりしないの？青い衝動を未成熟な果実にぶつけようと思わないの？」
「聞いてねえな、俺の話」

「お兄だつて鼻屑目なしにしても格好いいんだからさ。長身だし、足長いし。きつと陰でモテてるよ」

「ねえよ」

「というか、なんでお兄は自分のことに無頓着なの？もう少し——」

それから小一時間ほど、弾は蘭の説教(?)を受け続けていた。

最終的には、弾が頑張つて今年中に彼女を作るという意味不明な約束をさせられることと決着がついたのだった。

いつものように学生寮で起きたら学園内で『学年別個人トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』という噂が広がっていた。

どうしてこうなった？

ちなみに学年別個人トーナメントとは名前通りに学年別でのISトーナメント戦だ。学園生徒全員が参加するため、一週間をかけて開催される。

一週間という長い気がするが、数百人の生徒を捌くのだ。実際いそがしい。ともかく、噂の広がり方は尋常ではなかった。

発端がいつかはわからないが、学年別トーナメントの開始が予告されてからのことなので、つい最近のことだ。そこかしこで噂の真偽を確かめる女子たちが見受けられた。

この学園で知らない生徒はいないのだろう。皆熱心に裏付けを取り、その時流れた噂が更なる噂を呼んでいる。酷い悪循環だ。

嫌でも耳に入る女子たちの興奮した声を聞きながら、寮の食堂まで朝食を取りにぼけっと歩いていると、肩に何かがぶつかった。

「きゃっー！」

「ん？」

ぼすつ、と軽い音が響き、注意を向ければある女生徒が尻餅をついていた。今、この女性にぶつかつたらしい。

慌てて散らばつた書類をかき集め、手を貸して立たせる。

「すみませんね。ぼーつとしてたもんで」

「い、いえ。大丈夫です」

立ち上がった女性は書類を受け取り、苦笑しながら頭を下げてきた。制服から察するに、三年生だ。気のせい程度だが、どこかで見た覚えがある。

確か……。

「生徒会の人？」

「あら、よく知ってますね」

「いや、まあ……」

苦笑を返しながら、やつぱりかと心中で頷いた。入学式や何かの集会で挨拶をしていたはずだ。びしつとした雰囲気とメガネで、秘書とかキャリアアウーマンを連想させる。

女性は佇まいを直すと、もう一度頭を下げた。

「では、これで」

立ち去っていく女性の背を、弾はじつと見つめる。廊下の先に消えていく女性を見ながら、らしくもなく「名前を聞いておけばよかった」と思った。

今からでも遅くはないはず、と歩き出そうとした時、一夏がいつもの面々を連れてやってきた。

「弾、そんなところで立ち止まってどうしたんだ？」

「あ？いや……なんでもない」

出鼻をくじかれ、弾は女性を追うのを諦める。どうせ、大したことでもないのだ。蘭に言われたために意識してしまっただけのこと。

そう自分に言い聞かせて、弾は一夏達と共に食堂へ歩いて行った。

教室でも学年別トーナメントの織斑一夏についての噂はあちこちで交わされていた。他のクラスはいつもより三割増しでテンションが高いが、このクラスだけ倍の勢いでテンションが高い。

件の織斑一夏がいるからか、それともともとそういうクラスだったのか。おそらくは後者である。

「ねえねえ、五反田君は何か知ってる？」

「いや、何もしらねえぜ」

隣の女生徒が聞いてくるのに対し、正直にこたえる。嘘をついたところで得になるわけでもないし。

まあでも、どうしてこんな噂が流れているのかは推測できた。

箒が顔を真っ青にしているのと、いつものほほんとした女生徒がいる三人組がにやにやと笑っているからだ。

おそらく箒が一夏に『学年別トーナメントで優勝したら付き合ってくれ』とか言ったのを聞いていたあの三人組が、何を勘違いしたのか『学年別トーナメントで優勝したら

織斑一夏と交際できる』と広めたのだろう。

おそらく一夏自身は箒に告白された時点で買い物に付き合う程度の認識なのだろうけれど。

決死の覚悟で挑んだ告白を勘違いされ、さらに意中の相手が盗られてしまうことになりうるなんて、箒がすごく不憫に思える。

中立を誓っている弾だが、このときばかりは箒を応援したくなつた。

「なあ弾、なんで皆熱心に語りこんでいるんだ？」

「……ボケが」

「酷くね!？」

そんなこんなで話していると、予鈴が鳴り千冬が入ってきた。それと同時に、喧しかった喧騒がピタツと止み、全員が整然と自分の席に座る。

「諸君、おはよう」

「おはようございますー!」

綺麗に一致した挨拶を聞いて千冬は満足そうに頷き、事務的な内容を語りだした。

本格的な実践訓練にうつるということであり、それに伴うISスーツの話だ。忘れた者は水着（絶滅危惧種のスクール水着）、それすら忘れた者は下着で授業を受けさせるとか。

ちなみに専用機持ちは『パーソナライズ』というものがあり、着替えなくてもIS展開時に自動でISスーツになる。無駄にエネルギーを食うので緊急時以外は普通に着替えるのだが。

ところが弾は完全に違う。もはや服装を含めてISであるらしく、どんな格好でも強制的に変換されるのだ。便利か不便かで言うと便利だ。着替えなくていいのだから。

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はい」

ぱぱつと事務報告を終わらせて、ホームルームを始める。

慌てて佇まいを直した真耶が教壇に立ち、ドツキリを仕掛けた人物のような笑顔で口を開いた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

一人は温和そうな、金髪でエメラルドの瞳が輝く絵本から出てきたような人物。
というか、男であつた。

「お、男……?」

「はい。こちらに僕と同じような境遇の人がいると聞いて本国より転校を——」

そう説明するデュノアの立ち姿はまさしく『貴公子』そのもの。リアルに白馬の王子様を行っている。

そして当然、女子のテンションもマックスになる。

「きやあああああああつっ!」

「男子! 三人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「テラワロスwwww」

「う……うろたえるんじゃないッ！ I S 学園生徒はうろたえないッ！」

騒ぐクラスを、千冬が一言言つて黙らせた。「静かにしろ」だけで本当に静かになるのだから、実にやりやすい。

続けて、二人目に注意が向く。

イメージで表すならば軍人。綺麗な銀髪にゴツイ眼帯。背筋を伸ばし胸を張るその姿は、実際鈴と同じような身長にもかかわらず、同年代とは明らかに一線を画していた。

「……」

「……」

何も言わずに立っているの、自然とクラスも沈黙に包まれた。
見かねた千冬が、ため息をつく。

「……挨拶をしろラウラ」

「はい、教官」

「私はもう教官ではない。先生と呼べ、先生と」

「了解しました」

「……はあ」

千冬がもう一度ため息をついた。

千冬を教官と呼ぶということは、間違ひなくドイツ軍に関わりのある人間だ。千冬は昔一年だけ、ドイツで指導していたことがある。

素直にドイツ軍人だと言ってしまったえばよい。今のご時世、そう珍しいものではない。だが、弾としてはあまりいい気はしない。

間違っている、と強く思う。

今ここで考えても意味のないことだが。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……」

クラスの皆が続く言葉を待っているが、ラウラはもう用は済んだといわんばかりに直立している。

「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

即答。尋ねた真耶も涙目である。

と、そこでラウラと一夏の目が合った。

「！貴様が——」

いきなり、ラウラが一夏の前に躍り出て、その腕を振り下ろした。

むにゅ。

のだが、平手打ちでは絶対にしないであろう音がした。音というよりは、絵面からくる擬音なのだが。

「え？」

一夏が素つ頓狂な声を上げたとしても、仕方ない。目の前で弾がラウラのほつぺをつまんで引つ張っていた。

「ふえ？……はっ！ひはま、はいをふる！」

訳：貴様、何をする！

ラウラがじたばたと暴れるが、その程度では弾を振り切ることなどできはしない。弾も弾で放す気はないようだ。

にやにやと笑つて、ラウラの頬を弄んでいる。

「へえい！ははしえい！」

訳：ええい！放せ！

ぶちぎれたラウラが問答無用で弾を制圧しにかかるが、しかしそれすらも弾の前では無意味。ひらりと身をかわす。この間もしつかりと頬をつまんでいた。

ラウラが負けじと技をかけ、時にはフェイントを入れて弾から解放されようと必死になるが、弾はその全てを軽く流していく。

もちろん、ほっぺをつまんだまま。

ここで少し説明しておくが、体格の差、重量の差は生身の戦闘では無視しえない要素になる。

体格が大きければその分手足が長く、リーチが長いということであり、さらに筋肉量も増える。重量があるということは相応の頑強さがあるということ、投げることも組むこともしづらくなる。

それを補うための格闘技であり技術の進歩であるが、しかしその差を無視するにはいまだ至らない。弾のようにぶつ飛んだ人間ならそれも可能だろうが、ラウラはあくまで人間の範疇を超えてはいない。

つまり背の高い弾と、女子の中でも背の低い部類のラウラとでは圧倒的にラウラが不利なのだ。加えて弾の規格も合わさって、もはやラウラに勝ち目などなかった。

「うう……ううう……」

少しの間だけであったが密度の濃い攻防の末、もはやラウラは唸るだけになってしまった。

そこでようやく弾が手を放した。

「はははははッ！楽しいね、まったく！」

「き、貴様……！」

頬をさすりながらラウラが弾をにらむが、睨まれた本人はどこ吹く風で自分の席へと戻っていく。

面白すぎる。

それが弾のI S学園の評価だった。やはりここに来てよかった。そう、心から感じている。

自らを男と偽って一夏や弾に近づこうとしている貴公子に、自然本来の生まれ方をしていない冷水のごとき軍人。

そんな奴らが転校してくるのは世界ひろしと言えどもここだけであろう。ざわめいている教室が千冬の咳払いで静かになった。

「ラウラ、座れ」

「は、はい……」

ラウラが割り振られた自分の席へ戻っていった。その途中で一夏に「私は認めないからな！お前が教官の弟であるなんて！」とか叫んだ。

さっきのことは見ていた一夏は、苦笑いを浮かべていたが。

「あー……では、ホームルームを終わりにする。解散！」

千冬の投げやりな言葉で、朝のホームルームに一応の決着はついたのだった。

Meaning of violence

弾はかつてある少女に『自分の為の暴力以外には使わない』と言っている。

しかし、同時に一夏と鈴には『暴力に染まるな』とも言っている。

自分は暴力しか使わないと言っておきながら、他人には暴力を使うなという。矛盾しているが、それも仕方のないことなのだ。

大陸を持ち上げることができるといえる人間を味方につけるといえることがどういふことか。

その人間が誰かのために動くということはどういふことか。

それは、恐怖による支配と何ら変わりなくなる。

例えば、ISの生みの親である篠ノ之束。もし彼女がどこかの国に所属したらどうだろうか？

行き過ぎた科学力と兵力。

各国のパワーバランスが瞬く間に崩れ去る。そして彼女のいた国が頂点として君臨することになるはずだ。

かつてヒトラーがそうしたように、自分たちが上位種であると勘違いした支配が始まってしまっただろう。

ある一定のラインを超えたところで、『助力』すらも『暴力』に変わる。

人間を止めれば、一人でいなくてはならないという義務を背負うことになる。種からの逸脱とは、孤独と同義なのだ。

だから、剥いで捨てた人間の皮を被らなければならない。

孤独であることを受け止められず、一人で存在したくはないと思うのならば。

◇ 1

千冬がホームルームを強引に終わらせたので、一夏と弾はシャルルを連れて素早く教室を出た。このまま教室にいれば女子と着替えなければならなくなるからである。

さつとシャルルの手を取り更衣室へ向かいながら、一夏はシャルルに大まかな説明をしていく。千冬からめんどうを見るようにと頼まれたのだ。

「とりあえず、男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早く慣れてくれ」

「う、うん……」

シャルルが落ち着かなそうに頷いた。一夏の説明を聞いていたかも怪しい。

「どうした？ トイレか？」

「ち、違うよ！」

「無駄話はそこまでにしとけ」

弾が冷たく言い放つ。一夏も真剣な顔になって歩く速度を上げた。

シャルルはそれを見て、戸惑うしかなかつた。彼らが放つ雰囲気はまるでここが戦場なのではないかと思わせるほどなのだ。ただの授業移動に、どんな危険性が潜んでいるというのか。

意を決して、シャルルは一夏に訊いてみた。

「ね、ねえ……」

「ん？ どうした」

「いや、なんでこんなに——」

殺伐としているのか？

そこまで言う前に、シャルルの目の前で一夏と弾はそろって身を硬直させた。

「……弾」

「ああ、来たぜ……！」

一夏がごくりと生唾を飲み込んだ。先程から繋がれている手から、一夏がかなり緊張していることがシャルルにはわかった。

自然、シャルルも警戒せずにはいられない。

恐る恐る、一夏お弾の前を覗き込んだ。

そこにいたのは――

「ああっ！転校生発見伝！」

「しかも織斑くんと五反田さんもいるじゃない！」

男子三人を見つけてきやつきやと騒ぐ他クラスの女子だった。少くない数の女生徒が通路を埋める。どのクラスもホームルームが終わったのだ。

「な、なんだ。ただの生徒じゃないか……」

物珍しげにこちらを見てくる生徒たちを見て、シャルルは安堵しながらつぶやいた。どんな化け物が出てくるかと思えば、ただ授業に行きにくくなるだけだったのだ。

あの『世界最強』織斑千冬は厳格そうだから、おおかた授業に遅れるのが嫌で早く行きたかったのだ。

しかし、シャルルのつぶやきを聞き逃さなかった一夏は、露骨に脂汗を流しながら苦々しそうに言った。

「ただの？それは違うぞ……」

「え？」

「あいつらは、弾が鍛えたんだ。鍛えてしまったんだ」

「え？え？」

五反田弾に関しての情報はシャルルの耳にも入っている。たしかにかの『魔人』が鍛えたのならば、とんでもなく強い集団になったのかもしれないが、それでも今現在において脅威ではないだろう。

実際は鍛えたというよりも、弾の戦いぶりを見た生徒が彼の師事を仰ぎ、それをめんどろくさがった弾が毎日鍛錬とはとても言えぬ『俺が腕を振って立ってたやつはまあ、頑張ったね』という超投げやりなものによつて勝手に鍛えられていった生徒たちである。

「そこまでならまだ良かったんだ。問題だったのは——あいつらが馬鹿だったってことなんだ……!」

「え?」

思わずシャルルが聞き返す。だが、聞く意味などもうなかった。なぜなら、すでに彼女らの会話が耳に届いていたからである。

「うえへへへ……美男子が三人……じゆるり」

「織斑×デュノア、いやむしろデュノア×織斑……これはいける……」

「捕まえて、ひん剥いてしまおう……」

「「ふふふふふ負腐」」

彼女らの笑い声に一夏が戦慄した。彼の中にあるトラウマを呼び起こしたのか、そのまま頭を抱えて体を震わせる。

弾がそれをブレンバスターからの四の地固め、そこから足を掴んで空に放り投げ、オープン・ハンド・ブローで吹き飛ばすことによつて正気に戻し、再び騒ぐ女子たちを見つめるといふ構図に戻った。

「がががががががががががが……」

「あの、五反田君。織斑君が別の意味で帰ってこないんだけど」

「俺のことは弾でいい。それと、一夏は殴つとけば治る」

「いや、殴つたからこうなつたんだよ!？」

※無理だとは思いますが危険ですので、絶対に真似しないでください。

「……それで、ここからどうするんだ弾」

「きやあああつ! たちあがつたあつ!？」

「うおつ! 耳元で叫ばないでくれ」

「ででででも、だ、だだ、だつて! だ、大丈夫なの織斑君!？」

「……う？別に何ともないぞ。それと、名前がいいから。俺も名前で呼ぶし。三人だけの男なんだ」

「う、うん……」

さわやかに話す一夏を見て、シャルルは若干引き気味に頷いた。

そんなシャルルの様子を見ていた弾が、意味ありげに笑う。

弾の笑みを見て、ぞつとした。

総てを見透かされているかのような視線に、シャルルは総毛だつ。

まさかまさかまさか——！

思考が凍る。一つだけが頭の中で回っている。自分の秘密がばれているのではないかと、確証もないのに恐怖した。

「一夏、俺は先に行く。そいつを頼む」

シャルルの不安をよそに、弾は一夏に言った。

「はあつ!?ちよつと待て、置いてくのか!?俺らを!?見捨てるのかよ!」

「がんば」

「サムズアツプするなああッ！」

一夏が叫んだ。シャルルの不安もどこへやら、こんなお茶らけた人物が秘密を知っているわけがないと自分に言い聞かせる。

さて、と弾がじりじりと迫ってくる女子たちに向き直った。

「いくら五反田さんだとしても、この人数を突破するのは無理！」

「おとなしくひん剥かれてください！」

「フラグ立て乙www」

女子たちが息巻くのを見て、弾はふつと笑う。

次の瞬間には、弾は女子たちの壁を抜けたところに立っていた。

「お前らは今の俺の動きを少しでも見ることはできたか？」

動作の予兆を感じることができたか？

五感のどれか一つでも捉えることができたか？

できなかったのならば、俺を剥くなんて夢物語にもなりやしねえぜ」

それだけ言い残して、弾は掻き消えた。

「くっ……さすがは五反田さん。今の私たちでは到底かなわない……！」

「さすが弾だなあ……置いていかれたけど」

「一夏なにあれ!? あれが噂の『ジャパニーズNI☆N☆JA』!?!」

「いや、シャルル。ただの規格外だ」

シャルルが目をキラキラさせて叫んだ。

気持ちは分からなくもない。一夏も昔は興奮して叫んだものだ。

弾を取り逃がして沈んでいた女子が、唐突に顔をあげた。

「しかし! そうしかし!」

「私たちには別の目標が存在している!」

そう言うや否や、目を爛々と輝かせた狩人が一夏とシャルルに飛びかかる

「おおうつ!!やべえ、逃げるぞシャルル！」

「う、うん！」

「「逃がすかああああああああつ！」」

＜ 2

狂った女子との逃走劇も終わり、一夏とシャルルはどうか更衣室までたどり着くことができた。

「時間ぎりぎりだ。早く着替えちまおう」

時計を見れば本当にギリギリだったので、さっと制服を脱ぎ、一呼吸でシャツも脱ぎ捨てる。

「わあっ!?!」

「ん?」

シャルルが一夏を見て硬直する。心なしか顔も赤い。

「どうしたんだ？早く着替えないのか？」

「い、いや、着替えるけど。でも、その、あっち向いてて、ね……？」
 「???別に着替えをじろじろ見る趣味はないが……」

なんだかシャルルの様子が変わったが、気にせずISスーツに着替えてしまう。着替え終われば、更衣室にいる意味はない。すぐにグラウンドに向かう。

「シャルルのスーツ着やすそうだな。どこのやつ？」

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフアランクスだけど、ほとんどフルオーダー」

「デュノア？」

「あ、うん。僕の家だよ。父が社長をしているんだ」

「へえ！御曹司、ってやつか？すげえなあ」

「一夏もすごいと思うよ？あの『世界最強』の弟なんだから」

「ハハハ、こやつめ」

「何がこやつめ、だ。とつとと列に並べ」

「えっ!?! 千ふ「バシインツ!」——……織斑先生」

いつのまに千冬が一夏の後ろに立っていた。出席簿を食らった頭を抱えながら、一夏はシャルルと一緒に一組の列の最後尾に並んだ。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

隣はセシリアだった。四月のクラス代表決定戦（セシリアに言わせれば決闘）以降、何かと一夏に構ってくるようになったのだが、一夏はその真意を理解できていない。

「またあの集団ですか?」

「そうなんだよ。さすがにやっつてられない」

「二月続けて女性に叩かれるような方には丁度良いのではないかしら?」

セシリアが冷たく言い放つ。その視線は氷点下を軽く下回っている気がした。

その会話を聞いて、後ろの二組の列に並んでいた鈴が食いついてきた。

「なになに？アンタ、またなんかやらかしたの？」

「いや、鈴。なんでもないんだ」

「なんでもないわけないでしょう？こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子に叩かれましたの」

「はあ？一夏、アンタ本当に馬鹿ね」

「……安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二人いる」

「お、織斑先生!」

セシリアと鈴の音がハモる。恐怖からか、壊れたおもちゃのように体を震わせていた。

バシン！バシン！

青い空の下、今日も出席簿が飛んでいた。

要約。

山田真耶はすごかった。

ISのデモンストレーションとしてセシリアと鈴が組み、二対一で真耶と戦ったのだが、結果は真耶の勝ち。急造の、しかもいがみ合つてろくに連携などしていなかったとしても代表候補生二人を相手に手玉に取るとは、それだけで真耶が相当な実欲者であることがわかる。

IS学園教師の名は伊達ではなかった。

それでも、セシリアと鈴は弾の所為で恐ろしく強くなっている。今回は互いに互いの足を引っ張り合う形になってしまったが、一対一ならこれ以上の成果が見込めただろう。

「さて、これで諸君にも学園教員の実力がわかっただろう。以後は敬意をもって接するよう。」

専用機持ちは五反田を除いて八人か。では、八グループになって実習をやってもらおう。グループリーダーは各専用機持ちがやること。ではわかれろ」

千冬が言い終えると、一夏とシャルルのもとへ一氣に二クラス分が流れ込んできた。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順にグループに入れ！次にもたついたらISを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

千冬の鶴の一声。一夏とシャルルに群がっていた女子たちは綺麗に八グループに分かれ、規律正しく並んでいた。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

「ちひゆさん。俺は？」

弾が千冬に訊く。弾はこの實習に意味がない。弾が使っているISは普通ではないからだ。しかし、唯一人見学するのも悲しすぎる。

「ああ、お前は實習に使うISを持ってきてもらう。その後適当なグループに入ってもらいたいんだが……。それより、お前今私の名前囃んだろ？」

「失礼、囃みました」

「違う、わざとだ……」

「嘸みまみた」

「わざとじゃない!？」

そんなこんなで弾は『打鉄』三機、『リヴァイブ』を二機持つてきた。担いで、それも同時に。

運んでいる最中に気付いたが、八グループなのにISが五機しかないというのはどうなんだろうか。絶対数的な問題でそろえるのが困難だということはわかるが、残りの三グループは手持無沙汰になるだろうに。

競争社会を垣間見ながら、弾はISを各班に配る。その後、適当なグループに入れと言われているのだが、さてどのグループに入ろうか。

各班を見渡していると、一つだけ異様なグループがあった。

ラウラ・ボーデヴィツヒのグループだ。

他のグループは和気藹々としているのに、そこだけは通夜のように静かで暗かった。

「よう、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「……、五反田弾!き、貴様何しに来た!」

「なについて、俺もこのグループに入ろうかな、と」

「んな!? 貴様なんぞは要らん! 違うところへ行け!」

ラウラが怒鳴りながら睨みつけてくるが、弾としてはなかなか懐かない小動物を相手にしている気分だ。怖いどころか微笑ましきすら感じる。

ラウラを小動物とするなら、千冬は百獣の王であるので、つまりはどんな動物であっても恐怖など感じない、ということだが。

「なんで貴様は私に構うんだ!」

「あん? そりゃあ——」

ラウラの問いに、弾はさつきまでのふざけた雰囲気を一転させ、悪魔のように笑いながら見下した。その眼差しを見てしまえば、理性も何もかもをかなぐり捨てて襲いかかってしまいそうになる。

ラウラはこみ上げる『暴力』を、何とか押さえつけた。

そして、弾は言う。

「お前が気に食わないからだよ」

息を切らし、肩を上下させているラウラに弾の声がかかる。発生源は、土煙の中。やがて煙が晴れ、その中から姿を現したのは無傷の五反田弾。ISすら纏っていない。

弾がレールカノンを弾き落したということを理解した時には、ラウラはすでにプラズマ手刀を振り下ろしていた。もはや暴力的な衝動のみで動いているラウラのそれは手加減などされておらず、当たれば肉を引き裂きプラズマがそれを焼くだろう。

だが、弾はそれを受け止めた。それも、プラズマ部分を。

バチバチと紫電が弾を貫こうとしているが、制服は裂けても肉体までを傷つけることはかなわない。

「あああああああああああッ！」

ラウラは強引に押し切ろうとするが、弾の体は押ししても引いてもびくともしなかった。

それならば、とラウラがもう一度レールカノンを使おうとした時、弾が急に手を放した。口元を歪ませているのを見て、ラウラは戦慄する。

悪魔が拳を握った。

殺される——！

ラウラが死の恐怖を垣間見たその瞬間、

「何をしている！五反田ア！」

千冬が弾を殴って吹き飛ばした。否、衝撃を逃がすために弾が自ら跳んだのだ。

「なんなんですかね、千冬さん？」

「ふぎけるな。お前はもう帰れ。処分は追って知らせる」

千冬の言葉を聞き、弾は素直にグラウンドから出ていった。

千冬の背後ではラウラがISをとき、不安そうな顔で千冬を見ていた。

「き、教官……」

「大丈夫だ、ボーデヴィツヒ。非は明らかに五反田の方にある。罰がないわけではないが、軽いものだ」

「は、はい……」

どこことなく安堵した顔でラウラが頷く。

そこへ、目撃していた生徒が心配して集まってきた。口々に励ましの言葉をかけている。

「大丈夫？ けがはない？」

「災難だったねボーデヴィツヒさん」

「五反田さんってたまに変なこと言うんだよ。気にしないで」

その後、授業が再開されたが、ラウラの班は静かではあるものの、決して無言ではなくなっていた。

＜＜ 4

その日の夜、千冬は弾の部屋を訪ねた。

先程決まった処分を伝えるためだ。

ノックをし、中から声が聞こえたのを確認して部屋に入る。

「ありや、千冬さん。どうしたんスか？」

「……お前の処分についてだ。三日間の自宅謹慎。ちゃんと守れよ」

「へえ、思ってたより軽いな。あの嬢ちゃんは？」

「ISを起動したとはいえ、所詮お前に対してだ。ボーデヴィツヒの罪は周囲の被害を考えずに行動した点だけ。罰は反省文の提出、それから私の説教」

「所詮は俺って、ひでえな」

弾は口を尖らして不満そうだ。しかし、すぐにいつものにやけ顔に戻った。

「……どうして、あんなことした？」

千冬は、どうしても訊きたかったことを訊いた。今日来たのも、処分の連絡はついであり、本題はこれだった。

だが、千冬の問いに、弾はにやにやと笑うばかり。一向に言おうとはしない。

「何が目的だった？ラウラに同情させてアイツに友達でも作らせてやろうと思ったのか

?自分が悪役まで演じて」

「ラウラねえ……。いいのかよ、名前です。まだ仕事でだろ」

「私の問いに答えろ——弾」

千冬の威圧で部屋の窓ガラスがびりびりと振動した。しかしそれも一瞬、すぐに弾の威圧によって相殺されてしまう。

「こんな夜更けに物騒だぜ。千冬さん、あんたらしくない」

「弾……」

千冬のすがるような声に、弾は観念したように首をすくめた。

「千冬さん、あんたは暴力の意味を知っているかい？」

「暴力の、意味？」

予想だにしていなかった言葉に、千冬は呆気にとられる。はぐらかそうとしているのかとも思ったが、弾の顔はとても真剣だった。

「これは俺の考えだが、暴力というのは何かを求めて発生する。優越、快樂、物欲……何かを求め、それが力に関わったものが暴力なんだ。つまり、暴力の意味とは求道なんだよ」

「何かを求める……」

ラウラ・ボーデヴィツヒは強さこそ正義だと思っている。それは別に間違っていない。強ければ自己を通せる。そして己を貫けば、それはもはや一つの正義の形だ。

だが、ラウラは強さをはき違えている。あれはただの暴力だ。

「あいつがはき違った力、それが暴力。違うな、はき違ったんじやあない。意識せず、しかし自分ではいたんだ」

「ラウラが自分で……？」

「そう。さて、あいつは何を望んでいるのか」

もしかすると——そう言つて、弾は自嘲気味に笑つてつづけた。

「人間になりたいのかもしれないな」

「あいつは人間だ！」

「知ってるさ。いくら強化素体アドヴァンスドだとしても、ただの餓鬼には違いない。俺たちから見ればな」

「あいつが、自分を人間だと思っていない？」

「さあな。そこまではわからない。だが、あいつは求めている。それは確かだ」

弾と話したのはそこまでだった。強引に話を打ち切られ、部屋を追い出されてしまった。

寮長室へ戻りながら、千冬は考える。一年とはいえ、手塩にかけて育てた家族も同然の少女のことを。

少女が迷っているのならば、助けてやりたいと思う。千冬は教師なのだから。考えにふける彼女を、夜空に浮かぶ黄金の月が照らしていた。

Break the puppet

シャルルが転校してきてから、五日が経った。もともとの性格からかシャルルはすぐに周囲と打ち解け、この環境に適応するのに時間はかからなかった。

そして今日、シャルルと一夏はアリーナの真ん中で向かい合っていた。両者ともすでにISを展開している。

今日は土曜日だ。午前は授業があるが、アリーナが全面開放される貴重な一日でもある。その一日を使って、一夏はシャルルと模擬戦することになっていたのだ。

「行くよ、一夏！」

「来い。全力でな！」

開始のブザーが鳴った。

一夏は『白式』を駆り、シャルルは『ラファール・リヴァイブ』を操る。シャルルの『ラファール・リヴァイブ』はイコライザが倍、つまり他のISとは搭載できる武器の数が違う。遠距離から中距離を軽くこなすその様は、ちよつとした火薬庫のようだ。

開始のブザーと共に、シャルルの構えたアサルトライフルが火を噴いた。しかし、その時には一夏も動いていた。回転しながら射線の上をぎりぎりでも通り、遠心力をプラスして加速するその一刀。

すなわち瞬剣。

「うおおおおおおおッ！」

気合一閃。

音の速さで刀が振られる。音速を超える感覚を掴んだ一夏は、もはやよほど無理な体勢ではないならば簡単に音を置いていく。

しかし、振り切られた刀から伝わる手ごたえは失敗を告げていた。

「くっ！どっだ？！」

斬ったと思っていたが故に、その姿を見失ってしまった。慌てて周囲を確認するが、もう遅い。振り向いた眼前には、幾つもの手榴弾が放られていて――

そして、はじけ飛んだ。

「ぐ、おお……！」

体を貫いた衝撃に耐えきれずに呻く。いくらISがダメージを殺そうが、体を抜ける衝撃はあるのだ。どれほど慣れていようとも、衝撃波によつて硬直する体はどうしようもない。

その絶好の機会を見逃すシャルルではない。

あの一瞬で下方へ降りていたシャルルがライフルを連射した。雨のような弾丸が、容赦なく一夏を襲う。

「悪いけど、一通りの戦闘データは見させてもらったよ。開幕一番で決めてくると予想はしてたけど、まさか本当にやってくるなんてね」

そう言つて、シャルルは微笑んだ。

「あいにく……これだけが取柄だからな！」

叫び、一夏はスラストスターをふかし弾丸の雨から抜け出した。そのまま円を描くようにシャルルに近づいていく。

一夏の装備が『雪片式型』だけである以上、近づかなければ倒すことなどできやしない。だが、シャルルの主兵装は銃だ。相性が悪すぎる。

そもそも、高速戦闘を主とするIS同士の戦いにおいて、ダメージを与えるという面で銃火器は最も効率の良い武器だ。それ以外にも牽制、陽動にも使える万能性。

そのアドバンテージが一夏にはない。

だからどうした？

周りを見る。最強を語る奴は、銃など使っていないじゃあないか。

拳より強いものが剣、剣より強いものが銃ならば、銃より強いものは剣であり、拳である。

一夏はそう考えている。故に、装備が『雪片式型』だけというのは、一夏としてはとてもありがたい。その程度ができなければ、胸を張って千冬の弟と言いきれない。

「行くぞー！」

『瞬時加速』イグニッション・ブースト。

爆発的に加速した一夏がシャルルへと突っ込んだ。

「瞬劍ッ！」

下から掬うように瞬劍を放つ。

シャルルは冷静に後ろに飛ぶことでそれを避け、手榴弾をばらまいた。

だが――

「おおおおおおッ！」

「なっ!？」

一夏は切り上げた『雪片式型』の切っ先を返し、そのまま振り下ろす。当然のごとく、それも瞬劍だ。

新たに振り下ろされた音速の刃が手榴弾を払いのける。驚愕でシャルルの動きが止まった。

「お返しだ！」

その隙に距離を詰め、『零落白夜』を乗せた三度目の瞬剣を発動する。まるで居合のよ
うに中腰の姿勢から放たれるその一刀こそ、一夏が使用する中で最も速い瞬剣。

斬撃が直撃したシャルルが吹き飛ぶ。本命の一撃と、余波で生まれる衝撃波がシャル
ルを貫いたのだ。しばらくは体がしびれて動けないはずだ。

しかし、ハイパーセンサから伝わる寺手の情報がそれを否定した。

「……いい、つう。ホント、びつくりしたなあ……」

「……自分から吹き飛んでダメージを軽減したのか」

起き上がるシャルルを見て、一夏はおおよそを把握した。あの姿勢から繰り出される
瞬剣は確かに速く、そして強いが、速すぎるために手ごたえを感じられない。一夏が未
熟と言ってしまうばそれまでだが、修正しなければならぬ。

「うん、そうだよ。実習の時、弾君と織斑先生を見てたからね。ああしなきや、一撃で全
部持ってかれそうだったよ」

「あの時、か……」

シャルルが転校してきた日のことだ。

弾がらしくもなく同じく転校してきたラウラを挑発し、喉けたあの事件。ラウラを攻撃しようとした弾を、千冬が殴って止めたのだ。

その時、弾は衝撃を逃がすために自ら吹き飛んでいる。

だが、一夏はそれが不思議ではない。

シャルルが今言った通り、これは本来大きすぎて受け止めきれない力に対して使うものだ。弾からすれば千冬の拳など痛くもかゆくもないはずなのに、しかし彼は自分から吹き飛んだ。

そんな自演をして、いったい何があるというのか？

「……一夏？」

「ん？ああ、すまん。こんな時に考え事なんて失礼だな。さあ、再開しようぜ」

今はどうでもいいことだ。考え事なら後でもできるのだ。

シャルルに構えるよう促し、一夏は気合を入れなおす。

勝負はまだ、始まったばかりだ。

〈 1

「はあ……くそつ勝てなかつたあ！」

息も切れ切れといった様子で、一夏はアリーナに倒れた。シャルルが苦笑している。結局、シャルルには勝てなかつた。粘りに粘つたが、そこはやはり経験の差か。圧倒的な技術と精密な操縦によってシールドエネルギーを削り取られてしまった。

「いや、でもすごいよ。まだISに乗り始めて二ヶ月ちよつとなのに、あれだけ食いついてくるなんて」

「そうか?……ああ、でも悔しいな」

「悔しいなら、もつともつと努力しなきゃね」

「おう」

「あの二人も随分気合入ってるみたいだし」

そう言って、シャルルは隣で攻防を繰り返している二人を見た。

鈴とセシリアである。

どうも真耶に負けたことが相当悔しかったのか、ずっと二人で鍛錬をしている。傍目には積極的に攻撃を加えず、ただ向き合って移動しているだけのように見えるが、どこまで相手の意図をくみ取りそして動くことができるか、という訓練だそう。

最初の頃こそぎこちなかったその動きは、今になってはまるで二人で舞っているかのような印象すら覚える。さすがは国家代表候補生といったところであろう。

セシリアこそ最初の一回、つまりクラス代表を決める一戦だけは勝てたものの、今と成っては手も足も出なくなった。相性が悪すぎるのだ。

正直へこむ。

というか、曲がるビームに、死角から迫る一撃をどうかわせというのだろう。卑怯だ。

「はあ……」

自分もまだまだ未熟だということを改めて思い知らされ、憂鬱な気分になってしまった。一気に体の力が抜け、激しい脱力感に襲われる。

と、そこへオープン・チャンネルから声が聞こえた。

「おい」

不機嫌そうなその声はラウラ・ボーデヴィツヒのものだ。無視するわけにもいかない
ので、仕方なく答えてやる。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がない」

「貴様にはなくとも、私にはある」

そうだろうな、と一夏は思う。ドイツ、そして千冬と言えば一つしか思い当たらない。

第二回 I S 世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦。

織斑一夏はその日、誘拐された。目的はいまだわかっていないが、一夏は暗闇に閉じ
込められ監禁されていたのだ。

しばらくして千冬が助け出してくれたが、決勝戦を棄権してのことであり、千冬は大
会二連覇を逃した。一夏の誘拐事件については公表されていないが、千冬に一夏の情報
を提供したドイツ軍関係者だけは全容を把握している。そして、千冬はその借りを返す

ために、大会終了後の一年と少し、ドイツ軍で教官をしていた。

そのあと足取りが分からなくなり、現在 I S 学園で教師をしている。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

どうやら、ラウラ・ボーデヴィツヒも千冬の強さに惚れ込んだ一人のようだ。故に、千冬の顔に泥を塗った一夏を許せない。

一夏自身も、あの時の自分の不甲斐なさを恥じ、そして嘆いている。だが、それはそれだ。今は関係ない。

「また今度な」

「ふん。ならば——」

ラウラが I S を起動する。漆黒の装甲が展開され、左肩に装備された大型の実弾砲が一夏に向いた。

「戦わざるを得ないようにしてやろう！」

刹那、砲口が火を噴いた。

迫る実弾をシャルルがシールドで弾き、同時にアサルトカノンをコール、ラウラに向ける。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。五日前のことを見る限り、まるで見当違いってわけでもなさそうだし」

「貴様ア……！」

嫌なことを思い出させられてか、ラウラが歯ぎしりしてシャルルをにらんだ。だが、シャルルは人をも射殺せそうな視線を浴びても平然としている。

「フランスのアンティークごときが……！」

「いまだに量産化のめどが立たないドイツのルーキーよりは動けるだろうからね」

緊迫した状況の中、一夏は先程シャルルが見せたコールの速さに驚愕していた。

通常、武装のコールには一から二秒ほどかかる。シャルルはその量子変換を一瞬で、しかも照準を合わせながらやってのけたのだ。

一夏は一人得心する。

やり過ぎともいえるバスのスロットの拡張は、これがあつてこそそのものだったのだ。相手の戦闘方法によつて変幻自在に、しかも瞬間的に変えられるのだから、持久戦に大きなアドバンテージがある。

シャルルが代表候補生なのにも納得の技術だ。

「その生徒！なにをしている！学年とクラス、出席番号を言え！」

突然アリーナに声が響いた。騒ぎを聞きつけた教員だろう。

「……ふん。今日は引こう」

二度の横やりで興がそがれたのか、ラウラはあっさり戦闘態勢を解除してアリーナから出ていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かった」

一夏が礼を述べると、シャルルはビクつとなつてから慌ててそっぽを向いて「い、いいよ」と言った。

照れてるのだろうか。さっきの姿からのギャップが何とも微笑ましかつた。

その後、一夏とシャルルはアリーナを出た。変な空気になつてしまったこともあるが、時間も時間だったので丁度良かったともいえる。

帰り道、真耶から男子も大浴場が使えるようになるという旨を伝えられた。今まで部屋のシャワーだけで窮屈な思いをしてきた一夏にとっては、まさに天からの祝福である。

感激のあまり真耶の手を掴んで喜んでしまったが、なぜかそれを見ていたシャルルが不機嫌になり「シャワーを浴びる」と言つて先に部屋に戻つてしまった。

これが原因であんなことになるとは、この時の一夏には良そうもできなかったのだつた。

五反田弾の謹慎が解け、はや二日である。

謹慎中は飯を運んでくる人以外には会うことがなく（一夏達も会いにくのを禁止されていたようだ）、それが終わって外に出れば当然質問攻めにされると思っていたのだが、そんなことはなかった。

何も聞かれない。

かといって、避けられているというわけでもない。

いたって普通。そう、普通なのだ。

何も聞かないのか？と一夏らに尋ねたが、返ってきたのは「お前が意味のないことをするはずがない」の一点だった。

弾に全幅の信頼を寄せてくれているのか。それとも馬鹿か。

おそらくは前者であるのだろうが、その場合は後者も多分に含まれてくるので、結局どっちも正解だ。

何とも形容しがたい気持ちになりながら、弾は寮の廊下を歩く。

久しぶりに一夏の部屋に行ってみようと思いい立ったのだ。フランスからの転校生、シャルル・デュノアがいたから遠慮していたのだが、弾の予想ではそろそろ面白くなっ

ているはずである。それを見逃す手はない。

一応のマナーなのでノックする。

「一夏。いるよな」

返事を待たずに断定。居留守を使おうにも、弾の感覚はもう部屋に二人の人間がいることをとらえている。それが一夏とシャルルだということもわかっている。

「弾!? ちょっと、待て——!」

一夏の焦ったような声が聞こえるが、関係ない。鍵がかかっているがそれを触れただけで破壊し、問答無用でドアを開けた。

そこにいたのは慌てて腰を浮かせた一夏と、金髪の美少女。というか、シャルルであつた。

「い、いや、弾。これはだな、つまり、えっと……!」

一夏が超焦りまくって訴えているが、無視する。支離滅裂で、もとより聞く意味もないものだし。

「ついに男装がばれたのか」

不意に言った弾の言葉に一夏は驚愕し、シャルルは「やっぱり……」と言って苦笑した。

「そうじゃないかとは思ってたよ。でも、まさか本当にばれてるとは思わなかった」

「どう隠したところで、骨格は変えられねえ。口調やしぐさも、完全に異性になりきるなんて無理だ。むしろ、よく今まではばれなかったな。そつちに驚きだけ。一夏は……気づくわけねえか」

「うっ……」

反論したいが実際その通りなので、一夏は黙るしかない。

「んで？なんでばれたんだ？」

「僕がシャワーを浴びてて……」

「一夏が覗いたのか？ おいおい、その時一夏はシャルルを男だと思ってたんだろ？ やべえな」

「ちげーよ！ シャンプーの替えを持ってっただけだ！」

「いずれにしろ、それで裸を見られて露呈したと」

「うん……」

裸を見られた、という部分に反応してシャルルが顔を真っ赤に染めた。実に可愛らしい。一夏もその時を思い出しているのか顔を赤くしていたが、そっちはむかついた。

なのでとりあえず殴っておく。

「ゲブアツ！」

突然殴られ、一夏は腹を抱えてうずくまった。局部を穿ってしまおうかとも考えたが、さすがに勘弁しといてやろう。

「な、何すんだ……」

「黙ってる。男の敵」

抗議してくる一夏を一言で切って捨てた。そしてシャルルに向き直る。

「さて、本題だ。なんで男装なんてしてたんだ？」

「それは……実家がそうしろって……」

「実家……デュノア社か」

「うん。僕の父がその社長。その人に命令されたんだよ」

シャルルの言い方に違和感を感じたのだろう。一夏が首をかしげた。

「命令って……親だろう？なんでそんな——」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

「なっ……」

一夏が絶句する。一夏も一夏で普通じゃあない経験をしているが、『愛人の子』と言われればさすがに動揺を隠しきれない。

「引き取られたのが二年前。丁度お母さんが時にね、お父さんの部下がやってきたの。それからいろいろ検査してIS適性が高いことがわかって、非公式だけどデユノア社のテスト・パイロットをやることになってね」

淡々と。

シャルルは言葉を重ねていく。

「それから少し経って、デユノア社は経営危機に陥ったの。デユノア社は量産機ISのシェアが第三位だけど、結局リヴァイブは第二世代だからね。ISの開発はものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業が国からの支援があつてやつと成り立っているところばかりだよ。しかも、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代の開発は急務なの。国防の為もあるけど、資力で負ける国が最初のアドヴァンテージを取れないと悲惨なことになるからね」

そういうえば、と一夏は思い出す。セシリアが第三世代の開発について言っていた。

曰く、「現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の選定中なの

ですわ。今のところトライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズモデル、ドイツのレーゲンモデル、それにイタリアのテンペスタIIモデル。今のところ実用化ではイギリスが一步リードしていますが、まだ難しい状況ですの。そのための実稼働データを取るために、私が送られたのですわ」だそうだ。

「話を戻すね。それで、デユノア社でも第三世代を開発していたんだけど、もともと遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅カット。次のトライアルで選ばれなかったら援助を全面カット。そのうえIS開発許可も剥奪するっていう話になったの」

「なんとなく話は分かったけど、それがどうして男装につながるんだ?」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに——同じ男子なら日本で発生した特異ケースとも接触しやすい。可能であればその使用期待と本人のデータを取れるだろうってね」

「それは、つまり……」

「そう、『白式』と『ブラッディ・ロード』のデータを盗んで来いって言われてるんだよ。

僕は、あの人にね」

シャルルは少しうつむいて、自虐的に笑った。

総てを諦めたような、それでいて諦めきれないような、曖昧で悲痛な笑みだった。

「でも一夏や弾さんにもばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は……まあ、つぶれるかほかの企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないけど、僕にとってはどうでもいいことだよ」

「……」

「……」

「ああ、なんだか話したら気が楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで騙しててゴメン」

シャルルが深々と頭を下げる。だが、一夏は自分でもよくわからない衝動に駆られ、シャルルの肩を掴んで頭をあげさせた。

「いいのか、それで」

「え……?」

「それでいいのか？いいはずないだろ。親がなんだっていうんだ。どうして親だからって理由だけで子供を縛る権利がある。おかしいだろう、そんなことは」

「い、一夏……？」

「答えてくれシャルル。本当にそれでいいのか？」

「……いいわけ、ないじゃないか」

少しの沈黙の後、シャルルは答えた。

「いいわけないじゃないか！本当の父親からは道具扱いされて、本妻からは厄介者扱い。それでいいわけないじゃないか！でも……でも、どうしろっていうの！？僕になにができるのさ！？」

「ここにいればいい」

「え？」

「そうだ。織斑一夏。おまえの脳みそをフルで回転させろ。絶対に、諦めてはいけな
い。」

「特記事項第21、本学園におけるせいとはその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「それって……」

「つまり、この学園にいれば少なくとも三年間は大丈夫なんだよ。それだけあれば、どうにかする方法を見つけられる。なあ、弾？」

「甘いな、一夏」

弾が静かに言った。

一夏もシャルルも、緊張で体を強張らせる。

「と言ってやりたいんだが、それしかねえ。まあ、なんだつたら俺のデータを持つてくか？ どうせ使えねえけどな」

「も、持つてくかかって、いいの？ そんな簡単に」

「いいぜ。どうせエネルギーシールドと絶対防御のシステムしか入ってねえんだから。」

『グラビティ・アトラクション』もどうやら俺専用らしいから使えねえし」

「それだけなの？ でも、筋力のバックアップとかすごいよねあれ」

よ」

「……！おう、分かった」

一夏はこちらの意図を察したのか、深くうなずいた。それを確認して、弾は再びシャルルに向かい合う。

「な、なにかな？」

「味方はできねえが、一つ言つといてやる。どうあがいても、物事の価値は他人によって決められちまう」

「……」

「だから、他人が見ても最良の価値しか見いだせない人生を歩め。その道筋を決めるのは自分だ。おまえが傀儡でなく人間として生きたいのなら、自分自身で最高の価値を掴みとれよ」

「うん、わかった」

弾の言葉に、シャルルは力強くうなずいた。

その瞳には、さつきまでの諦観や絶望は微塵も感じられない。

「はん、らしくもないこと言っちゃまったな。やっぱ、謹慎の所為かね」

お茶らけた様に言つて、弾は部屋を出た。

一夏もシャルルも、決心を固めたようだ。ならば、大丈夫だろう。きっと、これから自分を見失う時がくるだろう。その時、弾の言葉が迷いを断ち切るための手段になつてほしい。

そんなことを考えていると、セシリアが横ぎつた。そして、一夏の部屋の前で止まる。その奥からは、箒も来ていた。おなじく、目的地は一夏の部屋。

ああ、これは修羅場になるな、と考えると、弾はご愁傷様と心の中で手を合わせるのであつた。

Military and girl

暗い闇の中を、ラウラ・ボーデヴィツヒはさまよっていた。ゆらりゆらりと無秩序に流されながら、その赤い目には何も映さず更なる深みへとはまっついていく。

ずっとここで過ごしてきた。闇、あるいは影と呼ぶべきこの場所ですつと育つてきた。

卵の時点で人の温かさを知らず、情のない他人に産み落とされ、以来ずっとここにいる。光など見たことはない。

だけど、あの人は紛れもない光だったはずだ。敬い慕った『世界最強』は、初めて触れて、見て、聞いて感じた光だった。

だが、決して光源には届かない。

至高の存在。

それを盗られてしまう。かの人の顔に泥を塗った『弟』とかいう塵屑に。

『家族』？ 『姉弟』？

そんなものは知らない。万人が知らぬものならそれは要らないものだろう。よしんば必要だとしても、価値など極小だろう。

それなのに、あいつは私の偶像を簡単に盗んでいく。許せない許せない許せない。

それは私のだ。私だけの光だ。

認めるものか。盗人め、貴様の全部を奪ってやる。

そのための力だ。

圧倒的な力で押し潰す——！

心の内に暗い感情が芽吹いた瞬間、無秩序な闇の流れが一気に変わった。爆発のような奔流がラウラ・ボーデヴィツヒを押し潰さんばかりに襲ってくる。

まさしく暴力。悪魔の如き力で弄ばれる。

呻きながら思い出すのは、あの悪魔。

あれはいったい何なのだろう。私は知らない、見たくもない。

だが、悪魔の見せた理不尽は究極的な力だ。私の求めているものだ。

吐き気がする。あんなものが求めているものだなんて。しかし欲しい。

なあ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。私は力が欲しいのか？

要らない要らない要らない要らない
欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい。

「ああ……」

明確な答えはそこにあつた。

それを掴みとる前に、ラウラ・ボーデヴィツヒは流れに意識を飲まれた。

◇
◇ 1

「やっぱ鷹羽ベーカーリーのカレーパンは最高だな」

鷹をデフォルメしたイラストが描かれた紙袋を抱えカレーパンを啜えながら、弾は廊下を歩いていった。久しくカレーパンを食べていなかったのだが、急に食べたくなつて急遽買ってきたのである。

ちなみに、今回は弾の分だけだ。一夏の分はない。

芳醇な香りを漂わせ、それに負けない美味しさを誇るカレーパンに舌鼓を打ちながら、のんびりと教室に向かう。

次の授業はIS格闘技能に関する基礎知識と応用。いつもどおりに弾にしてみればまったく意味をなさないものだ。今回は間合いの感覚や経験で活躍する機会がある、と千冬から言われているが正直やる気が出ない。

「面白れえことねえかな……」

ため息をついて歩いていると、

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

あーらびっくり。曲がり角の先で千冬サンとラウラ・ボーデヴィツヒが話しているぞー？ チョーグーゼン。

居合わせてしまったものは仕方がない。ちよつと盗み聞きしていこうか。

露骨に下衆な思考をして、弾はできるだけ近い所に移動して素早く物陰に隠れた。離れたところで安全に盗聴することもできるのだが、今の弾は先日のこととも合わせて消化不良気味である。つまり、スリルを求めていた。

「何度も言わせるな。私には私のやるべきことがある」

「このような極東で、何の役目があるというのですか！」

ラウラ・ボーデヴィツヒが声を張り上げる。それでもなお、千冬は涼しい顔をしていた。

「おねがいです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力の半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、I Sをファツションか何かと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど——」

「そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……!!」

千冬の声色が変わった。鋭く、そして強大な覇気が空間を震わせる。さすがのラウラといえど、『世界最強』の威圧をまともに受けては平然としていられない。たとえそれが、一瞬であったとしてもだ。

千冬の迫力に気圧され、ラウラはたじろぎ後ずさった。

「少し見ない間に偉くなったものだな。その年でもう選ばれた人間気取りとは恐れい
る」

「わ、私は……」

ラウラの声からありありと恐怖が伝わってくる。かけがえのないものに嫌われると
いう恐怖だ。

その様子を見て、弾はある事実に至った。

——ああ、そうか。おまえの求めているものはそれか。

ラウラ・ボーデヴィツヒの揮う暴力の本質。なるほど、確かにそれなら合点がいく。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……………」

千冬の雰囲気がいっものそれに変わった。急かされるままに、ラウラは教室に戻って
いく。

ラウラの姿が見えなくなったところで、突然千冬が弾の隠れている方を向いた。

「盗み聞きは感心しないぞ、五反田」

「気付いてたんスか、千冬さん」

「隠れるなら、カレーパンの匂いも隠しておくんだつたな。興奮していたせいか、ラウ……ボーデヴィツヒは気付かなかつたようだが」

弾の抱えている芳醇な香りを漂わせているカレーパンを指さしながら、千冬は肩をすくめた。

弾はしばし抱えているカレーパンを見下ろし、何を思ったのかその全てを口に詰め込んだ。

「はにゆうちえるちゆにあ」

「しっかり喋れ」

千冬に言われた弾は高速で口を動かしてカレーパンを飲み込み、急に真顔になる。

まじめな空気を察し、千冬も気を引き締めた。

「どうした五反田」

「……水くれ」

「……お前に期待した私が馬鹿だった」

どうにもならんな、と千冬はため息をつき、持っていたお茶を差し出す。弾はそれのためらわずに受け取り、そして一気に飲み干した。

「ふう……思いがけないところで千冬サンと間接キスをしちゃった……」

「中学生かおまえは」

半眼になり、呆れたように千冬は呟く。間接キスなど全く気にしてはいない。まあ、ペットの犬に顔を舐められたところで何も感じないので一緒のことだ。

弾も弾で「つまんねえなあ」と言っただけで笑っているの、なにか反応があれば儲けもの程度のことだったのだろう。

「まっ、いいさな。でだ、千冬さん」

「ん？」

「月末にトーナメントがあつたよな？」

「ああ、学年別で行われるトーナメントだ。おそらく、お前は参加できないだろうがな」

「え？マジで？」

「ああ、マジだ。強すぎるからな、お前は」

「ああ……まあ、でも実力確認のためにやるんだろ？だつたらさ」

「それはそうだが……五反田、お前は何か言いたいんだ？」

そこで悪魔は、五反田弾は静かに嗤った。

とびきりのサプライズを仕掛けるように。

「一つ頼みごとがあるんだよ——」

〈〈 2

「はあああああああッ！」

鈴の叫びがアリーナの静寂を切り裂いた。『甲龍』の近接武器である『双天牙月』が空を唸らせながら振り切り切られるも、鈴が対象としていたその人物は頭上に移動していて、そのままレールカノンを撃ち出してくる。

鈴に迫る弾丸を、青い閃光が吹き飛ばした。

セシリア・オルコットの駆る『ブルー・ティアーズ』、そのメインウエポンである『スターライト Mk III』の一撃だ。

「まったく、世話が焼けますわ」

「別に頼んでないわよ」

軽口をたたきながら、鈴とセシリアは放課後のアリーナで急に喧嘩を吹っかけてきた相手、ラウラ・ボーデヴィツヒと対峙する。

襲撃者のラウラが展開しているのは漆黒のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』。武器を構えながらこちらをにらむ眼差しはまさに水のように。なるほど、『ドイツの冷水』とはよく言ったものだ。

だが、その程度でひるむ鈴とセシリアではない。というよりも、この程度ではひるもうとしても無理な話だ。五反田弾という理不尽を知っている彼女たちは、対峙した時に

味わう真の恐怖と絶望をも知っているのだから。

「さて、行きますか。セシリア、援護頼むわよ」

「ええ。ですが、私の射線には入ってこないでくださいね？ 撃ち抜いてしましますわよ」

「ハッ、上等——！」

再び『双天牙月』が振り下ろされる。ラウラはそれを避けず、プラズマ手刀で鈴の一撃を受け止めた。そのままレールカノンが火を噴くが、衝撃砲で相殺され爆風で二人とも大きく吹き飛んだ。

体勢を立て直すラウラに、無数の青い光が迫る。休む暇を与えずセシリアが放ったそれは明らかに展開されているビットの数よりも多い。フレキシブルを応用して、一発目とそれ以降を同時に相手に叩き込むことが可能なのだ。

ラウラは防げるものは防ぎ、躲せるものは躲すという器用なことをやってのけ、無数の同時攻撃を何とかいなす。

しかし、ラウラの顔に焦りはない。そう、確かに焦りはないのだが、どこか緊張しているようだった。

二人を相手にするのが無謀なことだと気付いたのかと思ったが、かれこれ十数分は続く攻防を鑑みるにそれはあり得ない。

その緊迫した顔は、どこか焦っているようにも見えるのだが、しかし彼女は冷静さを欠いているというわけでもなさそうだ。

しかしそれはセシリアと鈴の見解であり、ラウラ・ボーデヴィツヒが二人と出会う前からこうならばその限りではないのだが。

「考えても仕方ないわよね」

「ええ、わたくしもそれには同意ですわ」

「なら——」

「全力で押し潰す！」

セシリアと鈴が同時に叫び、ラウラへと襲い掛かる。その時、一瞬ラウラが何かに反応したように体を震わせたのを二人は見ていた。

変化は劇的。結果は痛烈。

ラウラの動きが、凶悪な獣のそれへと変貌した。

間一髪、せまってきた弾丸をよける。すると、積んでいた弾が終わったのかレールカノンの嵐が止んだ。二人はほっと胸をなでおろしたが、それで止まる今のラウラではない。

「……ツツ!!」

もはや声にならぬ叫びをあげて、プラズマ手刀で切りつけてくる。鈴が『双天牙月』でそれを止め、セシリアが『スターライトMkⅢ』のトリガーを引いた。

ラウラは鈴を蹴り飛ばし、その反動でセシリアの一撃をかわす。だが、フレキシブルによつて軌道を変えられた一撃が再びラウラを襲う。それをもろに食らい、ラウラは吹き飛んだ。

「おりやああああああつー！」

そして、そこに待ち構えていたのは蹴り飛ばされた鈴だった。ラウラが体勢を整える前に『双天牙月』を振り下ろす。

「大丈夫か、鈴!？」

「い、一夏……?？」

ラウラの手刀を弾き飛ばした人物、織斑一夏が鈴の問いに首を縦に振った。それを見て安心したのか、鈴はいつもの笑みを浮かべて「遅いわよ、馬鹿……」と言った。

まるで物語のようだと鈴は思う。まさかこんな場面で想い人が助けに来てくれるなんて、それこそ絵物語の中だけだと思っていた。ああでも、初めて会った時もそうだったか。

ピンチの時に颯爽と現れて自分を救ってくれたその姿に、鈴は惚れたのだ。

「気を抜かないで一夏。ボーデヴィツヒさんを倒したわけじゃないんだから」

そこに現れたのはラウラを後退させた射撃を行ったシャルルだ。わきにはセシリアもいる。一夏に注意を促しながら、シャルルは『ラファール・リヴァイヴ』を纏つて一夏の隣に立った。

一夏も『雪片二型』を構えてラウラを睨みつける。よくもやってくれたな、と。

「貴様ア……!」

ラウラの目が怒りに染まる。さっきまでの狂化状態が、一夏への怒りで上塗りされたようだ。ある程度の理性が戻っている。まあそれでも、まともな状態とはとても言いえないが。

「殺してやる!」

「こいよ、こつちだっつていい加減頭に来てるんだ!」

両者共に咆哮を上げ、それぞれの獲物を振りかざす。ほぼ同時のタイミングでお互いの体に攻撃が当たろうとした時、

「悪いが、茶番はここまでだ」

五反田弾がそれを止めた。一本の腕でラウラの手首を、もう一本の手で一夏の『雪片二型』の刃を掴んでいる。

一夏は弾に掴まれたということを認識した瞬間に抵抗をやめた。ラウラは振りほどこうと必死になっているが効果は出ていない。

「やめろつて。千冬さんもお怒りだぜ？」

弾のその言葉で、ラウラの抵抗がぴたりと止む。尊敬する教官の名が出ただけで、狂化も怒りも解けたようだ。

アリーナの出入り口を見れば、千冬が怒るといふよりは呆れたようにため息をついていた。

「やれやれ、模擬戦をやるのは構わんが、アリーナに損傷が出るのは許容しかねる。この続きは、月末のトーナメントでやれ」

「……教官がそうおっしゃるなら」

いかにも納得してませんといった様子でありながら、ラウラは素直に頷いた。すぐさまISを待機状態にし、アリーナから出ていく。

必ず決着をつけなくてはならないと一夏は思った。自分だけならまだいい。だが、あ

いつは友まで傷つけたのだ。もう戦う理由などとは言つてられない。

一夏はラウラの消えていったアリーナの扉を見ながら、力強く拳を握った。

〽 3

「大丈夫だとは思うが、鳳を保健室に連れて行ってやれ」という千冬の言葉を聞き、一夏と弾、シャルルは鈴を保健室に運んだ。セシリアはISの状態を見るために別行動だ。

幸いにして鈴の傷は打撲程度のもので、適当な手当てをしてもらっただけで済んだ。

「しっかし、無茶したなあおまえら」

弾がけられけらと笑いながら言った。一夏と鈴をからかうつもりでいるのが傍目からも見て取れる。それを察したシャルルは乾いた笑いしか出てこなかった。

案の定、一夏と鈴もそれをわかっているようで、ばつの悪い顔をしていた。

「いやあ、ついカツとなっちゃってさ……」

「あいつが悪いのよ。いきなり襲ってきたんだから」

「それでボロボロにされた、と」

「うっさいわね。あのまま戦ってたらあたしが勝ってたわよ」

弾の言葉に、鈴は拗ねたように口を尖らせる。それを見た弾がからかい、鈴が反応し、また弾がからかう、という不毛なループが完成した。

和気藹々とする中、シャルルの耳が何かをとらえた。

「ねえ、一夏。何か聞こえない？」

「ん？……そういえば、地鳴りのような音が……」

「どういうこと、弾？」

「ああ、大勢の女子がここ目指して迫ってきてるな」

「「なっ!？」」

弾の何気ない答えに、三人は驚愕した。地鳴りを起こすほどの女子の大群だ。一体どれだけの数なのであろうか……。

絶句する三人に、弾が扉を指し示した。

「ほれ、来たぜ？」

その言葉と共に保健室のドアが乱暴に開いた。そして、予想をはるかに上回る数の女子がまるで雪崩のように駆け込んでくる。もはや、一種のホラーですらあった。

「織斑君っ！」

「デュノア君っ！」

入ってきた女子は口々に一夏とシャルルの名前を呼び、手に持った何かの用紙を見せようとしてくる。

「な、なんなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……?ちよつと落ち着いて……」

「「「これっ!」」」

バツと一斉に手に持った用紙を押しつけられた。その中の一枚を手に取り、一夏は内

容を読み上げた。

「えーっと、なになに……。『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアができなかったものは抽選により選ばれた組むものとする。締め切りは』——」

「そこまででいいから！ まっ、とにかく……」

「……私と組もう！ 織斑君っ！ デユノア君っ！……」

声をそろえ、一斉に手が差し伸べられる。これを握り返せば、つまりペアを組むことに了承したということなのだろうが、一夏もシャルルも乗り気ではなかった。

「え、えー……あつ、弾はどうだ!?! あいつなら優勝確実じゃないか!?!」

困った一夏は強引に話題をそらす。結構いい話のチョイスだと自分で自分をほめたくなった。

その言葉を聞いた女子は一瞬くつと唇をかんで、「五反田さんについてはそこに書いてあるよ」とさっきの紙を指した。

『一年一組の五反田弾は今回のトーナメントに参加することを禁ずる。そのための特別措置としてトーナメントの全日程の終了後、一学年専用機持ちとの試合を執り行う』
……マジか」

「そういうことだ。俺と組むのは無理なんだよ」

「……はあ」

用紙の内容を読み終えた一夏は諦めたように一つため息をついて、女子たちに向かい合った。

「あー……悪いんだけど、俺はシャルルと組むからさ」

「え……？」

「いや、まあ、他の女子組まれるくらいなら……」

「……………へたれめ」

「おい最後に言った奴ちよつと出てこい」

女子たちはとりあえず納得したのか、各々がしかたないと呟きながら保健室を後にす

る。それからまたペア探しが始まったようで、廊下からはバタバタと喧騒が聞こえてきた。

その後、一夏は「何勝手に決めてんのよ！」と鈴に殴られ、箒に叩かれ、セシリアに怒鳴られるという三重苦がまっているのです。まる。

Thing called family

学年別トーナメント当日、弾はまたも管制塔の頂上にいた。視線の先では、何の因果か一回戦であたった一夏とラウラが戦っている。それを見る眼差しは真剣そのものだが、実際のところ戦いなど見てはいない。

朝から予感がしていた。虫の知らせというやつだ。

今日の試合中に何かが起こる。

その確信ともいえる強い予感が、弾を急かしていた。だが、一向にそれは現れない。所詮は予感でしかないのか？だが、時間が経つごとにその不安は大きくなるばかりだ。

故に動けない。ただただ感覚を研ぎ澄まして異変を探知するだけにとどまってしまう。

「チツ……」

煩わしい。面倒くさい。今すぐ試合に乗り込んでいって暴れてやろうか。

そんなことを考えるが、あれはいわゆる『因縁の対決』というやつであるらしいので、

さすがに自重する。しかしそれが原因で更なるストレスがたまるのだが。

そもそもラウラ・ボーデヴィツヒとかいうあの少女。あれで軍人、しかも部隊長だという。意味が分からない。教官教官と、まるで親とはぐれて泣きじやくる迷い子みたいに喚きやがって。それで癩癩を起こして周りに力を振りかざすのだ。

「いかん……思考が変な方向に流れちまつてる」

頭を小突いて思考を一旦切る。ストレスのせいで強暴で短絡的な思考になってしまった。冷静になれ、となんとか心を落ち着かせた。

しかし、さっきのは少しストレスできつい言い方になってしまったとはいえ、弾の考えそのままのことでもあるのだ。

なぜならラウラの暴力、つまり求めているモノとは『それ』なのだから。

そのことを分かせてやるためにも、千冬に無理を言つて専用機持ちとの試合を組んでもらったのだ。まあ、半分は弾がしたかったからだけけれど。

「ん……っ？」

視線の先のアリーナで変化があった。一夏に負けそうになっていたラウラのISSがまるで生きているようにうごめき、形を変えていく。

それが最終的になった形には、見覚えがあった。その握る剣にも。

あれは間違いなく千冬の『暮桜』、そして雪片だ。

「さすがに、あれは静観してられないよなあ……！」

激昂して謎の変化を遂げたラウラに襲いかかろうとしている一夏を落ち着かせるためにも、黙ってみている場合ではない。弾は管制塔の上でゆらりと立ち上がり、アリーナに向かって跳ぼうとした。

その瞬間。

ドクン、と心臓がはねた。

圧倒的な存在感が周囲を支配する感覚に弾は思わず身をすくませてしまい、危うく落ちそうになった。急いでバランスを取り、プレッシャーの発信源を探る。

発信源は、弾の後方。

だが、振り向いたところには誰もいなかった。

ただし、空間が歪に曲がっていた。ギギギ、とまるで錆びた歯車同士が無理な稼働を

しようとしているときのような不快な音を立て、その空間は何かを生み落そうとしている。

ついに限界を迎えた空間が、ガラスが砕け散るように破壊される。そこから出てきたのは黒い人型。鈴と一夏が戦っていた時にも出てきたあの人型だ。

「……」

一夏のところに行くのは無理だと判断し、弾は『ブラッディ・ロード』を展開した。肩から鮮血が舞い、その血でもって形成される。

弾は構えない。人型も構えない。それどころか、襲ってくる気配すら感じさせない。ならばこちらから仕掛ける。そう思い、弾が片足を後ろへ下げた。

人型が後ろにいた。

「……！」

瞬時にそれを感じ取り弾は裏拳を繰り出す。人型は視認することすら困難なその拳を掴みとって逆に殴ってきた。

弾は掴まれた拳ごと人型を回転させ蹴り飛ばす。腕に感じる痺れが、後一瞬遅ければ完全に折られていたことを伝えてきた。

ありえない。強すぎる。

弾に傷をつけることさえあの『世界最強』ですらどうあつても無理だったのに、腕を折るだなんて。見るからに生物ではないとわかるが、異常だろう。

「いや、異常つつつたら俺もそうなんだろうが……」

ともかく、相手は蹴飛ばされてからこちらに襲い掛かってこない。負傷したというわけでもないのに、じつと弾を睨みつけて（顔だと思われる部分には凹凸がないので雰囲気からだが）いる。

立ち位置は最初に対峙した時と正反対になっている。人型がアリーナ側だ。そして、ここから戦闘を行えば間違いないくアリーナにいる一夏達に気づかれるだろう。それは面倒くさい。

「ちいと……面貸せやアツ！」

人型に向かって跳ぶ。奴も反応して弾の後ろを取りに来るが、さらに弾は後ろに回り込んだ。そのまま腕を掴み、『グラビティ・アトラクション』を併用して真上に放り投げる。高速でぶん投げられた人型は遥か上に吹き飛び、雲海を突き抜けたところでようやく止まった。

しかし、その時にはもう弾は人型の目の前で拳を握っていた。

「止まってんなよオオオツ！」

——瞬拳。

一夏の音速を捉える瞬剣とは威力も速度も桁違いの悪魔の一撃。

間一髪、人型はそれを避ける。だが、弾の拳は止まらない。瞬拳の次には更なる一撃が待っているのだ。

——瞬閃。

その速度は瞬拳の倍。大気を切り裂き、空間を押し潰す極大の一撃が人型を穿つ。腹

部へめり込んだ弾の拳によって、人型の体がくの字に折れた。そこへ、瞬間の勢いを利用した回転蹴りを食らわせる。

吹き飛んだ人型を空礮で戻し、追撃を行おうとするが、そこで信じられないことが起きた。

弾の使った空礮が人型の使った空礮によって相殺されたのだ。

「嘘だろ……!?!」

空礮は、弾が考えだしそして実用化まで持つていった完全にオリジナルの技だ。これまで教えたのは鈴だけであり、人型が使用できる代物ではない。それなのに、こいつはあたかも自分の技のように使ってきた。空礮をくりだす一連の動作に不自然なところは見受けられず、しかも弾の空礮を相殺できるほどの練度でもって。

予想外のことには弾は絶句し、後退することで人型から距離を取った。なぜこいつが空礮を使えるかはこの際おいておく。『グラビティ・アトラクション』で重力を操作して滞空しながら、弾は冷静になるように努めた。

そこで、はたと気づく。

人型が襲ってこないのだ。そういえば最初も襲い掛かつてはこなかった。来たのは

弾が一步下がった時で、しかし今度は後退したら襲い掛かってこなくなった。

ふと、アリーナが目に入った。一夏がラウラを止めるべく奮闘しているのが見て取れる。

まさか、と弾はある答えにたどり着いた。実証するために、アリーナの方、つまり人型の方向に体を動かす。弾が動いた瞬間、人型が動いた。それを確認し、弾は大きく後ろに下がった。

すると人型の動きが止まる。

「やはりか……」

こいつは、アリーナに近づこうとすると襲ってくるようだ。なぜかはわからないが、しかしそれがわかればやりやすい。ある程度の行動をこちらで操れるのだ、これがアドバンテージでなくて一体何だ。

「ハアツ！」

弾は一瞬で人型との距離を詰め、掌底でわき腹を穿つ。それはいなされるが、本命は

掌底に隠れた腹部への一撃。先の瞬間で殴った場所を打ち抜く。

だが、人型は掌底でのばしきった弾の腕に絡まるようにして下から上へ、弾の顎を打ち抜かんと蹴りを放ってきた。即座にボディへの一撃を断念して蹴りを回避する。

そこへ、人型の反撃。蹴り上げた足ごと体を反転。弾の両肩を掴んで先程のお返しと言わんばかりに弾の体を投げ飛ばした。

弾の体が投げられる。人型と一緒に。

投げられる瞬間、弾は人型の体を掴んで共に吹き飛ばされるようにしたのだ。二体で誰もみ回転しながら、攻撃の応酬が繰り広げられる。

「おらおらおらアッ！」

拳と拳がぶつかり合う。もはや人体が出しているとは思えぬ轟音が響くが、どちらもまだまだ余力を残している。亜光速で行われる攻撃の応酬がさらに苛烈なものへと変わっていった。

そして、弾の蹴りが人型を捉えた。体勢を崩す相手に、弾は拳を振りぬく。

——瞬拳。

ここでもまた、信じられないことが起きた。

人型が弾の瞬拳と全く同じ型で、同じく瞬拳を使ってきたのだ。だが、弾はそれを気に止めない。瞬拳自他は空礫と違って分かりやすい技だ。盗まれた程度では驚かない。それに、瞬拳の真価は瞬閃以降にある。

瞬拳は音速以上での攻撃の総称だ。そして、段階ごとにさらにブーストされる。けれどそれは、普段から音速どころか光速で駆動できる弾にとつては意味のないことだ。

ならばなぜ弾が瞬拳を使うのかといえば、その技の性質にある。
一点突破。一極集中。

ヒットの瞬間拡散する衝撃波を拡散させずに纏め上げ、さらに次の動作に取り込む。つまり、瞬拳より派生する技は全て、直前に放った攻撃の威力をそのまま上乗せできるのだ。

瞬拳から、その倍の速度の瞬閃。

瞬閃から、その四倍の速度を誇る瞬天。

瞬天から、さらに八倍に跳ね上がる支瞬天。

特殊な技法によつて実用が可能になるこの攻撃は、ばかげた強度を誇る弾にだからこそできるものだ。故に、瞬拳を防がれた程度では止まらない。

——瞬閃。

何かが破裂したような音とともに、弾の拳が弾かれてた。

「んな……っ!?!」

人型が瞬閃を使った。事実だけを言えばこうなってしまう。だが瞬閃は、弾にしか使えないのだ。よしんば真似をしたところで、威力は弾のそれをはるかに下回る——はずなのに。

動揺を隠せぬ弾の目の前で、人型が拳を構えていた。弾のよく知る、瞬閃から繋がる攻撃の構え。

まさか、そんなばかな……! !

——瞬天。

躲せたのは偶然だった。いや、引つ張られるような感触から察するに、『グラビティ・

アトラクション』が発動したのだ。それは弾が無意識にやってのけたのか、はたまた違うのか。それはどうでもよかった。

迫りくる次の一撃を、躲すことなどできないのだから。

——支瞬天。

何とか防御は間に合ったものの、両腕を組んで固めたはずのガードはいとも簡単に跳ね上げられた。がら空きになる弾の体にはもはや防御の術はなく——

その一撃は、支瞬天の十六倍。

——悲想天。

人型の拳が弾の脇腹を貫いた。ぎりぎりまで体を逸らすことには成功したが、深々と突き刺さった拳の周りの肉は根こそぎ吹き飛んでいる。

「糞がア……ッッ!!」

ISのシールドも、絶対防衛も関係ない。まとめて、文字通り吹き飛ばされたのだ。こんな屈辱を味わったのは、前世を合わせても初めてだ。人型の腕を掴み、憤怒を持って人型を睨みつける。

「あ……う？」

睨みつけ、そこで気づいた。見覚えがある。顔に凹凸はないが、輪郭からだけでもかすかに感じる懐かしい雰囲気。それと共に感じる強い憤りと絶望。それすらもなぜだか懐かしく感じる。

呆然とする弾の目の前で、黒い人型は以前と同じように溶けるように虚空へと消えていった。

理解も納得もはできないが、ひとまず助かったといつの間にか荒くなっていた息を整える。そして、ゆっくりと地上に降りていった。

前に感じた黒い人型の正体。そして、見覚えのある形と雰囲気。懐かしく思った負の感情。

アレしかない。考えれば考えるほど、そうとしか思えない。

ありえない、なんて言葉はひどく弱いものだと思いき知らされた直後でもある。何よ

り、弾の勘がそう言っている。

だとすれば、近いうちにまた弾の目の前に現れるだろう。おそらく、そこが決着の場となるはずだ。

来たるべき戦いに思いをはせる弾の視線の先で、一夏が『暮桜』の形をしたISを倒し、ラウラを救いだしていた。

◇◇
1

ラウラ・ボーデヴィツヒは保健室で目を覚ました。体の節々がずきずきと痛み、思わず顔を歪ませる。

だんだん意識がはつきりしてくると、何が起きたのかを思い出した。

そうだ私は、織斑一夏に負けたのだ。

それは屈辱的な事実のはずだった。だが、ラウラの心境はむしろ屈辱とは対極で、まるでどこまでも続く空に解き放たれたようにすつきりとしていた。

それはきつと、暴走していたラウラを倒した時に交わした会話の所為だ。彼の最後の一撃を食らった時、確かにラウラと一夏は思考を共有し会話した。そこでラウラは聞いたのだ。

お前にとっての強さは何か、と。

彼は少し照れながら、大切な人たちを守るためだと言った。そして、ラウラを守ってくれるとも。

それを思い出すだけで、心が満たされるのがわかる。こんな感情は知らない。けれども温かく、幸福を感じることができた。

不意に保健室のドアが開く。入ってきたのは千冬だった。

「起きたか、ラウラ」

「……教官」

織斑先生だ、と千冬は訂正しなかった。そして名前で呼んでくれた。それだけでもラウラには嬉しくて、安らぎを得られる。

「お前の暴走の原因は、ISに組み込まれていた違法技術VTシステムによるものだ」
「VT……ヴァルキリー・トレース・システムですか……」

ヴァルキリー・トレース・システム。

過去に行われたモンド・グロツソにおける部門受賞者、つまりヴァルキリーの動きをトレースするシステムのことだ。現在はアラスカ条約でどの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されているはずのもの。

それが組み込まれていた。ラウラの、ドイツのISに。今頃国の人間は慌てふためいているのだろう。

「私は……どうなるのですか……？」

「心配するな。IS学園はどんな国家でも干渉不可能な場所だ。おまえ自身に問題があったならともかく、追放処分になったりはしない」

「そうですか……」

「それと、おまえのISだが、こちらの方もVTシステムの消去が確認された後お前のもとに帰るだろう。どこかの馬鹿が手をまわしたのか、おそらく明日の朝には処理が完了し返還される」

「え……？」

さすがにそれはラウラとしても予想外だった。学園に残れるだけでも僥倖なのに、まさかISも返還されるとは。まるで、幸福を詰め合わせた演劇を見ている気分だ。

「……」

「……」

お互いに無言だった。ラウラは呆けた様子で中空を見て、千冬は目を閉じ口を堅く結んでいる。気まずい、ということはない。それは二人にとつても、心の整理をつける大切な間だったから。

カチ、カチ、と時計の針が一定間隔で音を鳴らし時の経過を表していた。両者が沈黙し、静寂という聞こえぬ音楽を清聴してから、およそ六十回。針が時を刻んだ。

「すまなかつた」

突然、千冬が頭を下げた。

「なつ、何を言っているんですか！教官が謝ることなんて何も……」

「私はお前のことを何もわかっていなかった。教師失格だ」

「そんなこと……」

否定するラウラに、千冬はそれでも頭をあげようとはしない。

「結局、おまえが苦しんでいることも弾に教えてもらわなければ気付けなかった。あいつに教えてもらわなければおまえが何を求めているのか、きつと私には一生分からなかっただろう」

「私の、求めているもの……？」

「おまえは、寂しかったんだな……」

「あ……」

寂しかった。千冬から放たれたその言葉はなぜだかストンと胸に落ちた。足りなかった何かが埋まった感覚。それと同時に、熱い何かがあふれ出してきた。

そうだ、私は寂しかったんだ。家族というものを求めていた。

誰もいない暗闇の中で生きて、傷つき傷つけることでしか生きられない。たった一人でがむしやりに走っても、光なんて見つかるはずもない。だから、寄り添ってほしい。その光で照らしてほしかった。

「ごめんな……気付いてやらなくて」

「き、きようかん……う、う……！」

ぎゅつと抱きしめられた。初めて感じる人のぬくもりは想像以上に温かくて安らかで、こみ上げる涙をとどめることはできなくて。

千冬の胸に抱かれて、ラウラはまるで赤子のように泣き叫んだ。

「う、うう……ああ、うああああ……！」

「今は存分に泣け。次には、きつと笑えるように……それまでは抱きしめてやるから……ああ、まったく」

——世話の焼ける妹だなあ。

この日、少女は家族のぬくもりを知った。

それはとても暖かくて、そして少ししよっぱかった。

トーナメントは中止になった。後日予定されていた一回戦だけは行うようだが、それはつまりトーナメントの開始前から嘘か真かは抜きにしてささやかれていた「織斑一夏と交際できる」チャンスがなくなったというわけだ。

そのせいか、女生徒たちの顔には生気がない。ふらふらと歩き、時折思い出したようにため息をついている。

「なあ、弾。なんで今日はみんな落ち込んでるんだ？」

「トーナメントが中止になったからだ」

「ああ、そっか。みんなトーナメントとかそういうイベント好きだもんなあ」

知らないとはいえ暢気なものである。トーナメントが中止にならなければ、十中八九誰かと付き合うことになったというのに。

弾がため息をついたところで、真耶が教室に入ってきた。朝のホームルームだ。

「はい皆さん、おはようございます。今日は、その、転校生を紹介します」

「転校生ですか？また？」

「いえ、その、なんというか、転校生ではないかもしれないですけど、でもやっぱり新しいお友達なわけですし……」

妙に真耶の歯切れが悪い。いつもそうだが、今日は特に輪をかけて酷いものだった。

「ええい、もう紹介しちゃいましょう！入ってきてください！」

真耶が教室の外に声をかける。すると教室のドアが開き、入ってきたのは綺麗なブロンドの髪を持った中性的な容姿を持った美少女——というかシャルル・デュノアであった。

案の定、教室内が静まり返った。

「どうも、シャルロット・デュノアです」

「はい、というわけでデュノア君はデュノアさんでした。あ、あは、あははは……」

真耶が空気を和ませようとおちゃらけて言うが、頑張り空しく声は虚空に溶けて消えていった。

「デュノア君……？女、の子？さんだったの……？」

「え、えーつと、つまり彼は彼女で彼女は彼で？」

「超展開 k t k r !!」

「とうか、デュノア君は女の子だったんだよね？同部屋には織斑君……」

「昨日は大浴場解放……？」

「詳細キボンヌ」

動揺一変、なぜか話の矛先は一夏に向けられていく。そしてそれを無視できないのは彼に思いを寄せている娘たち。

箒とセシリアが無言で立ち上がった。

「どおいうことだあ、一夏あ……？」

「いいちかさあん？どおいうことですのお……？」

「ち、違う誤解だ！俺は何もしてない！」

「ぎやははははは!!なにこれチョー面白れえんだけど！」

「笑ってないで誤解を解いてくれ弾！」

歩みを進める。

呆然とする一夏に、弾は手を合わせて冥福を祈るのであった。

Only regret remains

織斑一夏の人生の中で、かつてこれほどまでに高揚したことはあつただろうか。緊張を超えた何かが、ふつふつと心の奥底で煮えている。

たとえ専用機持ち五人がかりでも、弾に傷をつけられるかはわからない。どころか、攻撃一つ当てられるかもわからない。勝ちなんて万が一にも見えてこない。どうあがいても絶望を地でいく現状。

だが、なぜかやる気が損なわれることはない。むしろ、刻々とその時が近づくにつれ、一夏の興奮は高まるばかりだ。

心の臓が痛いほどに脈打っている。『白式』が報告してくる自分の心拍数、並びに脳内分泌物質は、なるほど確かに異常な数値だ。

それがどうした。まるで考慮に値しない。

調子がいいのだ。万全の状態と言つても差し支えない。これで余計なことをして、今のモチベーションが失われることにこそ恐怖する。

弾と一年生の専用機持ち（一人欠けてはいるのだが）が戦う今日この日に最高のコンディション。精巧に作られた喜劇のような運命だ。

ならばとことんまで踊って見せよう。今の一夏は運命に選ばれた演者であるが故に。アリーナのハッチが開く。『雪片式型』を握りしめ、一夏はピットから飛び出した。

「遅かったな。嫁のくせに私を待たせるとは何事だ」

「嫁じゃないから」

すでにアリーナに入っていたラウラに突っ込みを返す。どこをどう間違ったのか、日本文化を完全に誤解しているラウラは一夏を自分の嫁だと言つてきかないのだ。

「気に入った相手＝嫁にする」という構図が出来上がっているようなのだが、それは一部の猛者たちが使っているものだし、根本的に嫁の使用法がおかしい。

通常、「嫁」という言葉は男性の配偶者全般を指す言葉なのだ。まあ、本来は婚姻関係にある女性のうち、その家の「家長の息子の妻」に当たる女性のことを指すのだが、それは置いておこう。

「ずいぶんのんきですわね。私の緊張を返してくれませんか？」

セシリアがピットから出てきた。にこにこ朗らかに笑っているが、ISによって目

に映るものが鮮明になって今、その額に青筋があるのを一夏は見落とさなかった。できれば、気づきたくなかった。

試合前に会話していた程度で怒らないで欲しいのだが、きつとセシリアはこの試合に並々ならぬ気合を入れていたのであろう。素直に反省。

続いて、シャルロットと鈴がやってきた。鈴はすでに『双天牙月』を連結した状態で構え、激戦を前に緊張を高めていた。

「さて。ともかく、これで全員そろったわけだが……」

眩きながら一夏はアリーナの中をぐるりと見るが、弾の姿が見当たらない。

「寝坊でもしたんじゃないの？」

「こんな日に、ですの？」

「私たちにとっては『こんな日』かもしれないけど、あいつにとっては些事よ」

「立つ瀬がないね……」

吐き捨てるように言った鈴の言葉を受けて、セシリアとシャルロットは苦笑した。こ

の一週間、五人はなんとか弾に対抗するため、連携を整えてきた。攻撃のタイミング、援護の仕方等、まさしく全身全霊を尽くしたと言っても過言ではない。

なのに対戦相手は決戦の日に遅れてくる始末。気力が削がれるのも無理はなかった。

「ふむ……来たようだぞ」

ラウラの言葉と共に、ピットの奥から足音が聞こえてきた。

カツン、カツンと重くゆっくりと響く足音が大きくになるにつれ、一夏達の緊張はさらに高まっていく。先程までの空気は一瞬で消え、最大戦力をぶつけ合う闘争への意識だけが純化されていく。

足音が、止まった。

「よお、待たせた」

瞳を紅く、爛々と輝かせた弾がいた。

「……………」

もはや、一夏達に言葉を発する余裕はなかった。溜まりに溜まった闘争心が、今か今かと爆発する機会をうかがっている。

さながら爆弾のよう。

そして一度起爆したならば、どこまでも駆けなければ治まりそうにない。

「ハハハ……いい緊張だ……実際に、心地がいい」

『ブラッディ・ロード』が展開されていく。まるで嵐のごとく紅き粒子が舞い、血の盟主が顕現する。

黒に身を包んだ弾がアリーナの地面に降り立った。

「さあ……始めるぞ」

試合開始の合図が、鳴った。

それと共に一夏達は四方に散った。シャルロットがアサルトライフルを乱射するが、弾は既に射線上から外れている。

思った通りに弾が距離をおいたのを見て、一夏は『雪片式型』を強く握りしめた。

弾は強い。彼より強い存在を、一夏は知らない。だが、強いからこそ生まれる強者の余裕というものは、時につける隙になるはずだ。今回で言えば、開幕で勝負を決めずに後手に回ること。

アリーナの上空、遥か高みから見下ろすように移動していたセシリアが、この日の為に用意させた大型ビームカノン『スターダスト・シューター』を構える。

大型ビームカノン『スターダスト・シューター』。

実にIS一機分ある長大な砲身。その威力も規模も、既存の物とは比較にならない。だが、この兵器最大の長所はその威力でありながらBT兵器ということ。

すなわち、曲がるのである。

チャージに短くない時間をかけるのを差し引いても、十分お釣りのくる攻撃だ。理論上、装甲を殆ど纏わぬ『ブラッディ・ロード』に当たれば、一撃でシールドエネルギーを0にするのも可能である。

今回、一夏達の役目は『スターダスト・シューター』のチャージ完了まで弾をセシリアに近づけさせないこと。そして、あわよくば確実に当たるように誘導することだ。

そのための要は、ラウラ・ボーデヴィツヒ。以前AICはその効力を存分に発揮することはなかったが、それでも弾の注意をそらすことぐらいはできるはずだ。

「おおおおおおおおおッ!!!」

鈴が吼え、弾に『双天牙月』を振り下ろす。空気を唸らせる一撃とともに、一夏もまた攻撃を繰り返した。

――瞬剣

音速を超える刃は、鈴の一撃をサポートする為のもの。『双天牙月』が弾の頭に落ち、当然弾はそれを避けようとするが、回避先には瞬剣が迫っていた。そして、繰り返される一夏と鈴の攻撃に、少しのラグを存在させラウラのプラズマ手刀。

上と左右を塞いだ。残る退路は後ろと下。

一夏達としては、後ろに避けて欲しい。下、つまり地面に足が着けば、自由な行動を許してしまう。身動きのとりづらい空中に、なるべくとどまらせたいたい。

「その為に、下にはシャルロットの弾幕と、もしもの為の手榴弾、ってか？」

「んなっ……!?!」

弾が冷ややかにこちらを睨んでいた。

視線に怯んだ。剣速が一瞬鈍る。

「見え透いてんだよ。気合い入れろオツツ！」

——空礫。

鈴が、一夏が、ラウラが吹き飛んだ。アリーナの壁まで飛ばされ叩きつけられる。

「くうツ……！」

苦し紛れにシャルロットがアサルトライフルを乱射。弾を牽制するが、悲しいかな意味はない。

気づいた時には弾は彼女の目の前で。

気づいた時には彼女は殴られ地面に埋まっていた。

『シャルロット・デュノア、シールドエネルギーゼロ。リタイア』

無情にアナウンスが響く。

「ぬるいぞ一夏、おまえ達。そんな程度で取れるほど、俺の首は脆くねえ」

「知ってるよ……ッ！」

そうだ、知っていたはずだ。なのになぜ、こんなにも動揺しているのだろう。最近、弾の戦っているところを見ていなかったからか？確かに見なかった。だが、それだけではない。

思えば、学年別トーナメントから弾の様子はおかしかった。

弱々しい、と言えはいいのだろうか。それとも儂い、だろうか。

弾にはおよそ不釣り合いにすぎる言葉。だが、そうとしか言いようがないのだ。それに、普段の様子は別段変わりなかった。それでも纏う雰囲気が一夏にも一発攻撃を当てられると思えるほどであったのだ。

油断していたのだ、一夏は。

「くそが……!」

それで状況が変わるわけでもないが、一夏は毒づかずにはいられなかった。焦る一夏に、鈴の叱咤が飛ぶ。

「なに惚けてんの一夏! 相手はあの弾なのよ!?! しっかりしなさい!」
「……! おう、大丈夫だ! 戦える!」

鈴の激励で一夏は立て直した。『雪片式型』を強く握りしめ、構える。だが、弾は一夏を見てはいなかった。視線の先にいるのは、鈴だ。

「やはり、おまえか鈴。誰かが倒れた時こそ冷静になり、士気を上げられる。なるほど良い能力だ。敵としては厄介極まりない。
だから、潰させてもらうぞ」

鈴は咄嗟に『双天牙月』で薙いだ。横薙ぎに振られた『双天牙月』は、しかし振り切る半ばで強引に止められた。

半端ではない重量を誇る鈴の得物が、弾の片手で抑え付けられている。

鈴は即座に状況を理解し、『双天牙月』を自ら手離した。さらに、弾の身体を蹴り飛ばすようにして後退する。

――空礫

押し出された空間が弾を捉えた。しかし、今まさに鈴の空礫によつて吹き飛ばされようとしてる弾は、薄く笑う。

「土産だ。持っていけ」

――空礫・獄

鈴に押し出された空間が、さらに大きな奔流に呑み込まれて予先を変える。すなわち鈴へ。それだけではない。鈴の周りの空間が全て停まり、固まった。

まるで牢獄の様に対象を捕らえる、空礫の応用型である。

「……！」

「鈴ッ！」

とてつもない重量に押しつぶされながら、鈴は歯を食いしばり耐える。おそらく苦悶の声を上げているのだろうが、空間ごと閉じ込められているせいでただ痛々しい彼女の姿だけが伝わってくる。

「苦しいか？心配するな。すぐに終わる」

身動きの取れない鈴のもとまで、弾が跳んだ。そして、そのまま鈴の頭部を掴む。同時に空礫が解け、アリーナに鈴の叫びがこだました。

「ほらっ」

傍から見れば軽い動作だった。ゴミをぽいっと投げるかのような自然な動きで、鈴は投げられた。

地面へと。

「かつはははは！ぬるい、ぬるいぞオ一夏アアッ！」
「墜ちろおおおおおおおおツツ!!」

気合一閃。

一夏は上に弾かれた『雪片弐型』に全体重を乗せ、さらに『零落白夜』を発動して振り下ろした。

振り下ろされた一撃は、弾の頭へ振り下ろされ、しかし当たる前に止まった。音速を超える一夏の斬撃を、弾は手首を掴むことで強引に止めたのだ。

「悪いが、おまえは後回しだ」

ブツ、と一夏の視界がぶれた。強烈なGと青空と地面の入り混じった光景が視界をぐるぐるとまわって、真上に放り投げられたということだけは、感覚でわかった。

一夏を真上に放り投げた弾は、開始から全く動かずに一発逆転の機会をうかがっているセシリアに目を向けた。弾と目のあったセシリアは露骨に体を震わせる。

次の瞬間には、弾はセシリアの前にいた。

セシリアのハイパーセンサからは何一つ情報が送られてこなかった。弾が目の前に

立ってようやく『敵機接近』と伝えられる。

「よお」

「い、きげんよう……ですわ」

嫌らしく笑う弾と、頬をひきつらせるセシリア。状況は明白だった。

『スターダスト・シューター』のチャージが残り一秒を切る。

弾が深く噛った。残り零・九秒。

弾が拳を作った。残り零・七秒

弾が腕を持ち上げた。残り零・五秒。

弾が体をひねった。残り零・四秒。

もう無理か、とセシリアが思ったその時、

「私を忘れてもらっては困る」

弾の後ろに、ラウラがいた。

不意を突かれ、弾の意識が背後に移った。残り零・一秒。

A I C 発動。弾の体が、刹那止まる。

——『スターダスト・シューター』チャージ完了。

——^{ファイア}発射。

弾にラウラ、セシリアを含めたアリーナ全体が青い光に包まれる。莫大なエネルギーを秘めたセシリアの砲撃が一切ことごとくを貫いた。そしてその圧倒的な閃光に、誰もが目をくらませひるんだ。

やがて少しずつ光が収まっていき、誰もが気にしたアリーナの全容が露わになっていく。

『スターダスト・シューター』が発射される前に三人がいたところには何も無い。では下か。見れば、アリーナの地面には巨大なクレーター、穴が開いていた。中心からは土煙が巻き上げられ、アリーナをよくよく見ることが叶わない。

誰もが固唾を飲んでいた。そして、ようやく土煙が晴れる。そこにいたのは、

『セシリア・オルコット、ラウラ・ボーデヴィツヒ、シールドエネルギーゼロ。リタイア』

装甲がぼろぼろになったセシリアとラウラ。弾の姿はない。

上空にいたことよって被弾を免れた一夏は、必死になって弾を探す。だが、姿どころか装甲の一片さえ見つけられない。

その事実が、先程までの感情の高ぶりを抑え、必死に熱を払おうとしていた。

「どっ、行った……っ？」

尋常ではない冷や汗をかきながら、一夏は感覚を研ぎ澄ましていく。まだ弾が倒れていないならば、気を抜くことはできないのだ。

『雪片式型』を構える。

変化があったのは、アリーナに開いた穴。突然、その付近が隆起し、砕け、吹き飛んでいく。

「はアア……！」

紅い長髪を逆立てながら、地獄より悪魔が出現した。

ゆつくりと重力操作で穴より這い出してきた弾には、一つの傷も見えない。『白式』が

伝えてくる情報からも、シールドエネルギーが削られている事実は確認できない。

あの一撃を受け、無傷である。

「狙いは良かった。惜しむらくは、タイミングか」

ラウラのAICは、早かったのだ。あと少しだけ発動を遅らせれば、弾は『スターダスト・シューター』の一撃をまともに受けざるを得なかっただろう。

「さて、俺は無傷だ。どうする一夏？」

「それは……負けを認めろってことか？」

「賢明な判断だとは思うがな」

「ハッ！ありえないな。おまえだって、自分で思ってもいないのに言うのはどうかと思うぜ」

弾の言葉を笑い飛ばして、一夏は『雪片式型』を構えなおした。状況は悪い。最初から勝てるとは思っていなかったが、予想以上に酷い有り様だ。一夏一人では相手にもならない。

それでも、負けることに慣れたくない。

それが、今の一夏を支える気概だ。

「なら、来いよ。突っ立ってるだけじゃあ何もできないぜ」

魔人と一夏が並んだ。

魔人は大胆不敵に自然体で、一夏は自身の獲物を抜刀術を扱う時のように腰で構えた。

「おおおおおおおおおおおおおおおオオツツ!!!」

——瞬剣

斬撃が疾走^{はし}る。

白い光子を引き連れた閃きは空を裂き、目標へとただ駆け抜ける。

——瞬拳

だが、悪魔の拳がそれを許さない。

視認させることもなく、一夏の剣を弾いた。

幾度この光景を見ただろう。己の全力が、まるで羽毛のごとく吹かれ飛ばされるこの光景。

弾と知り合い、一夏は自分を研磨することに努めた。強くなろうとした。何度も何度も弾に稽古をつけてもらい、その度に自分の弱さを知った。

いつからだ。全力を弾き返されることに抵抗を覚えなくなったのは。ギリツと。

一夏は歯を食いしばった。弾かれた剣に引つ張られる体を、なんとか踏みとどまらせる。

このまま弾かれて、瞬間をくらうことどこに進歩があるというのか。そんなもの、二年前の弱い自分と変わりないだろう。

見せつけろ、今を。

「これが俺だアツ!!舐めるなアアアアアツツ!!」

—瞬劍・塵

瞬劍の、そして弾かれた分の速度が乗る。変換率こそ瞬閃とまではいかない。だが、それに追従する一夏だけの一撃。

弾が瞬閃を放とうとするが、その拳が途中で止まった。

一夏の剣は、もう止められない。

全身全霊を超えたその剣が、弾を斬った。

「当たつ、た……?」

「自分でしておいて、不思議そうにするな。馬鹿が」

自分の起こした結果に呆けてるうちに、一夏は弾に蹴られ吹き飛んだ。だが、一夏は吹き飛んでる間ですらこれが現実かどうかはつきりしなかった。アリーナの壁に叩き付けられたことで、ようやく夢ではなかったことを認識する。

『白式』が弾のシールドエネルギーが二割を切ったことを伝えてきた。だが、

「傷もつけられなかったか……」

「あたりまえだ。俺に傷をつけたいのなら、星を消し飛ばす程度の強度は持つて来い」

確かに弾のシールドエネルギーは削れた。だが、弾は苦しみの声一つすらも吐かない。『零落白夜』の乗ったあの一撃は、間違いなく搭乗者にまで被害を及ぼすモノだった。それを受けて無傷。一夏としては、もう笑うしかない。

一夏の体はもうピクリとも動かなかった。体中の力をすべて出しきってしまったようだ。ただ、頬だけは引きつっているがなんとか動かさせた。

ゆっくりと近づいてくる弾を見て、それでも純粹に笑えたのは、きっと初めてまともに弾に攻撃を当てることができたからだろう。

「本気でいくぜ」

全力は出せないがな、と。

弾の言葉に、もはや一夏に答える力はない。とりあえず、最後まで笑っていようと決めた。

「I c h l i e b e d i c h」

弾の口から呪が吐かれた。一夏には理解できなかつたが、何か痛々しいまでに切実な思いが込められているのを感じる。生来、あるいはその前から渴望し続けている何か。

——瞬拳

今まで受けたどんな攻撃よりも痛烈で、衝撃的な痛み。

暗闇へと落ちる意識の中で一夏は、なぜだか弾と戦うのがこれで最後のようない気がしていた。

∨∨ 1

試合は五反田弾の圧勝に終わった。

唾然とし、沈黙している観客が見守る中担架で運ばれていく一夏達を見届けることもせず、弾は自分のピットへと戻り、

瞬間、血反吐を吐いた。

ぼたぼたと口から零れる紅い液体を乱雑に拭い、壁を背にして座り込む。纏っていた

『ブラッディ・ロード』の装甲がほつれる様に解け、空中に消えて行った。

「ふう……」

長くゆつくりと息を吐く。鮮血は口内から溢れるように出てくるが、勢いが弱まっていき、やがて消えた。

弾は自身の脇腹に視線を送る。学年別トーナメントで乱入してきた黒い人型に貫かれた部分だ。あれから一週間で、完全に治るわけはなかった。ズキズキと鋭い激痛が走るその場所を見て、弾は天を仰ぐ。見上げた先は、暗いコンクリートしかなかったが。

そもそも今日の試合、開幕時に弾がシャルロットのアサルトライフルを避けたのも、最後の一夏の攻撃を受けたのも、この傷が急に痛みだし、弾がそれをかばった為だ。

「それにしても、いい一撃だった……」

最後の攻撃、一夏の『瞬剣・塵』を思い出し、弾は立ち上がった。

全身全霊を超え、新しい境地にたどり着いた一夏の閃き。一夏も無意識だったのだから、まさかあの瞬間だけで五回も切られることになるとは思っていなかった。

おそらく、あれはまだ完成していない。もしあれが完成し極められたとき、弾すらも切り伏せられる可能性がある。そう考えると、なぜか笑えた。

残念で仕方がない。

「もうおまえと戦うことはないのにな……」

弾が腕で空間を薙いだ。すると、すでに固まり始めていた血だまりがまるで最初から存在していなかったように消え失せる。残されたのは、五反田弾にしかわからない彼の後悔。

弾はそれに見向きもしないで、暗いピットの先へと歩んで行った。

O l d t a l e

一夏と鈴が中学一年生の時のことだ。その日も、いつものように学校から帰る途中だった。

一夏と鈴の二人、肩を並べて帰り道を歩く。薄暗い廃工場の近辺。放課後に遊び過ぎたせいで遅くなったため、近道しようとするこの道を選んだ。

「結構遅くなったな」

「あんたがクレーンゲームに熱中し過ぎたせいでしょうが」

「鈴だつて楽しんでたじゃないか」

「うっ、それはそうだけど」

「そうだろ？しかし、クレーンゲームに随分使つたな。明日からもやしだ」

「うちに来ればいいじゃない。奢ってあげるわよ」

「それはだめだろ」

「ほんつと、一夏は変なところで律儀よね」

他愛のない話をしながら歩く。身長さのせいではたからすれば兄妹にしか見えないが、鈴としては幸福な一時である。

しかし、

ドシャアアア!

とその一時を破つて、横から何かがとんでもない速度で飛んできた。

「うおっ、なんだ!?!」

「な、なにっ!?!」

驚いて身をすくませる。そして飛んできた物体を確認して、さらに驚いた。

人間、である。

見るからに不良といった雰囲気の男性だが、ピクピクと痙攣しているので死んではいないようだ。

「なんだよこれ!?!」

「し、知らないわよ!」

一夏と鈴が慌てふためいていると、廃工場の敷地から怒声が聞こえてきた。

「何してんだ、テメエら?」

一夏と鈴は、突然背後からかけられた声に、緊張で体を硬直させる。

見れば、そこにいたのは赤みがかつた髪を伸ばした長身の少年だった。

一夏と鈴には見覚えがある。同じクラスの、確か五反田という名前だったか。その五反田という少年は値踏みする様に一夏と鈴を見た。

「テメエらもこれの仲間かよ?」

これと指差したのは、さつき吹き飛んできた男だ。

「い、いや違う。たまたま通り掛かっただけだ」

「そ、そうよ」

「そうかい、そいつは悪かったな。当たんなかったか?」

「大丈夫だけど。いや、待ってくれ。お前が投げたのか?」

「どうでもいいだろ、んなこと。俺は行くから、テメエらも早く帰れ」

「に、にやによ！指示しにやいで！」

「鈴、呂律回ってないぞ」

「うっさい！クラスメイトに偉そうに指図する奴の言うことなんか聞く必要ないでしょ！？」

「クラス、メイト？」

「あ、ああ。五反田だろ、お前？」

「確かにそうだが……そういえばおまえらみたいなのが居たような居ないような」

興味なさそうな顔で五反田が呟く。最後に鼻で笑って、二人を置いて廃工場へ歩きだした。

「あ、待てよ！」

「とつとと帰れ。巻き込まれたくはねえだろ」

それだけ言って、五反田は今度こそ立ち止まらずに去っていく。

五反田の向かう廃工場からは、異様な雰囲気を感じられた。そんなところへ何をしに

行くというのか。

「どうするの、一夏？」

「いくだけいってみるか。なんか心配だし」

何とも無謀だが、もともとのトラブルに遭いやすい体質と思春期特有の好奇心で廃工場へ行くことを決める一夏。

鈴は呆れながらも、五反田を追う一夏について行った。

∨ 1

この工場は、稼動していた当時には運送用の車輛がよく行ったり来たりしていたので、そのために大きな広場が設けられている。そこに今、三百人を数えようかという人間が集まっていた。

全ては、五反田弾を倒すために。

「来たか」

数百にのぼる不良の先頭に立った一人が、廃工場の門から入ってきた五反田を見て呟いた。それに呼応し、全体が割れんばかりの咆哮を放つ。空気が震動し、怒声が雨のように降り注いだ。

「うるせえな、猿ども」

だが、五反田はそれを一蹴する。

明らかに敵意を持つ集団を、怯みもせずに挑発した。

「こっちは三百人以上だぞ！人質もいる！」

五反田の挑発を聞き、男が吠える。

人質と聞いて、五反田が顔つきを変えた。

「蘭はどうした？」

「はっ！いくら魔人と呼ばれていても、妹は心配だつてか？」

「蘭はどうした」

重く、怒りを感じさせるには十分な声で五反田は言う。有無など言わせぬ口調だ。男は怯んで「お、奥にいる」と素直に答えてしまった。

「そうか。見逃してやるから、消えろ」

「消えろ、だと？どっちが命令する側かわかってねえみたいだな。こっちは三百人だ！ たった三人でどうにか出来るわけねえだろ！」

「三人？」

ここで初めて、五反田は一夏と鈴が後ろにいるのに気付いた様だ。

「なんでついて来てんだ。帰れって言っただろうが」

「クラスメイトが困っているのに助けない訳ないだろ」

「それだけでか？」

「なによ、文句あんの？」

鈴が強気に出る。それを見て五反田は、呆れたように、けれど嬉しそうに笑った。

「お前ら、名前は？」

「織斑一夏」

「凰鈴音。あんたは？」

「知ってんだろ」

「アンタから聞きたいのよ」

「ハッ、いいぜ気に入った。五反田弾だ」

名乗りを交わしあう。それ以上の言葉は無粋だった。

弾は笑い、髪を逆立てながら拳を不良どもに突き付ける。

「織斑、凰。話は聞いてたか？」

「ああ、わかるぜ」

「そうか、ならここは俺に任せて奥へ行け」

「妹を救って来いってわけか」

「任せなさい。でもアンタは大丈夫なの？」

「くは、俺は『魔人』だぜ。いくら数があるうと関係ねえ」

そう言つて、弾は横に放置されていた業務用のトラクターを片手で軽々と持ち上げた。まるで木の棒でも振るかのように、空気を唸らせながら二、三回振る。

「アンタ、本当に人間？」

「さあな。時々自分でもわからなくなるよ」

弾が一步踏み出した。それが合図。

ニツと笑いあつて、三人は三人ともに駆け出した。

〽 2

「という感じだったな」

週末の夜、一夏を中心としたいつものメンバーは食堂で会話に花を咲かせていた。とりとめのない話をするだけであつたのだが、いつの間にか昔話をする事になつてい

た。

一夏が語り終え、集まった少女たちは一様に苦笑する。一夏と鈴がどうやって弾と知り合ったのかという話だったが、予想を完全に上回っていたのだ。

「結局、私たちが駆け付けた時には蘭も自力で拘束を破ってたのよね。ああ、兄妹なんだなって思ったわ」

「すごいかったよな、あれ。一応俺らがチンピラを倒したけど、実際蘭ちゃん一人でもなんとかなったんじゃないのかな。弾も弾で、蘭ちゃんと合流して戻ってみたら広場が世紀末状態になってたし」

一夏達が遠い目をして言うと、シャルロットが目を爛々と輝かせていた。シャルロットが女子だとわかったあの一件から、彼女は弾に対してある種宗教的な憧れを抱いているのだ。

「さすが五反田さんだね！すごいなあ」

「この場合、なんとやっていいのか判断しにくいですわね」

「悪魔的だな……」

セシリアと箒が呆れたようにため息をついた。一夏も鈴も、乾いた笑いしか出てこない。

「なに話してんだおまえら？」

噂をすればなんとやら、弾が会話に入ってきた。

「いや、皆がどうやって弾と知り合ったのか聞きたいって言い出して」

「馴れ初めだ？んなもん、あれだろ。河川敷で殴り合ってた一夏と鈴を俺がさっそうと現れて止め……」

「いや、そんな熱血青春ストーリーじゃなかったよ!？」

あいかわらず弾の記憶はいろいろとぶっ飛んでいた。けらけらと笑いながら、弾は冗談だよと一夏の背中を叩く。

そこでラウラが何かを思い出したようにぽんと手を打った。

「ああ、そうだ。五反田。今思い出したんだが、うちの隊のクラリツサがおまえによく伝えてくれと言っていたんだ」

「クラリツサ？クラリツサ・ハルフオーフか？」

「うむ。知り合いだったのか？約束がどうか言っていたんだが」

「ああ、少し縁があつてな。しかしそうか、あいつはおまえの隊にいるのか」

顎に手を当て、しみじみとつぶやく。そんな弾の様子に一夏達が興味を示すのは、あの意味当然だ。

鈴が不意に投げられた格好の餌に飛びついた。

「ちよつと、話さないよ弾。気になるでしょう。それとも、私たちには言えない関係なのかしら？」

「そうだな、私も気になるぞ。部隊員の人間関係を知っておくのも悪くはあるまい」

ラウラも便乗し、一夏やシャルロットも食いついてきた。箒とセシリアも口には出さないが知りたそうだ。

「しかたねえなあ。一夏には少し痛い話になるだろうが、あれは二年前のことだったよ」

〈 3

第二回モンド・グロツソが開かれているだけあって、街は活気に包まれていた。人の横を通り過ぎれば、あの国のISは良いだの悪いだの必ずついていいほど話し合っている。

良くも悪くも、街は祭りのムードに包まれていた。

「暇だ……ふああ」

大きなあくびをしながら、弾は熱を持つ街中を歩いていった。一夏の姉がモンド・グロツソにでると聞き、暇だったので観戦にきていたのだ。

明日の午後から決勝戦だが、それまでは暇だった。ホテルで惰眠を貪っていればいとも思うが、それもつまらない。結局、街中を徘徊するしかないのだ。

がやがやと騒がしい街にひととき大きな声、悲鳴が響き渡った。

「きゃあああああ！ひったくりよおお！」

喧騒を駆け抜けた悲鳴は外国語であった為弾には意味がわからなかったが、気の良さそうなおばさんがカバンを抱えて猛ダツシユしている黒づくめの男を指差していることから、ひったくりにあつたのだということを理解させた。

女尊男卑のこの時代、ひったくりなんてすれば男性の立場はますます下がってしまう。せめて同じ男の手で捕まえてやればプラマイゼロ程度にはなるだろう。

かくいう弾も、こつちに滞在している間に三回ほど高圧的な女にパシリさせられそうになつた。その時には瞬間的に相手の目の前から消え、最初からいなかったように見せて難を逃れたが。

ともあれ、これ以上めんどくさいことになるのは勘弁して欲しい。男の名誉の為に、ここは弾が動くことにしよう。

逃げるひったくりのもとへ先回りし、足を引っ掛けてやる。ひったくりは体勢を崩し、転びそうになりながらもなんとか持ち直した。そして、逆上したようにナイフを取り出して弾に向ける。

「おんどりゃあ、なにしてくれとんのじゃわれえ！」

※日本語ではない為、弾には伝わっていません。

男はめちやくちやにナイフを振り回し、自分に近づけようとしない。その間も弾にはわからないがわめき散らしている。

めんどくさいので、デコピンの要領で空間を弾き、衝撃弾として打ち出してナイフを吹き飛ばした。

「うぎっ!?!」

「日本語しゃべれ!」

叫び、空礫で吹き飛ばす。ポストに叩きつけられた男は二、三ピクピクと痙攣した後、そのまま動かなくなった。

数瞬の沈黙の後、喝采が沸いた。被害にあつたおばさんがしきりに頭を下げてる。おそらく感謝されているのだろうが、何を言っているのか全くわからない。

しばらくしてようやく騒ぎが収まり、弾はやかましい人混みから解放された。そこへ、

「すごいすごいすごい！貴方がジャパニーズ・NINJAですか!? さっきのは忍法!?!」

やけに興奮した女性の言葉が聞こえた。驚くほど流暢な日本語ではあったが、内容は誤解に誤解を重ねたようなものだった。

ぐいつと弾に顔を寄せてきたのは綺麗な髪が映える年上の美人。美人なのだが、興奮して子供のように目を輝かせている様子はとても愛らしい。

「あ、すいません。私、大の日本好きで。クラリツサ・ハルフオーフと言います」

「あ、ああ、五反田弾だ」

勢いに押され、つい答えてしまった。クラリツサは止まらず、まるで機関銃のように言葉を飛ばしてくる。

「ここにはアレを見に?」

ここでのアレとは世界大会しかない。他に何かあったらそっちの方がびっくりだ。とりあえず、素直に頷いておく。

「まあ、そうだが」

「珍しいですね、男性がI Sの大会を見にくるなんて」

「友人の姉が出てて」

「へえ、そうなんですか。今は観光？」

「暇だったからな。街中がよくわからないから、適当に歩いているだけだが」

「あの、よろしければ街を案内しましょうか？」

「いいのか？こつちとしてもありがたいけど」

「いいんですいいんです！その代わり、さっきの忍法について教えてくださいね」

「それが狙いか……わかった、よろしく頼むよ」

「やった！」

そこから、クラリツサに連れられていろんなところを回った。有名人が泊まったホテル、歴史を感じさせる時計塔、隠れた名店など、気づけば空が暗くなるほどに夢中だった。

クラリツサが忍法と勘違いしている空礫についても教えた。忍法ではないと知った時はがっかりしていたが、簡単にできるちよつとした技を教えたなら随分喜んでいた。

別れ際にはお互い名前で呼ぶようになり、身の上話すらするようになっていた。

「クラリツサは軍人なのか。似合わないな」

「ひどいです弾。これでも部隊では慕われているんですよ」

「ああ、それは想像できる。なんだかんだで面倒見がいいからな、クラリツサは」

「ふふ、そうでしょうそうですね」

「しかし、軍属なのに今日はいいのか？」

「抜かりはありません。この期間中の為だけにずっと根回しをしてきましたから！」

「そうか、よかつたな」

「ええ。ですから、その、明日は午後から決勝戦がありますが、午前中は予定がないのですよ。だから、えっと、明日も会えませんか？」

「明日？」

「え、ええ。やつぱり、ダメですよね……」

「いや、いいけど」

「ほ、本当ですか！で、では明日、また会いましょう！」

花が咲いたように笑顔になって、クラリツサはいかにも良いことがありました、とい

うような雰囲気で自分の止まっているホテルへと帰っていったのだった。

〈 4

翌日、弾は早めに指定された待ち合わせ場所に行った。少々早すぎる気もしたが、それならそれで周囲のカフェで暇をつぶすのも一興だろうと思つたからである。

実際のところ、そのその必要はなかつたが。

「遅いですよ弾」

頬を膨らませ文句を言ってくるクラリツサに、弾は呆れたようにため息をついた。

「まだ予定の一時間前なんだが」

「私はさらに一時間前からいました」

「何してんだよ。馬鹿かおまえ」

「た、楽しみにしてたんだから仕方ないじゃないですか！それに、弾だつて一時間も前に来たでしょう！」

「チツ……で、今日はどこ行くんだ？」

「え？どこ行くって……」

「……おまえ、自分から誘っておいで予定も立ててなかったのかよ」

「う、うるさいですよ！誘うだけで舞い上がっちゃ悪いですか！」

「悪くないが……」

「……では、とっておきの場所に行きましょう。私が教えるのは弾が始めてですから、光栄に思ってくださいね」

「はいはい、コーエイコーエイ」

ふふん、と胸を張るクラリツサを適当にあしらう。クラリツサはブーブーと頬を膨らませ抗議してくるが、弾はどこ吹く風で笑っていた。

案内されるままたどり着いたのは古いレコードショップだった。厳かな雰囲気建物と流れているシックな調子の曲が絶妙に合わさって、ただ店の中にも安らげる。

「いいところでしよう？いるだけで落ち着けます」

「ああ、確かにな」

弾には音楽の心得など全くないが、それでもここにいたいという思いが自然とこみあげてきた。もはやほとんどがデータによって構成される今のご時世に、レコードというアナログな品を取り扱っていて潰れていないというのはとてもすごいことだ。きつと、皆自然に安らげるこの雰囲気を求めてくるのだろう。

あまり大きくはない店内を、時間をかけてゆっくりと見て、聴いて回る。クラリツサのおすすぬや、有名どころにマイナーでも名曲といわれるものまで。その全てに、今のデータにはない温かみというものを感じる事ができた。

一通り見て回ったところで、クラリツサの足が止まり、ある一点に視線が釘付けになつていた。見れば、そこにあつたのはゲーテの詩にシューベルトが曲をつけた名作、『魔王』だった。

それを見ながら、クラリツサがドイツ語で口ずさむ。

「私はあなたを愛している

Ich liebe dich

あなたに魅了されたのだ

mich reizt deine schone Gestalt

されどあなたが望まぬというのなら、私は力を揮おう」

U n d b i s t d u n i c h t w i l l i g , s o b r a u c h i c
h G e w a l t

「……？それは、『魔王』の詩か？」

「はい、作中の魔王のセリフです。私この部分が大好きなんですよ。特に、力付くで連れて行くという部分。変わってるとよく言われます」

「ふうん。俺は『魔王』自体よく知らないんだが」

「簡単に言っちゃうと、ある子供を気に入った魔王がその子連れ去ろうとする話ですよ。最初は甘く囁くんですが、子供が拒むので最後は力付くで連れて行くんです」

「そこらの喜劇とは違うわけだ」

「ぜんっぜん違いますよ」

クラリツサはむきになって『魔王』の説明をしてくる。相当な熱の入りようだ。それだけ、この作品が好きなのだろう。

「私が初めてこの詩を知ったときは、それはもちろんこの部分を好きではなかったですよ。でも、成長していくにつれ、力というものの本質を知って少しずつ認識は変わって

きたんです。顕著だったのは、白騎士事件の時ですね。あの時から、私の力というものに対する認識は百八十度ひっくり返りました」

「力、か……」

「ええ。白騎士事件で、かの白騎士はその圧倒的な力でもって立ち向かった兵器をすべて撃退。しかも死者を出さず、無力化するだけです。正直、感動すらしました。強大な力っていうのは、誰かを傷つけないこともできるのだと」

「強大な力は、結局ただの暴力だぞ」

「そうですね。でも、それで誰かが救われることだってある。だから私は軍人になったんです。誰かを救える力になるために」

この詩は、いわば反面教師のようなものです。そう言って、クラリツサは照れくさそうに笑った。弾は強大な力、つまり暴力が誰かを救うなんて考えたこともなかった。正直な話、クラリツサの脳を疑ったほどである。

だから、店を出たところで言った。

暴力は所詮暴力だ。おまえの理想を笑う気はないが、誰も救えなかった時お前は どうするんだ、と。

弾の言葉を聞いて、彼女は少しも迷わずに即答した。

「覚悟はとうにできている

Ich habe bereits entschieden

己の道を行け」

Geh deinen Weg

「……誰の言葉だ？」

「私のです」

えへんと胸を張るクラリツサを見て、弾は呆気にとられたものだ。目を見開き、口をぼかんとあけたその姿はさぞ滑稽だったろう。現に、クラリツサは爆笑していた。

「私の力の揮う先は、私が決めるんです。それが何を成すのかも、全部私次第。だから、救えなかった時のことは考えません。絶対に救うんですから」

「……答えになつてないな」

それでも、クラリツサの答えは新鮮だった。とりわけ、惰性で超常的な力を振りまき続けた弾には考えもつかなかったことである。

黙る弾を不審に感じたのだろう。クラリツサが恐る恐るといった様子で顔を覗き込んできた。

「だめですか？」

「いや、十分だ。参考になった」

「そうですか。よかった」

ふっと安堵のため息をつくクラリツサの横を、一台の車が通り過ぎた。黒塗りの、どこにもありそうな車だが中から感じる気配は弾のよく知っている奴のものだ。

「一夏か？なんで車になんか乗ってるんだ……？」

「イチカ……？」

「ああ、いや。なんでもない忘れてくれ」

首をかしげるクラリツサに、どうでもいいことだと伝える。しばらく疑問が尾を引いていたようだが、そのうちに戻った。

そこからしばらく、二人で街を歩いた。目的もなくただ街を徘徊していただけで、昨

日弾がしていた行動と変わりはない。それなのに、二人いるというだけで街は見えなかった色彩を浮かび上げさせ、飽きを感じさせない。

「そろそろ、時間ですね」

クラリツサが言い、時計を見れば確かに時間だった。広場の中心にある噴水が、定時になったのを察して勢いを強める。クラリツサともここでお別れだ。おそらく、もう会うことはないだろう。素直に、名残惜しいと感じた。

札と別れの言葉を言つて、弾はクラリツサに背を向け歩き出す。だが、一步踏み出したところで後ろに引っ張られた。振り返れば、クラリツサが弾の服の裾を掴んで俯いていた。

「どうした?」

尋ねても、返答はない。何を言っているのかもわからず、弾も黙り込んだ。しばらくして、俯いていたクラリツサが意を固めたように顔を上げた。

「一つ、約束してほしいんです」

「約束？」

「はい、約束です。いいですか？」

内容による、と言いかけたのをすんで飲み込んだ。せつかくなのだ。大見得を切つても罰は当たらないだろう。

「おう、いいぜ。何でも言えよ」

「そ、そうですか。では……また、私と会つてくれますか？」

「なんだ、そんなことかよ。もちろんいいぜ。約束だ」

「はい！約束ですよ！」

まるで太陽のような笑顔を浮かべたクラリツサと約束を交わし、弾は再び歩き出した。

誰かを救う力。力の成すことは自分次第。

クラリツサから学んだ力のあり方。今まで惰性でなんとなく振りかざしていた自身の力と、真摯に向き合ってみるのもいいかもしれない。そんなことを考えながら、弾は

クラリツサと別れたのだった。

◇ 5

少しずつ小さくなっていく弾の背を見つめながら、クラリツサは不思議な充足感を得ていた。五反田弾という不思議な男性。訊けば未だ十三才というのだから少年という呼称が妥当だが、しかし彼にそれは合わない。

巨大で雄大で、心から安らげる雰囲気。まるで大樹のような人だった。

そんな彼だからこそ、今まで誰にも語ることのなかった自分の夢を吐露したのかもしれない。照れはあつたが、不快ではなかった。

「さて、私も決勝戦を見に行きますか」

気持ちを切り替えるようにそう言ったところで、懐で携帯電話が鳴った。ディスプレイを見れば、表示されていたのは軍の上司。休暇中なのに、と愚痴を吐いてみるが無視するわけにもいかなないので電話に出る。

「どうしたのですか？ 私は今休暇中で……え？ 織斑千冬の弟が行方不明？」

上司から伝えられたのはかの『世界最強』織斑千冬の実弟、織斑一夏が行方不明であり何者かに拉致された可能性がある、ひいては現地にいるクラリツサに手伝ってもらいたいということだった。

そこで、ふと思いつく。たしか弾は、友人の姉がモンド・グロツソに出ると言っていた。弾は日本人なのだから、当然その友人も日本人だろう。そして大会に出ている日本人はたったの数名。さらに、さきほど通り過ぎた車を見て弾の言った「イチカ」という言葉。

クラリツサの中で、それらが一つに纏まっていく。

「私に心当たりがあります——」

誰かを救うという自分の正義を貫くため、クラリツサ・ハルフォーフは事件解決に動き出した。

The deeper than the deep sea

週末、五反田弾は久しぶりに帰ってきた自宅で、タンスを漁っていた。

臨海学校の為に海へ行くのだが、寮には必要最低限のものしかなく水着も置いていなかったもので、こうして取りに来たという訳だ。

どうも一夏達は新しい水着を買ったらしいが、弾は去年まで使っていた黒のトランクスタイプで十分である。新しくする意味はない。

しばらく物色していると、目当てのものを見つける事ができた。サイズがあっているかどうかだけ確認して、水着をバッグの中に乱雑に突っ込んでおく。

他に持って行くものは有ったかと一人弾が唸っていると、ノックの音のあとに蘭が入ってきた。

「相変わらず殺風景な部屋だね。というか、前よりも片付いてない？」

「そうか？」

入ってくるなり部屋のダメだしをしてくる蘭の言葉に、弾は首をかしげた。

部屋にはベッドと、すかさずの本棚が一つ。机には時計が置いてあるだけである。なるほど、確かに殺風景だ。

「いや、もう片付いてるとかじゃなくて、人が住んでないみたい」

「おいおい……」

「あつ、他のものは寮に有るのか。こんな時ぐらいしか帰つてこないもんね、お兄は」

一人納得し、うんうんと頷いている蘭は一旦置いておき、弾は苦笑しながら臨海学校のしおりを見て持ち物を確認する。

着替えと水着、生活用品に筆記用具と教科書を持ってばいいだけだ。荷造りは簡単に終わった。

「お兄はこれから臨海学校だっけ？ いいなあ、海」

「これからお前もいくだろう」

「そういうことじゃないの！ まったくこれだから……」

じゃあ、どうということだよ、とは突っ込まない。行つてない者からすれば、羨望の対象になるのは知っている。

弾は口を尖らせる妹をなだめ、荷物を持って立ち上がった。そろそろ学園に行かないと、寮の門限に間に合わない。

部屋をでる前に、弾は一度だけ立ち止まった。

「……蘭」

「ん？なに？」

無垢な顔で聞き返してくる蘭に、弾は優しく微笑んで言った。
らしくないが、たまには兄貴風を吹かせたつて罰は当たらないだろう。

「じゃあな。元気にしろよ」

「……うん、じゃあね」

少しの間をおいて、蘭は答えた。

弾には、うつむいた蘭の表情を知ることができない。

けれど、その声はどこか掠れて聞こえた気がした。

◇ 1

「海だああああ！」

窓から見えた光景に興奮し、バスの中では祭りのような騒ぎが起こっていた。何人かの生徒が教師の注意を受けるが、着いた火を鎮めることはできてきかない。そのうち教師も無駄だと悟ったのか、生徒達の興奮を遮る防波堤は無くなった。

「すごく騒がしいですね」

「そういうお前も楽しそうではないか、セシリア」

「あら、箒さんも随分期待されているようですが？」

「な、なっ！違うぞ、私は！ええい違うったら違うのだ！」

箒とセシリアもなんだかんだで騒いでいるし、海は人を開放的な気分させるというのは本当のようだ、とひとり考察する弾は窓際の席でぼけつと海を眺めていた。悲しい

かな、超人的な身体能力を誇る弾には海での遊びがことごとくつまらないものとなってしまい、楽しみを感じることはできないのだ。

「そろそろ旅館に着くぞ。降りる用意をしておけよ」

千冬の言葉に、生徒たちは声を合わせて「はい！」と答えた。相変わらずイベントにおいてのこのクラスの団結力はすさまじいものがある。

数分も経てば旅館に着いた。女将さんに頭を下げ、各々割り当てられた部屋に荷物を置きに行く。その後はもう自由。今日一日は講義も何もなく、完全フリーだ。

それはまあともかくとして、弾は千冬を呼び止めた。

「千冬さん、男子の部屋割りが書いてなかったんだけど？」

「あ、それ俺も思った」

ひよつこりと一夏が現れる。いつもの取り巻きは各自の部屋に行つたようだ。

「ああ、書いておくと夜這いに来る女子がいるかもしれないからな。織斑は私と同じ部屋

だ。これで夜中に来るバカはいなくなるだろう」

「ちふ……織斑先生となら、そりやまあ確かに来ないかな」

苦笑した一夏が臨海学校のしおりで千冬に叩かれているのはどうでもいい話。気になるのは弾である。

「で、俺は？」

「五反田は私たちの隣だ。喜べ、一人だぞ」

「弾は一人部屋かよ。というか、男子をまとめれば良かったんじゃ……」

再度一夏の頭にしおりが振ってきた。どうもそこは言ってはならないところだったらしい。いつもの様子を見ているとわからないが、千冬はなかなかどうして重度のブラコンなのだ。

「いいじゃねえか、たった二人の家族なんだ。学園じゃそんなに話さねえんだろ。たまには姉弟水入らずつても悪くないさ」

いつもの意地の悪い笑みを浮かべて、弾は一夏の背を軽く叩いた。軽くだったつもりだが、案外力が込められてしまったらしく一夏が呻いた。それを見て弾はもう一度笑い、荷物を取って自分の部屋へ行く。

とりあえず部屋に入った弾は荷物を放り投げ、今日一日どうしようかと悩んだ。

「まつ、無難に海へ行くか」

放りだした荷物からちらりと見えた水着を見て、弾は即決する。せつかく海に来たのだ。楽しめるかどうかは抜きにして、行かなければ損だろう。

そうと決まれば行動は早い。すぐに海へ行く用意をして部屋を出た。

「あれ、弾じゃない」

「ん？鈴か」

部屋を出たところで弾はぼつたりと鈴と出会った。荷物を見る限り、まだ部屋にもいつていないようだ。

「どうした？」

「いや……迷ったわ」

「ああ、おまえ方向音痴でもないのによく迷うよな」

「こう……勘に任せたら迷うのよね」

「意味のねえ勘だなオイ」

正論である。

「とりあえず弾、あんた地図持ってないの？」

「持ってない」

「……はあ、仕方ない。一度ロビーに戻ることにするわ」

「そうしとけ」

だるそうに荷物を抱えなおして、鈴が来た道を引き返していく。ちらりと見えた水着で、鈴が海水浴を楽しみにしていることが分かったが、残念なことにまだまだ時間がかかりそうだ。

だが、鈴には悪いが、そんなことはどうでもいい。とにもかくにも、海である。

弾は淀みない足取りで専用の更衣室に行き、水着に着替え、夏の暑さが照りつける浜辺へと足を踏み入れた。

青く美しい海は焼けた砂浜を行っては帰り、水平線の先には大きな雲が浮かんでい

る。
ウミネコの声に交じる少女たちの声が波の音に巻き込まれ、いつもなら騒音のようなそれはこの時ばかりは雰囲気にもマッチしていて、なんだかとても美しかった。

弾は顎に手を当て、大胆な水着で青春を謳歌している少女たちを見る。

「……ふむ、いいな」

ぼつりと呟いた弾の背中では、夏の日差しを受けてファイアパターンの刺青が赤く輝いていた。

◇ 2

「おう、弾」

「一夏か」

しばらく弾が足にサンダルをひっかけながらぶらぶらしていると、一夏が律儀に準備運動をしているところに出くわした。

ふむ、と一呼吸置き、弾は思ったことを口にする。

「一夏、おまえ水着買いに行つたんじゃねえのか？」

「いや、行つたけどさ」

「トランクスタイプはまあいいとして、なんで紺なんだよ。冒険しろよ」

「去年の使つてるおまえにだけは言われたくないな！」

やれやれ、と弾は首を振つた。わざわざ買いに行つたのだから、少しぐらいの勇氣を出しても罰は当たらないというのに。

「じゃあ、どんなのが良いんだよ」

「спанコールとか？」

「女子じゃあるまいし……鳥が寄つて来なさそうではあるが」

「あとは禪か？」

「そんなん履いてたら、人が寄って来ないだろうが！」

まさしくその通りだった。学校行事の臨海学校に禪を持っていくようなやつとはお近づきになりたくない。

でも漢らしいよなアレ、と弾。

それはわかる、と一夏。

「なーに馬鹿なことを話し合ってるのよ、アンタらは！」

禪の持つ浪漫に頷きあっている男二人のもとへ、軽快に砂を蹴る音と呆れ声が飛んできた。

オレンジ色のタンキニを着た鈴がひょいっと一夏の上に乗れり、けらけらと笑う。それを見ていた他の生徒が、きやいきやいと黄色い声を上げた。どうも一夏の行くサービスだと捉えたようだ。

「り、鈴、降りろ！まずいことになる！」

「たく、仕方ないわねえ……」

焦る一夏を見て、さすがに状況が悪いと察した鈴は口を尖らせ名残惜しそうに地面に降りた。一夏が必死に女子生徒たちに弁明しているのを見て、さらに不機嫌になる。

「勘弁してくれよ……」

一夏が事情を説明して解放されるまで、数分を要した。まだ来たばかりだというのに、一夏は早くもグロッキーだ。

予期していなかった精神的疲労にうなだれる一夏の背中を、鈴は元気づけるように軽く叩く。

「しつかりしなさいよ一夏」

「誰のせいだと思ってるんだ？」

「アタシじゃないことは確かだね」

「おまえしかいねえよ！」

一夏が叫ぶと、鈴は露骨に目を逸らし口笛を吹き始めた。自分の都合が悪いことは認

知しないらしい。とはいえ、一夏も伊達に幼馴染みをやっていない。鈴のおふぎけだということはわかつている。

「まったく、仕方ないな……」

「そうそう、過ぎたことは気にしない気にしない！」

「一夏よお、おまえ基本的にどっか甘いよな」

「言わないでくれ弾。俺も薄々感じてた」

あつはつは、と豪快に笑う鈴を見て、一夏はもう一度うなだれた。

「何呆けてんのよ一夏！せっかく海に来たんだから泳ぐわよ！」

「あ、こらっ！ちゃんと準備運動しろよ！」

「いまだき準備運動なんて小学生でもしないわよ！」

「ばか、それでなにかあったらどうするんだよ？」

「あーもう！いい？競争だかんね！負けた方はパフェ奢り！」

「なっ、ずるいぞ！」

言い終えるが早い、鈴が海に飛び込んでいく。一夏が慌てて追いかけるように駆けだした。おそらく、一夏が負けた場合に奢らせられるのは巷で有名な『@なんとか』とかいう店のパフェだ。おいしいのだが、いかんせん値段が張るので、一夏も必死にならざるを得ない。

「元氣だねえ」

自分には関係ないので、弾は一人砂浜に残って高みの見物だ。二人の賭け事の立会人になるのは、いつものことである。

だが、今回は少しばかり様子が違った。

「鈴っ！」

一夏の焦ったような、切羽詰まった雰囲気をはらむ声が目をついた。

見れば、鈴が手足をばたつかせてもがいている。どうやら溺れているようだ。それを、一夏が勇敢にも救助に向かっている。だが、弾は一夏のその行動の危険さを理解して舌打ちをした。

素人が何の用意もなしに救助に行くことが、どれだけ危険なことか。

溺れている人間は、大抵パニツクに陥っている。その状態では何かにつかまろうとするのが普通であり、救助者は要救助者が求める掴まれるものに相当するのだ。

それならばいいのではないかとも思うが、それは違う。

要救助者は必死になって対象にしがみつこうとするのである。ただでさえ身動きのとりづらい水中だ。しがみつかれた救助者ともどもに溺れてしまふ、ということには十分にあり得るのだ。

歴戦のライフセーバーであつても「道具を持たずに救助に行くことはない」というほどである。案の定、正面から助けに行つた一夏に鈴がしがみつこうとし、状況は好転するどころかむしろ悪くなつてゐる。

「一夏ッ！ 鈴ッ！」

叫び、弾は浜を蹴つて一気に加速。海水面を滑るように跳び、一夏と鈴を引き上げる。

「一夏ア！ 聞こえてるんなら、しつかり鈴抱きしめとけよオッ！」

海水を踏みしめ、弾は一夏と鈴を砂浜の方へ放り投げた。

「ぐへえっ!!」

ボスン、という間の抜けた音とともに、一夏が背中から砂浜に落つこちた。それでも鈴を抱いて守っているあたりは褒められるべきだろう。

「けほっ、うう……くるしい」

「ああ、鈴。大丈夫か? 大丈夫なら俺の上から退いてくれ。熱いし痛い、それに重」

「えいっ」

「ぐはあっ!!」

上に乗っかっている鈴から容赦のない踏み付けを受けて、一夏は焼けた砂浜の上で転げまわった。思いのほかいのが決まったようだ。

そこへ、一夏と鈴を放り投げた張本人である弾が海から上がってきた。

「二人とも怪我ねえか?」

「あたしは大丈夫だけど」

「鈴に蹴られたところがやばいんだけど」

「大丈夫そうだな。よかったよかった」

「あからさまに無視しないで!？」

バカヤローと叫んで、一夏は砂浜を叩いた。

「あつつ!砂アツツい！」

砂浜が熱いのは当然である。

「いや、でも無事でよかった」

「迷惑かけたわね、弾……」

「いいってことよ」

「ホント、アンタにはかなわないわ……」

めずらしく鈴がしおれて小さくなっているの、弾は気にすんなと背中を叩いた。ら

しくない、笑顔を見せろと鈴を励ます。

それでもなかなかいつもの調子を取り戻さないもので、いまだに砂浜の暑さに悶絶する一夏を蹴りおこし、強引に引っ付けてやる。

「ちよつ!?!だ、弾!なにして!?!」

「さあな?何の事だか」

わけもわからず首をかしげる一夏を置いて、弾は鈴に意地悪そうに笑った。まったく、もう……:などと呟きながらも鈴は満更でもなさそうな顔をしているので、もう大丈夫であろう。

しかし、一夏とくつつけただけで直るとは、素直にすごいと褒めればいいのか。

「あ、いたいた!」

「ん?ああ、シャルじゃないか。どうしたんだ?」

声に反応して振り向けば、黄色い水着を着たシャルロットと、そしてタオルを全身に巻きつけたタオルの化身ともいふべき何かがあった。

シャルロットがそのタオルのお化けに「ほら、ラウラ。タオルとつて」と言っているので、中にいるのはラウラなのだろうが、いかんせん一夏と鈴はタオルの圧倒的な存在感に気圧されていた。

端的に言つて、ドン引きである。

「もう、ラウラがそのままなんだつたら、ボクも一夏と遊びに行こうかな」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。一夏、鈴行こつ！」

「ま、待て！私も行くぞ」

「その恰好で？」

「うっ……わ、分かった。脱げばいいんだらう脱げば！笑いたければ笑うがいい……」

自暴自棄といった風に、ラウラがタオルを取った。後ろでにつこりと笑っているシャルのことは、とりあえず触れないでおこう。

ばつと勢いよくタオルを脱ぎ捨て去つたラウラの肢体を包んでいたのは、大人の下着といつてもそれほど間違っていないだろう黒の、レースをふんだんにあしらつた布面積が非常に少ない水着。

「に、似合わんだろう……?」

顔を赤くしたラウラは体を小さくしながら、一夏を見る。その身長さの為に一夏から見ればラウラは上目づかいであり、それもいつもの冷水と呼ばれるものではなく花も恥じらう乙女といった態度なわけで、それは高い破壊力をたたき出すわけであるが、悲しいかなそれを気付きもせずに受け流すのが一夏であった。

しかも、強烈なカウンターを自然に出してくる。

「いや、よく似合ってるぞ? うん、可愛い」

「なっ!? か、可愛いだと……」

一夏の言葉に、ラウラはさらに顔を赤くして落ち着かなさそうに両手をいじりだす。その前で不機嫌になった鈴に蹴られている一夏を見て、弾は爆笑していた。

と、そこへ一年一組のメンバーがビーチバレー用の道具を持ってきた。

「ねえねえ。織斑くーん!」

「ビーチバレーやろうよお！」

「それ、パス！」

ぺしんと叩かれたボールが一夏の手に収まる。

「ビーチバレーか。いいけど、メンバーどうする？」

「俺は抜けるよ」

弾は早々にやらない意を示す。どうせそうなるのである。ならば、さっさと自分から抜けておくのが吉だ。

「いいのか、弾？」

「俺が入ると勝ち負けが決まっちゃうからな。なあ？」

意地の悪い笑みを浮かべながら、弾は女子生徒の一人に同意を求めた。

「ああ、うんまあ、五反田さんがいるとちよつと……」

案の定、言い辛そうにはあるが肯定が返ってきたので、それみたことかと笑ってやる。一夏も苦笑し、じゃあと行って弾を誘うのを諦めた。

その後、ラウラがポンコツと化していたので必然的にメンバーが一夏と鈴とシャルに決まったようだ。

皆が楽しそうにしているのを見届けて、弾は一人旅館に昼食を食べに戻った。

◇◇3

少し変な話をしよう。

あるところに世界から、そして同種からも理解されない存在があつた。それは存在自体が本来あるべき枠組みを超越してしまつたからだ。

種がはこびる世界を、一新するだけの大きな力。あるいは能力。

いつしか同族であつたはずのその種からも追われるようになり、ふらりふらりと一人で世界をめぐるのだ。

「面白い話だろ？」

「なるほどねえ、興味を惹かれるよ」

深夜、生徒のほとんどが寝静まった頃に、弾は旅館を抜け出して波打ち際に立っていた。その背後からは間延びした、人をからかっているような声。

不思議の国からでも抜け出てきたような衣装に、頭から天に伸びる白い耳。
月下に兔。

「おまえが篠ノ之束か」

「そうでえす。ハロハロ」

小さな手のひらを握ったり開いたり交互にしながら、束は笑みを浮かべた。新しい友達ができたかのような、無垢な笑顔である。弾のことを同類とでも思ったのだろうか。そして、すぐに束はじろじろと弾を観察してきた。時折、わざとらしく声を出してうんうんと頷いている。

「ふーん、へえ、ほおほお……えへへ、わかんないや」

弾のつま先から頭頂部までゆっくりじっくりと見ておきながらも、東はダメだこりやと言つて観察を放棄した。それでも豪快に笑っている辺り、東も頭のねじがいくらか外れているのであろう。

間違ふことなく、変人である。

「さてつと。さつきの話の続きをしてくれないかなあ。その『天災』のような存在がどうなったのか、東さんはとっても気になるよ」

「別になんてことはないさ。ちっぽけな世界に退屈していたそいつは、おそらく宇宙を目指したんだろう。だからそのためのツールを作った」

「そうだろ?と、弾は口角を釣り上げて言った。

返事はない。けれど続ける。

「けれど、矮小な世界にばらまかれたそのツールは、本来の用途を外れ兵器になつてしまった。そいつのように世界の外を見るものは存在せず、決められた枠組みで生きることを是としている」

「……そうだね。ISを発表してから数年が経つても、人間は進化しようとしな。救

えないバカばかり」

「救えないバカどもと違つて、アンタは救いを求めたんだろ？ 進化の歩みを止めた人類を昇華させ、同類を作りたかつたんだらう？」

「……そう、だね。そう、だから君に会いに来た。私は仲間が欲しかつた。同類が欲しかつた。停滞を良しとする馬鹿どもとは違う、進化していける人間を。」

君にだつてわかるでしょう？ 人類の枠を超えた君なら、同じ気持ちのはずだよ」

束の言葉を受け、しかし弾は笑つた。自分の本音を笑われて、束は露骨に顔を歪ませ弾に食つて掛かつた。おそらく初めて口にしたであろう、束の根幹ともいえる部分を笑われたのだから当然である。

だがそれすらも、弾にとつては可笑しなことだつた。

「一緒にするなよ。俺とおまえは違うんだ。確かに似ているが、俺とおまえは絶対的に違つている。」

それにな、おまえはそもそも一人じゃないだらうが」

「え……？」

「ただ一人世界を飛び回ることになつたそいつにも、ちゃんと家族はいるし、友人の一人

や二人はいるだろうかよ」

篠ノ之箒という最愛の妹が。

織斑千冬という大切な友人が。

その弟の織斑一夏が。

確かに、存在しているだ。

「忘れてやるな、おまえの宝物だろう」

「ああ、ああ……」

目を見開き絶句している東が、膝を折った。目じりに大粒の涙を浮かべ、月を仰ぐ。

弾はもはや役目は終わったと言わんばかりに、東の横を通りぬけて旅館へと帰って行った。

そうして夜の浜辺に一人になって、東の思いは決壊した。あふれ出る熱さが大粒の涙となつて頬を伝い、やがて海に巻き込まれていく。

東がそうしていたのは、実際のところ一分もなかった。けれどその短い間に東は、彼女なりの、彼女だけの答えを見出し立ち上がった。

目的は達成された。それも、とびっきりの成果を出して。ならばならばここにいる必要はない。今日のことを受けて、明日の計画の必要性が跳ね上がった。直ちに取りかからねばならない。

立ち去る前に、東は弾の帰っていった方向へ目を向けた。

「……なるほど、私と君は確かに違う。君の本質が『それ』ならば、世界のどこにも、あるいは宇宙の彼方を見渡したってないだろうね」

故に。

「君に、はないのか」

この世界において確実に何かが変わったその時に、東の姿は暗闇に消えた。

Rhapsody of the beginning

五反田弾と篠ノ之束が邂逅する少し前。就寝前の自由時間に、篠ノ之箒やセシリア、鈴、シャルロット、ラウラは一夏の部屋に集まっていた。まあ、一夏の部屋と言つてもその本人はいず、同室を使つている千冬に座らせられているのだが。

とうの一夏は汗を流すために風呂に行つてゐる。

「まあ、そう固くなるな。飲み物でも飲むか？」

鬼教官とまで言われる堅物教師の前でいささか緊張している少女たちに苦笑しながら、千冬は備え付けの冷蔵庫から各種飲み物を取出した。そして、少女たちが恐る恐るといった様子でそれを飲んだのを確認し、にっと笑う。

「よしよし、全員飲んだな」

「えっ、何か入っているんですか!？」

「入れるか、馬鹿者」

あまりに的外れなシャルロットの声に再度苦笑し、そのまま自分で持つてきた缶ビールのパルタブを開け、豪快に缶を傾ける千冬を少女たちは呆然として見ていた。

「ん？どうした、何か可笑しなことでもあったか？」

「え、いや、その、教官でもお酒飲まれるのですね」

「当たり前だ。別に油にまみれてオイルを飲んで生活しているわけじゃない」

「ええ、まあ、それはわかりますけど……」

「今は仕事なんじゃ……？」

そうである。生徒が寝静まった深夜ならばいざ知らず、未だ就寝時間も越えていない。これでは職務怠慢だ。

なのだが、当の千冬は酒精が入ったためかほんのりと朱がさした頬を上げ、少女たちが持つている飲み物を指差した。

「口止め料」

「あ……」

ようやく渡された物の意味を理解した少女たちがなるほどと表情を崩した。今のやり取りでそう固くならなくてもよいとわかったのだろう。

「まあ、前座はこれで良いだろう。肝心のことを話そう」

二本目のビールに口をつけ始めた千冬がまじめな顔つきになっていう。効果音をつけるならば（キリツであるが、手に持った缶ビールの所為で全然凜々しくない。

「おまえら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつが誰を指すのか分からないほど、少女たちは鈍くはなかつた。

「あいつ？ 誰のことですか、教官」

一人分からない子がいた。

「……一夏のことだ、ラウラ」

「ああ、なるほど」

「あー、うん。で、どうなんだ？」

「わ、私は別に……あいつが頼りないので」

箒はラムネを傾け、

「あたしは腐れ縁だし……」

鈴はスポーツドリンクの蓋をなぞりながら言った。

「素直じゃないな、まったく。セシリアはどうなんだ？」

「わたくしですか？　そうですね、やはり彼は強いですからね。そこに惹かれたのか
もしれません」

「ああ、それなら私もだな」

セシリアの言葉にラウラが乗った。その顔はどこか誇るようで、一夏の姉をして

いる千冬も少しむずがゆかった。

「ふむ、なんだ、強ければいいのか？」

「いえ、強いというのは惹かれた一因だけですわ。決め手は彼の人となりと言いましようか……」

「一夏は優しいからね」

今度はシャルロットが乗っかってきた。素直になれない幼馴染み二人は置いておくとしても、少しの間のこととはいえ一緒に暮らしていたこともあるシャルロットだ。より深く一夏の人となりに触れていたのだろう。

「その経緯で惚れた、と」

「あう、そ、そうですね……。私を助けてくれたし」

顔を赤くしながらも、シャルロットは答えた。はぐらかすことなく思いを言えるシャルロットをうらやましそうに見る筈と鈴がいたが、それは別の話。

と、そこで鈴が意趣返しとばかりに千冬に質問をぶつけた。

「せ、先生は誰か好きな人とかいないんですか？」

「はあ？ わたしか？」

「ああ、興味ありますわね。実は五反田さんとかですか？」

セシリアの声に、少女たち五人の視線が千冬に集まる。千冬はそれに面食らった顔をして、その後声を上げて笑い出した。

「はははは、何を言うかと思えば、私が？ 五反田をだど？ はははは！」

「その様子じゃ違うみたいですね」

「いやあ、久しぶりにこんなに笑ったよ。悪いがありえないな」

まだ引きずっているのか、千冬は喋りながらも時折体を震わせていた。

「そういえば、夕食のとき見かけませんでしたか、どこにいらっしゃるんでしょうか？」

「ああ、ほっとけ。どうせあいつのことだ。心配するだけ無駄だよ」

「いいんですか、それで……」

「いいんだよ。アイツに何かやばいことが起こるわけないだろ。考えられるか？」
「確かに、想像できませんわね」

五反田弾の身に何か起こることを想像しようとして、けれど到底無理そうだったのでセシリアやリンは苦笑した。あの弾に限ってそんなことはあり得ない。

少女たちの想像を振り払うように千冬が二つ目の缶ビールを飲み干して、乱雑に床に置いた。

「まあ、各々事情はあるんだろうが、あいつと付き合える奴は得だぞ。料理はうまいしマッサージもうまい。どうだ、欲しいか？」

「えっ、くれるんですか!？」

「誰がやるか、馬鹿者め。あいつが欲しいなら奪ってみせろ。自分を磨けよ、乙女たち」
三つ目のビールを開けながら、千冬は悪戯が成功したように無垢に笑った。

臨海学校二日目である。今日からは昨日までのような自由さはなく、ISについてより専門的なことについて扱っていく。今日は午前から夜まで丸一日各種装備試験運用とデータ取りである。

なのであるが、だがしかし。

ラウラの遅刻から始まり篠ノ之束の乱入と、今日の様子はどこか違っていた。というか、その篠ノ之束からして普段の様子を知っている一夏からすれば偽物ではないのか、と疑うほどに物静かだった。いや、決してハイテンションではないということではないのだが、いつもの支離滅裂さがないのだ。

そう思ったのは一夏だけではなく、箒やあの千冬さえも少なからず動揺するほどである。

「箒ちゃん、なにか違和感はない？」

「い、いえ……大丈夫、です」

今も、せっかく専用機を手に入れてその調整中だというのに箒はどこか他人行儀で見ている分にもやりにくかった。

最初は身内だからといって専用機を貰えるのはずるい、とか言っていた幾人かもその

様子を見て気まずさを察したのか、今ではおとなしくなっている。

「借りてきた猫みてえじゃねえか。お株奪われたぜ、鈴？」

「あざといわね、箒……」

一部はいつも通りだった。

「さあ、調整終わったよ！ ちょっと飛んでみて」

「はい」

ふわり、と。

『紅椿』を纏った箒が宙に浮く。そのまま爆発的に加速し、二百メートル上空で滑空し始めた。

その性能に満足そうに頷きながら、束は箒と回線をつないだ。

「どう箒ちゃん？」

「ええ、思ったよりも動きますね」

「やったね！ それじゃあそのまま武器テストに移りましょう、そうしましょう。右の
が『雨月』で左のが『空裂』ね」

言いながら東は空中に指を躍らせ、十六連装ミサイルポッドを呼び出す。粒子が集
まって形成されるのと同じ、一斉射撃が始まった。

「データは送ってあるからわかるよね？ その性能なら楽々できるはずだよ」

言外に東は突破できなければおまえが悪いと言っているのだ。

あのシスコンで有名な篠ノ之東が、こんな挑発的な行動をするとは思わず、一夏と千
冬は東を二度見してしまった。

「やれる、この紅椿なら！」

東がつないでいるオープン・チャネルから箒の音が飛び込んできた。その声には恐怖
や疎みなど欠片もうかがえず、なんとも堂々たるものだ。

その声に違わず、箒は事も無げにミサイルを撃ち落としていった。

「すげえ……」

全てを撃ち落とし、漂う煙を刀で切り払いながら空に立つ箒の姿に、一夏は感嘆を漏らす。

そしてその時、一夏はゆつくりと晴れていく爆煙の中に光を返さぬ漆黒を視た気がした。目を凝らして見るが、そこには何も無い。気のせいかと胸をなでおろし、そこで一夏は隣で虚空を睨みつける弾を見た。

「……」

「弾、どうし——」

「織斑先生！ 大変です！」

突然割り込んできた山田真耶の叫び声に、一夏の声はかき消されてしまった。

いつの間にか地上に戻ってきていた箒や他の生徒の視線が、一気に山田真耶の方へ集まる。いつもならそれにたじろぐだろう真耶は、そのことにも気づかずに慌てていた。

「どうしたんだ、山田先生？」

「こつ、こここれを……つ！」

「特命任務レベルAだと……？」

真耶に渡された書類を見て、千冬は顔色を変える。尋常ではない雰囲気、生徒の誰一人として動ける者はいなかった。

「全員注目！ 現時刻を持って教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館へ戻れ。連絡があるまで各自室内で待機すること。以上だ！」

「え……!?!」

「ちゆ、中止？ どういうことなの……？」

「詳細キボンヌ」

突然の状況に騒がしくなる生徒たちに、千冬の一喝が響き渡る。

「とつとと戻れ！ これは遊びではない！ 以後、許可なく室外に出たものはその身柄

を拘束する。いいな！」

「「は、はいいい！」」

今まで聞いたこともないような千冬の怒号に、生徒たちが飛び跳ねるように動き出した。

「専用機持ちは全員集合しろ！ ……おい、なんで五反田がいないんだ！あと束も！」

「し、知りません！」

「あいつらあ………！ ちつ、まあいい。専用機持ち五人は私と一緒に来い！」

千冬のいらだつた声に恐縮しながら、一夏達専用機持ち五人は旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷、風花の間に移動させられた。照明を落として薄暗くなった室内には、空中投影型ディスプレイが浮かんでいる。

「では、状況を説明する。二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告があつた」

「……………」

全員が全員、一言も発さなかった。一夏と箒は発せなかったといったほうが正しいが、代表候補生たちは事の重大性を確かに理解している。

故に、さらなる状況の理解に努めているのだ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして、五十分後。学園からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおうことになる」

「なっ……………！どうして……………？」

あまりの驚愕に、一夏はつい声を発してしまった。だが、それもしょうがないだろう。本来、この事態は学園なんかに対処するものではないはずだ。それこそ、国際問題に発展するほどの大事にもなりうるのにもかかわらず、なぜIS学園それも一介の生徒が対処するのか。

「仕方ないんだよ、この学園の特性上な。あらゆる国家・組織・団体の介入を許さないという原則が、今回見事に裏目に出てしまった」

千冬が吐き捨てるように言った。

IS学園は、その重要性ゆえあらゆる外部組織の介入を許さない。ということとはつまり、現状のような事態が起きてもその付近に近づけないのである。

これが学園自ら外部からの侵入を許可し主催する行事であればどうとでもなるのだが、それには嚴重な申請が必要なのだ。今、そんな時間はどこにもない。

「かといって封鎖を生徒にさせるわけにもいかない。こういう事態も想定して訓練を受けている専用機持ちが適任なのさ」

「お、俺と箒はそんなん受けてないけど……?」

「……すまない。普通はお前たちが出る幕ではないのは確かだが、今回に限ってそういうわけにもいかないんだ。なにより、人が足りん」

その言葉と共に千冬の顔が曇る。言った本人も納得できていないのだろう。

そこへ、やはりというか疑問が上がった。真剣な様子で問うたのはラウラだ。

「教官、今回に限つてとはどういうことですか？」

「こちらに渡された敵機の詳細データだ。ただし、二カ国の最重要軍事機密ゆえ、口外は決してするなよ」

千冬がそばの教師に合図すると、ディスプレイに様々なデータが表示された。一夏と箒以外はそれを食い入るように見つめている。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動性の両方に特化した機体ね。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから向こうの方が有利……厄介だわ」

「けど、これだけの情報じゃあ……偵察は行えないのですか？」

「無理だ。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロメートルを超える。アプローチは一回が限界だろう」

千冬のアプローチは一回が限界という言葉に、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ

は納得した様子で一夏を見た。

だが、一夏には訳が分からなかった。なぜ一回が限界で一夏になるのか。

「一回きりのチャンス……つまり、交戦と同時に一撃必殺の攻撃力で撃墜するしかない」
「え……？そ、それってまさか」

「あんたにしては察しが良いじゃない。そうよ、あんたの零落白夜しかないってことよ」
はつきりと告げられた鈴の言葉に、一夏は言葉を失った。しかし、思考の止まった一夏を差し置いて、話はどんどん先へと進んでいく。

「アタッカーは一夏さんでいいとして、問題は移動手段ですわね」

「エネルギーは全部攻撃に回さなきゃいけないから、もう一人運搬役がいるってことかな」

「ああ。しかも、目標に追いつける速度でなければならず、超高感度センサを搭載していなければならぬだろうな」

「ちよ、ちよつと待て、本当に俺が行くのか!？」

「……織斑、これは訓練ではない。覚悟がないならば無理強いはしない。その場合、補佐

に回ってもらうことになる。本来は……五反田がいればそれで解決だったんだが」

身を案じるような千冬の声に、一夏はわずかに及び腰になっていた自分を蹴りおこした。

超音速飛行がなんだ。弾はセンサにすら捉えられない速度で向かってくるのだ。

「……できません。俺が、やります！」

「そうか、よし。それでは、織斑を運ぶ手段だが……」

「織斑先生、私が」

そこで名乗りを上げたのは箒だった。『紅椿』のデータを開示し、自ら作戦に参加したいという意を示す。

「篠ノ之、おまえはまだそれを使い始めたばかりなんだぞ」

「スペック上は何も問題ありません。どころか、この中で最も適していると思われるかが」

「……」

箒の言葉に、千冬は眉根を寄せて考え始めた。確かに、箒の言った通りスペック上は問題ないどころか必要なものすべてを高水準で満たしている。だが、今日機体を送られたばかりの人間に任せてもいいものか、と。

その時、重い空気がのしかかるそこに、ころころと妙にメカメカしい人參が転がり込んできた。

「やあやあ、重い空気だねえ。どうしたのかな？ かな？」

「……束」

「はいはい！ みんなの束さんここに参上！」

「どこに行っていたんだ。いや、それより、五反田を見なかったか？」

「うんにゃ。知らないよお」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる束は、どこからどう見ても知っている様子だった。千冬は珍しく声を荒げて束に詰め寄る。

「ふざけて——」

「なんかないよ。言っとくけど、今日の束さんはこれまでに無いぐらい真剣なんだ」

「……」

「……」

しばらくの間、千冬と束は両者共ににらみ合ったまま動かなかった。千冬の本気で胸ぐらをつかまれているにも関わらず、束は大胆不敵に構えている。

数分にも感じる、おさらくは数秒程度の間の後、千冬はゆっくりと束から手を放した。

「……嘘はないようだな」

「もちろん。私は味方だよ」

あつけらかんと言いつ束に、千冬はいかにも慣れてる体で鼻を鳴らした。

「さて、どちらのなか。まあ、いい。調整にはどのくらいかかる?」

「七分」

「よし……作戦は決定した。織斑、篠ノ之両名による対象の撃墜を目的としこれより行動に移る。作戦開始は二十分後。各員、準備にかかれ!」

「了解」

こうして、確かな期待が宿る中『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』撃墜作戦は開始された。

皆が皆、慌ただしく作戦に向けて駆けまわっているのを見て、けれど一夏の中には不安が募っていく。

何かが頭に引つかかっている。箒がやけに自信ありげだったことだろうか。あるいは東の存在か。

けれど、決定的なのは。

仕組まれていると感じること。ただし、それは人為的とかそういうことではなく、もっと大きな、それこそ世界の意思であるかのように感じるのだ。

そうなるべくなくなった運命を体よく使われているかのようで、ひどく不快。

しかし、そんな根拠も何もない感覚を口に出せるわけではない。結局、作戦開始まで一夏は不安を募らせていくことになる。

そして、作戦が始まり。

織斑一夏は台本通りに撃墜された。

「やあ、ちゃんと来てくれたんだね」

「まあな」

一夏達が『銀の福音』についての作戦を立てているのより、少し前。弾は篠ノ之東に呼び出されていた。

「んで？こんなところに呼び出してどうしようっていうんだ」

俺にも緊急収集がかかってんだけど、と。

砂浜から少々離れた磯の、その中でも一際大きな岩に腰をおろしながら、弾は問いかけた。なぜ呼びだされたのか、聞かされてはいないのだ。

しかしとうの呼び出した本人は、頭のうさぎ耳をぴよこぴよこ動かして、まるで「ちよつと買い物行ってきて」とでも言うように軽く両手を合わせているだけである。

「いやあ、たいしたことじゃないんだけど、今君に動かれると厄介なんだよねえ。だから、ここでじつとしててくれないかな？」

「……どういふことだよ」

「なあに、ただいっくんや篝ちゃんを成長させてあげたいだけさ！ 君にとつても悪い話じゃないよね」

「確かにな」

一夏達が成長するというのなら、異論はない。どころか、全面的に協力したつていいくらいだ。

同時に、この緊急事態はその為に仕組まれたのだということも理解したが、弾には些事ではない。

善悪など、関係ない。

だが、『天災』と呼ばれる束ほどの人間が計画することは少々気になる。

「ん？ もしかして、気になるのかい？」

「ああ。これが結構、興味津々だぜ」

「ふうん……」

ほんの少し考え込んだ様子を見せて、束はまあいいか、と呟いた。

「おそらく君は放っておいても理解するだろうしね。まあ、運命に抗うため、とでも言うっておこうかな」

ぴくり、と。

束の言葉を聞いた弾の眉が動揺したように動いた。

「ふん、なるほどね。そりゃあ傑作だぜ」

「君ならそう言うと思ってたよ。とりあえず、これは今私を見過ごしてくれるお礼」

束は懐から奇怪な形をした端子を取り出すと、それをぽいっと弾へ放り投げた。見事な放物線をなぞって綺麗に弾の手に納まった端子に、弾は首を傾げる。

「なんだ、コレ？」

「ISとその操縦者をつなげる為のツールだよ。待機状態のISと操縦者の間に『道』を

作って相互リンクさせることによって両者の意識、あるいは感覚を共有できる」
「……あ？」

「簡単に言えば、ISと会話できるんだよ。まあ、こればかりは体験した方が早いね」

未だどういうものか理解できずに、弾は束に言われるがままに端子を『ブラッディ・ロード』の待機状態である刺青に貼り付け、さらに自身の首裏にも付ける。

パチツ、と火花が跳んだような音がして。

「おやすみなさい。いい夢を」

につこりと笑う束を見ながら、弾の意識は闇に沈んだ。

S a n c t u s

五反田彈の意識が浮上する。

気づけば、天空。空の上、もう少しで雲にすら届きそうなその場所とも言えぬ所に、弾はたっていた。

眼下に建ち並ぶ高層建築物や道路に停まる車。見慣れた、普通の街並み。

その全てが灰色に固まったままで、人の影すら見せない。

いや、人影ならあった。弾の目の前に。

豪華な黒いドレスを来た、真紅の髪を持つ美女がいた。

「意味わかんねーぞ、おい……」

おそらくここに来る前に付けた端子が原因であるので、その作成者である束に毒づく。

沈黙。

目の前にいる美女はただ目を閉じ、よくできた彫刻なのではないかと疑わせる程に動

かない。

『同期完了』

そんな美女の声が聞こえたのは、それからしばらくしてだった。突然のことに狼狽する弾の前で、ゆつくりとまぶたが開いていく。

その瞳は、綺麗な朱。

「邂逅。はじめまして、と言った方がいいでしょうね。マイ・ロード」

美しい、まるで唄っているような声で、美女は弾のことを『我が君（マイ・ロード）』と呼んだ。

そして、悟る。

「おまえ、『ブラッディ・ロード』か……？」

「肯定。そのとおり、私は貴方のISです」

さすがの弾もこれには絶句させられた。まさか普段ぞんざいに扱っていた道具が、こんな凜とした美人になると誰が想像しただろうか。

乾いた笑いすらもでて来ない。おそらく生まれて初めて、弾は頬を引きつらせていた。

「くそつたれ……ますます意味がわかんねえ。わかんねえが、とりあえず、ここはどこだ？」

「回答。ここは貴方と私の意識を同調させ、『会話』させるための精神世界」

「精神世界だと？」

「肯定。貴方の心中を元に、構成された世界です。つまり、ここは貴方の心そのもの」
「俺の、心……」

もう一度、弾は周囲を見渡した。なんてことは無い、海に面した普通の街並みだ。遠くには水平線が見え、そして地平線も同様に。

平凡といえば平凡だ。総てが灰を被り、色褪せている。

これが『魔人』と呼ばれた弾の心中の風景だとは、なんというか、弾自身興醒めである。

「俺のことだから、もつと傲慢なモンだと思っていたが……」

「驚愕。これが傲慢でないと？ まったく、貴方はもはや暴君を通り越していますね」
「はっ。」

言われたことの意味がわからず、弾は怪訝な声をあげた。ただの町の風景のどこに傲慢さがあるというのだろうか。

「回答。遥か高みから下界を見下ろし、その果てまでもが自らの手の上。そのどこが傲慢でないと？」

「ああ、そういうことね……」

なるほどそう考えれば確かに傲慢だ。なにせ世界そのものを跪かせているに等しいのだから。

だからといって弾の何かが変わるものではない。世界が自分より下にあるなど、とうの昔に知っている。

ただ、少し物悲しくなった。

「それで？」

「疑問。それで、とはなんででしょうか」

「いや、せっかく話す機会ができたんだから、なにか話題ねえの？」

「否定。話題など、こうして貴方と合間見えることができただけで御の字なのです。それ以上は望むべくもありません、が。貴方が求めているというのなら、一つ答えていた
だきたい」

「ん、おう。いいぜ、なんでもきけよ」

「感謝。それでは、あなたにとって私とはどういう存在なのですか？」

弾にとって『ブラッディ・ロード』とはどういう存在か。またずいぶんと哲学的な質問が飛んできたものだ。腐っても機械だろうに。

そして、何かを期待しているのなら裏切られることになる。なぜならば、弾にとって『ブラッディ・ロード』とはただの道具であり、言ってみれば玩具である。

玩具に玩具以上の特別な感情を抱くか？ そんなわけはない。

結局、弾にとってはその程度の存在である。あるいは、この傲慢な思考こそがこの孤独な世界を確立させているのかもしれないが。

故に、どういう存在かと問われれば答えることは一つ。

「……別に、何も。おまえはただそこにあるだけだろう」

「……ッ」

弾の答えを聞き、黒衣の美女は苦痛から耐えるように唇をかんだ。

その仕草に弾は違和感を覚える。今まで動きのなかった『ブラッディ・ロード』に動作が生まれているのだ。いや、動作だけではない。表情や口調にも変化が生じている。

機械的なそれらより、より人間らしく。

進化、あるいは成長している。

「……私では、だめなのでしょうか？」

「はあ？ ダメって何の話だよ」

「貴方を守るどころか、力を出す妨げになるような枷は貴方と共にあることすら許されないのですか!？」

豪華なドレスを握りしめ、顔を俯けてしまった『ブラッディ・ロード』は泣くのを堪

えているようだった。

弾にとつて、ISとは枷でしかない。弾の全力駆動には、いくらISだろうとも耐えきれないのだ。生まれてこの方全力など発揮する場所も機会もなかった弾だが、その圧倒的なセンスと超能力じみた第六感からそうなるだろうことはわかる。

弾の一部として存在していた『ブラッディ・ロード』がそれを理解していたとしてもまだ納得できるが、許されるとか許されないというのは流石に話が飛躍しすぎだろう。

「話が飛び過ぎだ……いったん落ち着け」

「貴方は何も思っていないかった。つまりそれは、いてもいなくても同じ——いえ、不具合がある分だけ私は不要な存在ということなのでしょう!？」

「おい、落ちっ——」

「落ち着け? 落ち着けてなんですか? 私は貴方と一緒にいた。だから分かる! 貴方が何を望んでいるのかも、貴方がどういうモノであるかも。全部、全部わかってるんです……」

血盟の王の独白は続く。

「今、私と貴方の意識はリンクしています。それに伴い、あなたの記憶や思考がこちらに流出している」

「……俺は何も感じないぞ」

「それはそうでしょう。だって貴方は、私に何も感じていないのですから。貴方にとつて私はちつぽけすぎで認識する必要すらないのですから」

「……」

「流出によつて、私は貴方の総てを理解している。貴方の予測しているこれから起こるであろうことも、それによつてどうなるかということも総て理解しています」

「……だから?」

「だから、私が要らないということも理解しているのですよ。今まで貴方が全力でなかったから保たれていた私の価値が全て消える。アレは貴方といえど全力でなければならぬ。そして私は、それに耐えることができない」

貴方を守ることができない、と『ブラッディ・ロード』はついに涙腺を決壊させ、大粒の涙を流し始めた。

アレが相手ならば、弾は全力を出せねばならない。これは確定事項だ。世界という意思が弾という異分子を認めずに排除するならばアレは最適。だが、弾はいそうですか

と除けられる理由はない。

そしてその来たるべき戦いに、血盟の王たる力は及ばない。従属を誓った主を守ることはできない、ただ壊れていくだけの役立たずである。

しかし弾は、それを一笑に付した。

「馬鹿言え。何時誰が、守って欲しいなんて言ったよ。おまえは勝手に纏われて、自分のことだけ考えていればいいんだよ」

「そ、そんな……それこそ、私のいる意味がないじゃないですか！」

「たく、どいつもこいつも頭が堅え……」

自分の思う通りにすればいいのだ。他人を気にしてどうするとか。縮こまって閉じこもるつもりか？ 冗談じゃない。

いつかだったか、傀儡を思わせる少女にも話したことがある。

「おまえの価値は俺が決める」

要らないかどうかは弾の決めることだ。価値は、存在がその存在自体につけるもので

はない。

殻に籠るなら破ればいい。引きずり出して立たせればいい。それでも歩けないのなら、ほんの少しだけ後押ししてやろう。

「おまえは俺と行きたいんだろう？　なら、考えるな。黙って俺について来い」

「……ッはい、貴方と共に」

力強い返答と共に、モノクロームに染まった世界に罅が入っていく。時間切れ、ということだろう。繋いがかれ一つになっていた意識が乖離を始める。

徐々に薄くなっていく視界の中は、ほんの少しだけ色づいたような気がした。

〈 1

「……」

静寂に包まれた旅館の一室。箒の目の前で、箒を庇って撃墜された一夏はかれこれ三時間も目を覚まさない。

『銀の福音』との戦いの最中にリボンを失ったせいで、なすがままに垂れる黒髪が、まるで今の箒自身を表しているようであった。

自分のせいだ、と自分を責め続けても、一夏が目を覚ますことはない。けれどそれでも、自責の念を抱かずにはいられないのだ。

あの時。

一夏を乗せて箒は飛んだ。目標との接触は至極簡単に達成され、後は撃墜するのみだったはずだ。

明暗を分けたのは、その瞬間だろう。

近隣に発布されていた退去命令を無視した密漁船を箒は見捨て、一夏は助けようとした。

エネルギーが底をつき海へと落ちていく箒の視界にあったのは、迫る光弾とそれから身を挺して守ってくれる一夏の姿。

そんな時でも、一夏は笑っていた。だが、その笑顔も今は見る事ができない。熱波に焼かれた彼はただ力なく横たわっている。

自律のために剣の道を志したはずだった。力に吞まれやすい己を正すために剣を振ってきたというのに。

これまででしっかりと塗り固めてきた枷は、ただの泥の塊であったのだ。

「私は、もう……」

ISには乗らない、と言おうとしたところで突然ドアが乱暴に開かれた。

「ああああ、わっかかりやすいわねえアンタ」

失意にくれる箒へと不躰に飛んでくる言の刃。拳を握りしめうなだれる箒は、振り向かなくても誰か分かっていた。

こんなことを言うのは一人しかないない。

鈴である。

「アンタのせいで、とは言わないわよ。言っても仕方ないしね。ただ、それで立ち上がるうとしないのが気に食わない。やるべきことがあるでしょう」

「私は……もうISには……」

「ふざけんなッ！」

部屋が揺れたかと思うほどの一喝が響いた。そのまま箒は圧倒的に身長の高い鈴に胸ぐらをつかまれて部屋の隅に投げ飛ばされる。

「ぐう……ッ！」

「甘ったれるんじゃないわよッ！ 自分でやるつて言っておいて、失敗したから止めますなんて都合のいいこと夢想してんじやねえッ！」

「うあ……」

「責任があんよ、ISあたしたち操縦者にはッ！ 果たすべき責任と、負うべき義務がある！ 戦いを投げ出すなんて許されないのよおッ！」

鈴の瞳が、箒の心を捉えた。まっすぐな闘志が、怒りに似た赤い感情がある。

それは火となり、くすぶっていた箒にすら火をつける。

「どうしろと言うんだ！ もう敵の居所もわからない！ 戦えるなら、私だつて戦うツ！」

それは偽らざる箒の本音だった。戦えるならば戦う。良くも悪くも箒の芯は真っ直

ぐなのだ。

そしてその言葉こそが、鈴が箒から引き出したかった言葉である。

「心配はいらないわ。今ラウラが索敵を——」

「完了したぞ」

開け放たれたままになっていたドアから銀の兎が顔を出した。その隣にはシャルロットがいる。

「えっ？ えっ？！」

急な展開についてこれない箒を置いて、ラウラは結果を報告する。

「ここから三十キロメートル離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだな。衛星による目視で発見したぞ」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「こんな特殊な状況でもなければ使えんがな」

「ボクの方のパッケージのインストールも完了してるよ」

鈴とラウラ、シャルロットは戦闘準備を着々と進めていく。

と、そこへまたもやドアから人が入ってくる。

セシリアと、一緒に連れられてきたのは弾だった。

「ちよつと聞いてくださいませんこと？　弾さんつたらこの緊急時に浜で寝ていたんですのよ？」

「五反田さん……」

「うわ、ひどっ」

「悪かったって言ってるんだろ。あんまいじめんな。泣くぞオラ」

やれやれと首を振って、弾はため息を一つついた。その体はいつもと変わらないが、纏う雰囲気は戦闘直前の触れれば爆発しそうなそれだ。

鈴がにやりと笑んで、いまだついてこれてない箒の方を向いた。

「ほら、いつまで呆けてんのよ。これから、仇討ちの始まりよ？」

「あ……」

その一言でようやく状況を察した箒は、いくばくかの逡巡の後ついに立ち上がる。

「それじゃあ、一夏の弔い合戦よ。気合入れていきなさい」

「……一夏は死んでないがな」

まあ、意気込みはそれということだ。

ここに、サムライ士が立つ。

〈〈 2

『……………』

海上二百メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まるで胎児のようにならずにまつている。膝を抱くように丸めた体を守るように、頭部から伸びた翼が包む。

そんな『銀の福音』がピクリ、と反応した。

瞬時にブースターをふかし、上方へと飛んだ。

そのすぐ後に、いくらISであろうとも直撃すれば撃墜は免れない、ばかげた風の塊が過ぎ去っていく。それは『銀の福音』を超えて海に着弾し、轟音を上げ巨大な水柱を立てた。

拳圧である。それも、ハイパーセンサを使用しても確認できないほどの距離から放たれたもの。

さらに、二発。拳圧ではない、高威力を誇るものの逸脱してはいない普通の砲弾だ。だが、大雑把に放たれた拳圧とは違い、確実に当ててきている。つまりはこれこそが本命なのだ。

拳圧を回避した直後で硬直していた『銀の福音』は裂けることができずに被弾し、砲弾は着弾地点で爆発を引き起こした。

五キロ離れた地点より狙撃に成功したラウラの持つている、というよりは担いでいる二門の大型レールカノンの名は『パンツァー・リッター』。長い砲身と極端な重量、そして高火力が特徴の試験兵器である。

「着弾を確認！ 一気に入たみかけるわよッ！」

その言葉と共に、『銀の福音』の上空から二機のI Sが舞い降りた。長大な斧と二振り
の刀を持って顕現した戦乙女が、まさに舞うように怒涛の攻撃を繰り広げていく。
その空隙を縫うようにして青の閃光が奔る。

「申し訳ありませんが、今宵の舞踏会は最初からクライマックスですわ!」

ビットより放射状に撃たれた青い光が常識では考えられぬような起動で『銀の福音』
に襲い掛かった。

当然、それを避けようとする『銀の福音』だが、回避のために移動した先ではすでに
パイルバンカー『撃杭乙女』ビロティ・ラ・ツイエルジュを構えているシャルロットが回り込んでいた。

「おおおらアアアアアッ!」

爆碎。

おそらく単発威力ならここにいる専用機持ち五人の中でも抜きんでている一撃が、一
切の手加減なく『銀の福音』の腹へと叩き込まれた。破壊された装甲をまき散らしなが
ら、大きく吹き飛んでいった『銀の福音』は、やがてゆつくりと落ちていく。

「うひやあ、すつごいわね」

「ああ……確かにすごいが、確実に五反田の影響を受けてるな……」

「え、そうかなあ？ ボクとしてはそんなつもりなかったんだけど……そんなにだった？」

「ええ、確実に……で、その弾は？」

鈴が問うのと同時に、ラウラから通信が入ってくる。

『こちらラウラ・ボーデヴィツヒ。これよりそちらに合流する』

「ああ、ラウラ、丁度良かった。弾知らない？」

『五反田？ あいつなら最初の一撃の後優雅に歩いて行つたぞ』

「海の上をか……とことん非常識ね。というか、ラウラアンタ声に棘があるわね？」

『……五反田は苦手だ』

拗ねたようにいうラウラは、どうやら転校早々の事件を根に持っているようだった。まあ、普通あんなことされればトラウマものなのだから、軽い症状だとも言えるだろう。

緊張が緩まったその時だった。

『……l a a, l a, l l l l l l l l l l u l u g g g g i i i i i i i i ツ!』

落ちていったはずの『銀の福音』が青い雷を纏って咆哮を上げる。

胎児のようにうずくまっている様子も合わさって、まるで産声のようであった。そしてそれは、間違っていないのだ。

「これは、まさか!？」

『『セカンド・シフト』
第二形態移行……!』

まるでさなぎから蝶になるようにゆっくりと形成されていったのは光の翼。それ自体が莫大なエネルギーの塊である銀の光翼。

それが、爆発した。

「くう……ッ!」

「キヤアアアア!」

四方八方に撃ちだされた無数のエネルギー弾に襲われ、鈴や箒たちは思いつきり吹き飛ばされた。あわてて体制を整え反撃に移ろうとするが、光翼より撃ちだされる弾幕がそれを許さない。

「おおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

そこに飛来したのは銀髪の兎。ラウラ・ボーデヴィツヒ。

『銀の福音』の不意をつきプラズマを纏った手刀で切りかかるが、さきほどまでとは比べ物にならない速さでもって躲され、逆に光弾を叩き付けられてしまう。

だが、それでも箒たちは動けるようになった。

「大丈夫、ラウラ!？」

「ああ、私は大丈夫だ……」

「やってくれるじゃない……!」

「覚悟しろ!」

鈴と箒が飛び出し、セシリアがそれを援護する。シャルロットとラウラは回り込んで『銀の福音』の移動を阻害し、隙をついて攻撃に移る。

『銀の福音』が第二波となる光弾を打ち出す。それは突如発生した巨大な水柱にかき消された。

こんなことができるのは一人しかいない。笑い声のみが虚空を伝わって響いている。

「ハッハア！ おもしれえことになってんじゃねえか」

もちろん、弾である。三キロ離れた場所から、衝撃を任意の場所へと伝えて水柱を生み出したのである。

「俺はゆっくりいつからよお、気合入れてぶん殴つとけ」

「ああー！」

「任せなさいー！」

弾の鼓舞を受け、少女たちは攻勢に出る。箒が切りかかり、鈴が時間差でさらに切る。セシリアが攪乱し、シャルロットとラウラが臨機応変に追い詰めていく。形勢はゆっくり

ばこうはならなかっただろうが、時すでに遅し。

全員が全員、光弾を至近距離で受けて吹き飛ばされた。

光弾は一つではない。無数の光弾が立て続けに直撃し、ついにI Sのエネルギーとシールドバリアが棄権域まで到達する。

満身創痍の箒を『銀の福音』が掴みあげる。

「うあ……」

抵抗もできずに持ち上げられ、箒は呻くしかできなかつた。視界のなかでゆつくりと広がっていく光翼が、あまりにも残酷で無慈悲だった。

翼がエネルギー弾として構成されていく。

「二夏……」

光弾が発射される直前につぶやいた人の名は、誰よりも愛しい人のもの。死を前に思いつくのは、今まで過ごしてきた幸せな日々だった。

ゆつくりと瞼を閉じながら、箒はもう一度呟いた。

「一夏……」

「おう」

名を呼べば、彼はいつも答えてくれた。今のように。

……今のようにな？

閉じかけた目を、強引に開いた。

目前に迫る光弾が、総て切り刻まれて消えていった。そして、箒を掴む『銀の福音』の腕を切り落とすように刃が通る。

『銀の福音』は予想だにしていなかった脅威に即座に反応、攻勢から一転。過剰とも言えるほどに距離を取った。

「ああ……」

抱きとめられた箒は泣きそうになるのをぐつとこらえ、あらんかぎりに叫んだ。視界いっぱいに移る、愛しいその人の名を。

「一夏あつ！」

「おう」

〈 3

綺麗に澄んだ粒子を身に纏い、織斑一夏はそこにいた。

その姿はかつてとは違い、曲線を描く流麗なもの。分厚い鎧を思わせた装甲はスマー
トに、身体を沿う様に展開されている。背中についているブースターは、フィン状の
ビットがが幾重にも重なり翼のようで、一夏の身体を覆っている粒子はそこから発生し
ていた。

『白式・六花』。それが『白式』が進化した姿である。

しかし、何より目を引く変化は手に持つ得物。

刀、といえばいいだろう。だが、違う。

柄がある。柄糸が巻かれていれば鐔もある。そこまでは普通の日本刀の造形をして
いるが、刃は違った。

長さや幅はいいが、その重厚さは刃とは呼べぬだろう。長方形の物体を柄にくっつけ
たと言われれば納得してしまえるほどに、それは重厚だった。

「一夏……本当に、一夏なんだな？」

「ああ、箒。俺が織斑一夏以外に見えるかよ」

格好つけたようにニヒルに笑いながら、一夏は周囲を見渡した。誰も彼も満身創痍と言った風体だが、一人も欠けてはいないことに安堵する。

「一夏、アンタ傷は大丈夫なの？」

「そうですね。あれほどの怪我ですもの、無理はいけません！」

「大丈夫だって。心配するなよ」

もつともな問いに、一夏はやせ我慢などではなく本当に大丈夫だということを伝えるために、装甲を一部解いた。

そこにあつたのは、至って健康な身体。熱波で焼けた肌も何もなく、正常なものだ。

「ホントに治ってるね……」

「信じられん。どういふことなんだ？」

シャルロットが感嘆の声を上げ、ラウラが首をひねった。

おそらくは、とうるかそんなものが有るかは知らないが、『白式』に自動修復機能でもついていたのだろう。そう納得しておく。

と、そこで下から声がかかった。いつのまに來たのか、弾である。

「よお、一夏。元氣そうだなによりだ」

「おう、弾。いきなりで悪いんだが、あいつを俺にくれよ」

およそ数百メートルは離れている『銀の福音』に刀を向けながら、一夏は海水面に立つ弾に言った。

「もとよりそのつもりだ。今の主役はおまえだぜ」

勢いよく啖呵をきつた一夏を嘲笑うこともなく、弾は全ての事情を知っているかの如くあつさりと身を引く。

それを確認して、一夏は『銀の福音』に向けている刀の切っ先を上へ上げ、八双の構

えをとった。

『銀の福音』は突如現れた敵に戸惑っているのかいないのか、身体を守るように光翼を展開し、一夏を観察している。一見無防備ではあるが、どんな状況でも攻撃に転じることのできる光翼が曲者だ。どうにかして全方位攻撃への対策をとらねば、近づくことすら困難。

だが、今の一夏にとっては関係ない。自身の誓ったものに賭けて、ただ斬り伏せるのみである。

何よりも速く駆け抜けて。

疾走の先にある斬撃を放つのだ。

「――」

呼吸の読み合いをするでもなく、一夏は動いた。本来であれば、それは愚策。全方位攻撃という防御に優れた機能を持つ『銀の福音』は、明らかに後の先をとるタイプである。それに真正面から突っ込むなど、馬鹿のすることだ。

だがしかし、この馬鹿は馬鹿であつても突き抜けた馬鹿である。故、思考は至極単純で短絡的なものとなる。

すなはち、動く前に斬る。

まさしく一瞬。粒子を散らしながら、反応する時間をも与えずに『銀の福音』の眼前へと躍り出た一夏は、その手に持つ無骨な得物を振り下ろした。

確かな手応えと共に『銀の福音』が下に落ちていくのを、一夏は追撃することもなく眺める。

余裕はあるのだろうか、決して慢心ではない。次の攻撃につなげるために集中しているのだ。

今度は切っ先を相手に、腰だめで構える。

『I a、I a……』

空中で態勢を整えた『銀の福音』は、光翼を膨大な数のエネルギー弾に変化、射出させ、普通では考えられぬような複雑な軌道でもって得意の中距離へと駆けた。

だが、無駄。

無数のエネルギー弾を縫うようにして、あるいは切り裂いて、瞬時に距離を詰めた一夏が突きを放つ。

水面に映る月を穿つような、静かで力強い一撃。

それを間一髪、上体をそらすことによつて躲した『銀の福音』は、そのまま直接一夏にエネルギー弾をぶち当てようと光翼を広げ始めた。

『lie……llaa』

「させるかよッ！」

迎え撃つのは一夏の青白く澄んだ粒子。時の変化によつて色が流転していく、オーロラを思わせる光である。

まず、光翼が斬れた。

一夏が得物を振る度に、そこ以外の場所も斬れていく。剣に気乗せて斬撃を飛ばしているわけでもない。だが、斬れる。

爆発的に空間を支配していくエネルギーの塊が、やがて澄んだ光の粒子を残して徐々に消えていった。

『kiiii……llie』

絶対的に不利を悟った『銀の福音』が距離をとろうとする。だが、一夏はそれを許さ

ずに強引に体を掴んで引き寄せ、渾身の頭突きを見舞った。

ゴツ、と鈍い音を響かせて、『銀の福音』の態勢が崩れる。そこへ一閃。超速の閃きが首を狩らんと疾走した。

『i i e e g i l i i l a a a a a a !』

「チツ……!」

『銀の福音』の怒号と共に、今にも喰いきられそうであった光翼が粒子を押し返し、逆に押しつぶそうとぶつかってくる。

銀の光翼と、夢幻の如き粒子が真つ向から衝突し合い、莫大なエネルギーを撒き散らしながら大爆発を起こした。

「ツくう……!」

「ちよつと、なにコレ……!?!」

その爆発の衝撃は、戦闘で相当離れた箒達をも吹き飛ばさんとするほど。当然、爆心地直下の海水も吹きとばされ津波となる。

「えっ……っ？」

困惑の声は、誰のものだったか。

目の前で盛大に迫ってきた津波が斬れた。無数の斬線が海を分割し、そして鎮めていく。

「面白いだろう？」

銀と不可思議な光が晴れた中に、一夏は佇んでいた。新たに生成された粒子は、一夏が手に持つつ刀を取り囲むように螺旋を描いている。

「この粒子の名は『六花』。新しい俺の機体と同じ名を持っている」

とうとうと語りながら、一夏は刀を一閃。

同時に、撒き散らされた粒子が斬撃となって虚空を斬り刻んだ。

「能力は斬撃変換。俺の振るうこの『天音雪片』に反応して、破壊エネルギーを斬撃として確立させる」

無骨な刀、『天音雪片』の刀身に当たる部分を左手で逆手に持ち腰に構え、右手を柄にそえる。

間違うことなき、居合いの構え。

その時、『天音雪片』に変化が起きた。鍔と刀身が触れ合っている部分に、隙間が生まれたのだ。

ほんの少しだけ開いた隙間から覗くのは、幾つもの輝きを放つ細身の刃。『天音雪片』の真の刀身である。

そもそも、あんな無骨な塊を刀とは言わない。

つまり、一夏が今まで使っていたのは鞘であるということ。

「今、粒子はこの付近に十二分に散布されている。その粒子の一つ一つが、俺の最大斬撃だ」

『銀の福音』を目として、粒子が嵐を作る。無情にも取り込まれてしまった存在は、もは

それは凱歌。生きていくということ存分に吐き出し、戦ったことを証明する歌。

——けれど空は知っている

——その輝きを

——かの地にて今現れん

そして、吼える。

「極光——刹那アアツツツ!!」

無限斬撃の嵐を断ち切り、救いをもたらす破壊を込められた閃き。

刹那の瞬間、圧倒的な速度で生み出された百を超える斬撃が束ねられ、一撃として昇華された究極の一閃。

リン、と。

総ての音を塗りつぶして、澄んだ音だけが辺りに響いた。

やがて、極光色の嵐は止み、一夏はいつの間にか『銀の福音』の後ろで『天音雪片』を納刀していた。

「――」

ゆらりと姿勢を戻す一夏の後ろで、『銀の福音』は一度空に手を伸ばして――そして落ちていった。

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

落ちる『銀の福音』をなんとか受け止め、弾を除く皆は一目散に一夏の下へ駆け寄っていく。ちなみに、強制終了した『銀の福音』、その操縦者を受け止めたのは弾である。

「おう。みんな大丈夫か?」

「大丈夫かってアンタ……」

「無茶苦茶ここに極まれり、ですわ」

和気藹々といった様子で、戦闘時の緊張した雰囲気ではなくいつもの和やかさへと変

わっていく。

ふと、シャルロットが空を見上げた。

「やっぱり、綺麗な光だよね」

「そうだな。さすがは嫁だ」

ラウラが誇らしげにつぶやく。苦笑しながら、箒も粒子の舞う空を見上げた。

「嫁かどうかはともかく、確かに綺麗だな……」

「でも、こんなに綺麗なのに能力としてはえぐいわよねえ」

「はっははは！ いいじゃねえか、別によ。ああ、これで良いんだ……」

鈴の呆れたような言葉を弾は笑い飛ばした。だが、その言葉と表情はだんだんと引き締められていく。

あからさまに不自然な様子の弾に、一夏は戸惑う。

「弾……？」

「こいつ頼むわ」

弾は抱えていた『銀の福音』の操縦者を、なかば押し付けるように一夏へ渡した。一夏も一夏で、つい反射的に受け取ってしまう。

そして、弾は空を見上げた。

粒子が舞う夕焼けに混じる、漆黒よりもお黒き人型を睨みつける。

「おまえら、このまま旅館に戻れ」

「はあっ!？」

弾の横暴な言い方に、一夏は素っ頓狂な声を上げた。箒や鈴達としても、状況が分からずに困惑している。

「つべこべ言つてんじゃねえ。邪魔だ」

瞬間、一夏達六人は問答無用で吹きとばされた。それが弾が一夏達を帰らせる為だったのと、黒の攻撃を回避させる為だったと気づいたのは、すでに戦闘領域をはるか超え

た辺りまで飛ばされた時であった。

「くそお……ッ！」

あの弾がそれほどまでの事をしなければいけなかった事実には、身体の震えが止まらない。悔しさに毒づきながら、一夏達は後ろ髪を引かれる思いで退却を決意した。

それを見届け、弾は再び黒に向き直る。

弾と比べれば髪の毛は短く、あまり手入れはされておらずボサボサだ。そういえば前の頃は面倒臭がつて床屋なり美容室に行くことはなかったから、適当に自分で切っていたのだったか。

細部までは分からないので断定はできないが、身につけているのは恐らく最期に着ていた服だろう。

こうして見ればよく分かる。そして懐かしい。
なぜならば。

「さあ、決着をつけようか。——
■^オ
■
■^レ
■
■」

黒は世界の抑止力によって生み出された、前世の弾そのものなのだから。

D y e d r e d r e q u i e m

世界には意思というものが存在している。

それは進化を促していく成長意思。

それは現状を保とうとする保護意思。

そして、邪魔なものを排除する破壊意思である。

これらがバランスを司り、生物と世界の間媒介し均衡を保っている。これを人間的にとらえて生み出されたのが神という偶像。

創造神であり、破壊神であるのが世界意思というものだ。

ある時、この世界意思が見過ごすことのできない化け物が発生した。

あまりに異常。あまりに異質。

当然、化け物は邪魔なものだと認識され破壊意思が働いた。

だが、あろうことかその化け物は世界規模の破壊意思を受けて尚、すぐには消えなかつた。

十五年。それだけの年月をかけてようやく、世界は化け物を自滅という結末へと追いやることができた。あとは輪廻に加わる前のむき出しの魂を消し飛ばし、二度と生まれ

出ることができないようにするだけ。

そのはずだったのだが、化け物の魂は消えなかった。

溢れ出る『何か』への渴望が、破壊意思を凌駕したのである。

消えなかった魂はシステムの通りに世界意思が介入できない輪廻に組み込まれ、次へと行つた。このとき、あまりの魂の強度に通常輪廻の中で洗浄される前の記憶が無くならなかったのは、やはりそれが化け物であつたという証左か。

ともかく、化け物はまんまと世界意思に邪魔されることなく次の生を得たのである。

だが、世界意思は化け物の存在を認めない。また同じく十五年かけてでも化け物を排除し、今度こそは魂まで消し飛ばすと思考する。

だが、世界意思という外部からの接触では排除しきれなかった。けれど、自滅では前の二の舞になるかもしれない。ならば、外部接触が自滅という形であればどうであろう。

つまり、外部から自分で死ぬ。

その為に、世界はかつての化け物の残滓をかき集め、意思をなくして足りない分の力を補つてやって傀儡として形成する。

元々、その時間軸のものではない故に馴染むまで顕現することは難しいだろうが、化け物が運命に関わってくれば大いなる意思が働き、その間は存在できる。そこで殺せれ

ば僥倖。できなくとも、馴染み切れれば顕現し続けることができる。その時に排除でき
る。

なにせ、同じ存在だ。どうあつても、相打つ結果にしなければならない。

これで完璧。

かくして黒は生まれ。

奇しくも前世で弾が自滅した十五年という年月をかけこの世界に定着し、化け物であ
る弾を排除しようと彼の前に立ちはだかったのである。

∨
∨
1

握られた拳が、空を切る。

まるで隕石が落ちたかのように眼下の海に大穴が空くが、肝心の黒には当たらなかつ
た。いや、当たらなかつたというよりは、攻撃をそらされたと言った方が正しい。

横の軌道は、上からの干渉に弱い。弾の腕は、黒に上から払われたことによつて狙い
をそれたのだ。

直後、弾の拳を払った黒の手が、星の如き重さで飛来した。

下からえぐる様なアッパーカット。

弾は上半身をそらして紙一重でそれを避け、反動をつけて渾身の頭突きを見舞う。

人体が出したとは到底思え重厚な打撃音が響き、黒が未だふさがり様子のない海の穴に落下して行つた。

弾の頭は冴えきっている。

故に、黒がまだ存在していることはわかつていた。そもそも、黒は弾自身であるのだから、これぐらいでくたばるわけがないのは当たり前だ。

今のは体をほぐす為の準備運動。以前の、最も強い時の自分へと戻る為の前段階。

弾も黒も、まだまだ程遠い。互いのギアは上がり続けるのだ。どこまでも。

そして弾は、生を受けてから始めて、全力で拳を握つて構えた。

「オオラアツ！」

前触れはなかった。だが、目の前に突如現れた黒に慌てることもなく、弾は知つていたかの様に黒を殴つた。

だが、その一撃は黒の片手で止められている。衝撃波だけが空間を伝播し、空間を揺らした。

弾は掴まれた腕をそのままに、むしろ逆にそれを利用して黒を引き寄せて蹴りを放つ

た。黒の脇腹に食い込んだ脚が僅かに痺れたが、力に任せて吹き飛ばす。

黒の体が蹴りに負けて折れるが、掴んでいた弾の腕に自分を絡めてまとめ吹き飛ばす。

嫌な予感がした。グルグルと回る視界の中で黒を引き剥がそうと躍起になるが、絡みついた黒は生半可なことでは動じない。

およそ数キロメートルは吹き飛んだ先で、黒は回転の勢いを利用し、そして絡みつけた自身の体をバネにして弾の体を海の中に叩き落とした。

盛大な水柱を立てて弾の体は海中を落ちて行き、ついには海底にクレーターを作ることでようやく勢いが止まった。巨大なクレーターの中心に埋まりながら、弾は遥か上空の黒を睨みつける。

黒が両腕をこちらに突き出しているのが見えた。瞬間、弾は見えない何かに押し付けられた様にクレーターに沈んだ。

空砲。弾によって生み出された、人外の技術。瞬間的な発動ではなく、永続的にかけられているそのせいで、弾の体は徐々に海底に埋まっていく。

それに抗い、弾は体を起こした。海の底で二本の足で立ちあがり、腕を振って流れを作る。

螺旋を描く様に、周囲の海水をことごとく巻き込んで形成されたのは巨大な渦潮だつ

た。

弾は渦によって中心に集められた海水を掴む。ただ掴むのではなく、圧縮をかけるようにしてだ。

出し惜しみはしない。

「――！」

射出。

渦一つが槍となつて超高速で飛んで行つた。黒はそれをギリギリで避けたが、それで終わりではない。

超高速で投げられた水は、空気との摩擦によって気体を通り越してプラズマへと昇華。膨大な熱が空間を焼き、黒の動きが止まった。

二発目の水槍が黒を貫く。大きく吹き飛んだ黒に、続けて四発。計五発もの水槍が黒に直撃した。

吹き飛んだ黒は、もはや対流圏をやすやすと越え、成層圏の中頃にまで追いやられていた。光を返さぬ体表からは、わずかに湯気が立ち上っている。

「殴ったら殴り返して、吹き飛ばされたら吹き飛ばして。……まるで子供の喧嘩だ」

鼻で笑いながら、弾は黒の目の前に立っていた。表現は間違っていない。弾は空中に立っていた。今までのように『グラビティ・アトラクション』を使って浮かんでいるのではないのだ。文字通りに、立っていた。

考えてみれば、あるいは黒をみればわかることなのだ。空には立てる。

そうでなければ、生身の弾と同じスペックの黒が浮かんでいられるわけがない。

そして、それが分かれば『グラビティ・アトラクション』の制御に大部分を回していた『ブラッディ・ロード』の能力を十全に使える。

パキパキ、と『ブラッディ・ロード』の装甲が剥がれていく。

それを能力と言っているのかは分からない。だが、弾にとつてはそれこそが本気の全力を出す為の鍵となる。

『ワンオフ・アビリティ』——起動

その能力に名前はない。

なけなしの絶対防御とシールドエネルギーを解除し、『ブラッディ・ロード』の展開維持に全てを注ぐ。ただそれだけの能力。

だが、そうでもしなければ弾についてこれない。いくらISであろうとも、衝撃に耐えきれず自壊してしまうのだ。

ワンオフ・アビリティの起動に伴って、『ブラッディ・ロード』が装甲を変える。より洗練され、強固なそれへと。

真紅に染まった双眸で、弾は黒を睨みつけた。

「これでようやく『その気』になれる。ここからだぜ。覚悟はいいな？ テメエに弾痕刻み込んでやるぜ……ツツ！」

黒は答えず、静かに拳を握った。

◇
◇
2

弾の指示に従って旅館まで戻ってきた一夏達は、状況を把握しきれていない千冬や真耶に事情を説明した。

銀の福音は無事に沈静化できたこと。

その後、突然黒い人型が出現したこと。

弾が今戦っていること。

それら全てを、震える体に叱咤をいれながら説明する。

事情を聞いた千冬は神妙な顔で考え込むが、やがて苦虫を噛み潰したような表情で口を開いた。

「……………どういふことなのか判断がつかん。満身創痍のところ悪いが、全員指令室までついてきてくれ」

千冬に促され、一夏達は素直について行った。

正直な話、一夏達だって把握してゐるわけではないのだ。福音を倒したと思つたら黒いのが来て、弾がいつになく真剣で、何がどうなつてゐるのか判断ができていない。それでも、尋常ではないことはわかる。弾がそれに立ち向かつてゐることも。

何が起きているのか、確かめなければならなかつた。

「……………なんだと」

指令室に入ったところで、千冬が声を漏らした。遅れて、一夏と箒がそれぞれ声を失う。

薄暗い部屋に設置された数台のモニターの前に、それらを楽器のように使いこなす、作戦開始前にいずこかに消えたはずの篠ノ之束の姿があったからだ。

「束……どうして……」

「やあやあちーちゃん。束さんちよつと今手が離せないから、ほんの少し待っててね」

モニターから目を離すことも、手を止めることもなく束はいつもとは全く違う真剣な口調で言った。その言いようのない迫力に、千冬すらたじろぐ。

モニターには何桁もの数字の羅列と意味不明な記号、アルファベットが所狭しとならんでいた。膨大なそれらは、さらなる追加によってひたすらに膨張していく。

やがてそれが終わると瞬時に画面が切り替わり、所々に馬鹿でかい穴の空いた海の映像が映し出された。

「ふいー、終わった。で、ちーちゃん何かな？」

「……お前は どうしてここに いるんだ？ その 映像は なんだ？」

「ちーちゃん が 一度に 幾つも 質問する なんて 珍しい ねえ。 だ いぶ 焦つて る みたい」

「東、 今 は そんな こと——」

「分 かつて る」

千冬 の 言葉 を 東 は 切つて 捨てた。 そして もう 一度、 「分 かつて る」と 呟いた。

「まず、 二 番目 から 答え ようか。 この 映像 は さつき まで いっくん 達が いた ところ」

「……は？」

東 の 言つた 言葉 に、 だれ も が 理解 でき なかつた。 一 夏 達 が いた ところ には、 渦潮 も な ければ 穴 なんて 空い て いなかつた。

皆 の 気持 ち を 代 弁 する よう に、 セシリア が 冷や 汗 を 垂らし なが ら 前 に 出る。

「そ、 そんな、 あり 得ま せんわ！ 海 に 穴 が 空く なんて！」

「それ を でき る のが、 彼 だよ」

束の言葉に、反論はできなかった。

ではその彼、五反田弾はどこへ行ったのか。映像の中には、人の影など見えない。疑問を感じ取ったのか、束は映し出している場所を変える。

今度は空だった。

「彼は、さっきの地点から上空約五十キロメートルの成層圏界面で戦っている」

そろそろさらに上の中間圏に突入するね、と束は付け加えた。

開いた口がふさがらないとは、今の一夏達のことを言うのかもしれない。全員揃って、口をわなわなと震わせていた。

映像の中では、五反田弾と黒い人型が人智を越える戦いを繰り広げていた。視認できないほど速く動き、姿が見えたと思ったら両者の拳がぶつかり合って爆発にも似た轟音を発生させる。

黒のガードを強引にこじ開け、弾が吼えた。獣を通り越し、もはや怪物を思わせる咆哮と共に激流の如き連打が叩き込まれるが、黒は呼応するように同じく連打でそれを迎え撃つ。

拳と拳がぶつかり合うごとに周囲の景色が歪み、赤と黒の飛沫が弾けている。間違い

なく、それは彼らの血肉とその欠片であった。

そこにいた全員が始めて見る、五反田弾の本気の全力。

「これが……五反田？」

「そう、箒ちゃん。その彼の全力だよ。本気のね」

箒の無意識の言葉に、束は優しく諭すように言った。やはりいつもとは違う様子の姉に箒は少しうろたえたが、けれど今はそんなことを気にしている場合ではない。

束は一夏を見据えた。明確な意志を持った視線に貫かれ、一夏の心臓が跳ねる。静寂に包まれた部屋の中、一夏の生唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

「いつくんは彼の、五反田弾のことをどう思っているのかな？」

「弾のこと……？ そりゃ……」

「友達？」

束が一夏の言葉を先回りしかぶせて来た。いつものふざけた様子はなく、箒と同じで一夏としてもやりにくい。

それでも、言われた言葉に違いはないので素直に頷いた。

「そっか。まあ、そう答えるよね」

「……東さん？」

含みのある言い方をする東に一夏は聞き返したが、返ってきたのは微笑だった。そして、東はもう一度千冬に向き直り、その真意を言葉にしていく。

「私は人間。なによりも愛しい家族と、大切な友人がいる。どれだけ私が馬鹿をしても、隣にいてくれる人がいる」

「姉さん……」

東はまず箒を指し示し、次に千冬と一夏を見た。優しく、温かい笑みだ。本当に嬉しそうな、幸せな表情。

「私は人間だよ。『天災』なんて呼ばれていても、それは変わらない」

一転。

それまでの穏やかな気配はなりを消し、凜とした、ある種冷酷さすら感じる雰囲気
束を包んだ。

言葉は、鋭利な刃となって飛ぶ。

「でも、彼はどうだろうね。果たして彼の隣に立てる存在があるのかな」

「なにを……」

「もう一度聞くと、いっくん。いや、織斑一夏」

そこで束は一度目を伏せた。躊躇ったのは一瞬。

そして、告げる。

「君は本当に、五反田弾を友達だと思っているのかな？」

一夏に出せる言葉は無かった。

もはや膝を折ってしまいそうな一夏を庇う様に、千冬が束と一夏の間割り込む。後
ろにいたシャルロットやラウラが、それをフォローする形に動いた。

「何を言っているんだ、束！」

「分かつてるはずでしょう、ちーちゃん。彼の隣には、誰もいないんだよ」

「そんなことはない！ 私がいる！ 一夏も、嵐もだ！ 皆が彼の強さを抛り所としていた！」

「そう、誰もが彼の強さを見ていた。いや、魅せられてしまっていた。だからこそ、彼はたった一人なんだよ」

「わからない……。私にはお前が何を言っているのかわからない……」

「逃げるのはやめなよちーちゃん！ 本当はわかっているのでしょうか？ 皆が抱いていたのはただの畏敬。彼の強さへの羨望と憧れ、そして怖れだった。真の意味で彼の隣に立つ者など、どこにも居やしない！」

誰もが弾の隣に立つことを拒否していた。その高みには行けないと自分勝手に決めて、五反田弾という圧倒的な強さの庇護の下、ただ停滞のぬるま湯に浸かっているだけ。

力という光に眩まされて、根源たる弾に目を向けない。いつしかそれを疑問に感じる事もなくなり、彼に見向きもしなくなる。

——弾なら大丈夫。弾だったら。弾だから。

——だって彼は強いから。

五反田弾に対する言動の根底には、彼の強さへの依存があるのだ。結局のところ、信頼なんて高尚なものはなく、ただの他人任せ。思考することを放棄した、人外に対するそれである。

「違うー！」

鈴が叫んだ。今にも束に飛びかかっていきそうな程であるが、目尻に涙を溜め、小さな体を震えさせている姿は、いつそ悲痛と言ってしまえるものだった。

「違う違うちがうちがう！ 昨日今日会ったばかりの部外者に、何がわかるっていうのよー！」

「部外者だからこそわかるんだよ。彼の異常性も、君たちの諦観もね」

「諦めてなんて……！」

「いや、君たちは彼と対等になる事を放棄している。それを諦めと言わないで何て言うのかな」

「……………」

鈴だけではない。セシリアやシャルロット、ラウラまでもが何も言い返せずに唇を噛みしめていた。

悔しさに顔をゆがませる少女たちを尻目に、東は千冬の問いに答えるべく口を開いた。

「ちーちゃん、最初の質問に答えるよ。私がここにいる理由」

「……………ああ」

「私は最後のチャンスを示しに来たの」

「最後の、チャンスだと……………」

「そう。全てが変わるか、何も変わらないかの両極端。ハイリスクにして成功する確立が無いに等しい最悪の大博打」

シャルロットとラウラに支えられていた一夏が、東の言葉を聞いて勢いよく顔をあげた。

「これから私の権限で I S にかかっている機能を全てアンロックする。そうすれば、彼のところに行ける」

「弾のところは……？」

I S 全機能の制限解除。普段使っている時のような半端な状態ではない。だが、それは同時に広大な宇宙空間で光をとらえるための視覚補佐や、これまでとは比較にならない出力を扱いきらなければならないということだ。

それでも、弾のところに行けるだけなのだと言った。

「戦えるかどうかはその人次第。それに、時間的に全機能の解除ができるのは一人が限界」

一人だけが、命をチップに参加できる。

「さて、いっくん。君はどうする？ この世界に——運命に抗ってみたくはないかい？」

決断の時。

一夏は拳を握りしめながらシャルロットとラウラの支えから脱し、自分の足で立った。

織斑一夏の答えは、決まっていた。

◇◇ 3

中間圏。オゾン濃度の違いにより、この層は高度に比例して気温が減少する。高ければ高い程、温度は低くなっていくのだ。

その気温、最高地点である中間圏界面でマイナス百度を下回る。

そこを、弾と黒は幾度となく衝突しながら駆け上っていた。二人が生み出す破壊は、もしもこれが地上で行われていたら、そこら一帯が焦土と化してもおかしくないものだ。

けれど、ここは何もない空の上。数十キロメートル規模で発生する衝撃波を、なんの憂いもなくぶつけられる。

ある意味で、この場所は弾にとって最高の戦場だった。

「オオオオオッ！」

雄叫びを上げて、弾は疾走する。穿つように突き放たれた貫手は空気との摩擦で真っ赤に染まり、炎を纏って黒に突貫した。

しかし、黒は寸分の狂いもなく同時に貫手を返してきた。両者ともに狙ったのは胸の中心部、鳩尾である。

ゴガツ、という鈍い音と共に、貫手と貫手が衝突しあつて二人もろともに吹き飛ぶ。

その反動を利用して弾は裏拳を繰り出した。一回転して速度を増大させた一撃は黒の鼻先を掠っただけに終わったが、弾の狙いはその後にある。

すなわち、攻撃をよけた為に生じる硬直である。

大きく、そして痛烈に。

弾は空中を踏みしめ、本命の一撃を叩きつける。けれど、黒は見越していたかのようにそれを受け流し、弾の腹を蹴りつけた。

耳を覆いたくなるような音とともに、弾の腹が穿たれる。飛び散った肉や血が、発生した衝撃で飛んだ直後に消滅していった。

「おおおおおオオオオラアアアアアアアッ！」

だが、弾はそれを気に留めない。むしろ攻撃によつて硬直した黒を好機と見て、右のアップパーを叩きつける。さすがに躲すことができずに、黒の体が浮いた。

さらに弾は左の拳を握りしめる。血管が浮かび上がっているその拳に、周囲の空気や光が爆発的に引つ張られた。

それはブラックホール。あまりの圧力で握りしめられた拳の中に生まれた、光すら逃れることのできない超重力の塊である。

周囲にある存在総てを巻き込んで、弾は拳を振りぬいた。

——瞬拳

遙か下の雲海までもが消し飛び、直撃した黒が第三宇宙速度を超えて亜光速で吹き飛んでいく。中間圏を超えて熱圏、高度約八百キロメートルのあたりまで打ち上げられた。

もはやその上は外気圏と宇宙空間のみ。定義としては宇宙と言っても差支えのないその場所に、弾は迷うことなく足を踏み入れる。

「オオオオオオオオオオオッ！」

黒はその隙を使つて弾に接近、正拳突きを放つ。

弾はそのストレートに交差させるようにカウンターを撃つ。左から繰り出されたクロスカウンターを受け、黒が弾かれたように吹き飛ぶ。が、カウンターの起点となった右手で弾の左腕を掴み、吹き飛ばされる勢いを使つて掴んだ弾の左腕を千切つていく。

「ぐ、がつ……ッ！」

噴き出る大量の血を筋肉を膨張させることで止めるが、攻撃手段の一つがなくなつたことが純粹に惜しい。

こちらは顔を碎き割つてやったが、割に合わない。

毒づく弾に、黒が虚空を蹴つて突貫。両腕を鞭のようにしならせ、挟み込むように叩きつけてくる。弾はそれがインパクトを起こす前に黒の右腕を蹴り上げ、さらに左腕の関節を殴つて折る。

そこから肘で黒の顎を打ち付けたが、そこで蹴り上げたはずの右腕が勢いを取り戻して横薙ぎにされた。

間一髪上体を逸らすことで躲すことに成功するが、直撃を免れただけで完全には躲しきれしていない。喉をかすつた黒の腕はそこらの肉をごっそりと抉っていく。

なんとか血を止めるが、

「ぎ、ぐ……ッ！」

弾に殴られ折られたことによつてポロボロになった黒の左腕を、怯んでしまった弾は
躲すことができない。

そして、オーロラを構成する粒子が飛んできた。

「極光——刹那アアアアアアアアアアアアツツ!!」

不可視の斬撃と数百を超える斬撃が折り重なつたその一撃が、黒の左腕を断ち切る。

「おおおおおオオオラアアアアアアアアアアアツツ!!」

その隙をついて、弾が黒を蹴り飛ばした。そして、粒子を纏つて疾走してきたそいつ
を、織斑一夏を睨みつけた。そして、血を吐きかすれた声で言う。

「どう、して……来たんだアツ！」

「来るに決まってるだろツ！ 俺を舐めるな！」

叫び、一夏は抜き身の『天音雪片』を握りしめる。

今の一夏には、それしかできないのだから。

故に。

「俺は戦う……ツ！ おまえの隣でツ!!」

「……チツ。ああ……そうかい。分かったよ、まったく」

一夏の答えを聞いて、弾は仕方ない、と薄く笑った。一夏がこうなったときは何を言っても退かないのは、よくよく知っていることだった。

それに、この状況を打開するには不確定要素が必要だ。どうやら一夏は弾と黒の戦いについてこれるようであるし、迷う暇はなかった。

「これで、決めるぞ。一夏……おまえのそれ、長くは、もたねえだろ？」

「ああ、今でも結構ぎりぎりだぜ」

「なら……ほんの少し。時間、稼いでやつから、全力にかける」
「おうツ！」

一夏が居合いの構えで精神統一をしだしたのを確認し、弾は黒に向かって攻撃を仕掛けた。仕留めることが目的ではなく、あくまで時間稼ぎ。

軽く右腕で牽制し、一夏の方へ行かないように蹴りで動きを止める。ダメージこそ与えられはしないが、弾自身の体力と目的を考えれば最適だ。

軽いジャブの後、黒が回し蹴りを放ってくるが、回転するように力を流動させさばく。時間が過ぎれば過ぎるほど、周囲には粒子が満ちていく。黒は何度か一夏の方へ行こうとフェイントを織り交ぜて誘ってくるが、弾はそれを冷静に看破、向かわせる余地を与えない。

強引に一夏迄の道をこじ開けようと、黒が突っ込んでくる。しかし、そんな直線的なものは弾にとって格好の的だ。

空間を裂きながら強襲してくる手套を受け流し、黒の腹部にアップパーカットを叩き込む。

そして、ついに。

極光が奔る。

——風は落ちて星は逃げ

——けれど空は知っている

——その輝きを

——かの地にて今現れん

「極光——刹那アアアアツツ!!」

斬撃の嵐と共に、疾走居合いが黒に叩き込まれた。弾によつて動きを固めていた黒はそれをまともに受け、その体表に細かな傷を作つていく。

ISのバックアップを受け、かつて繰り出したどんな斬撃よりも鋭く、そして重い一撃が刹那の間に幾重にも刻み込まれていく。

さらに、斬撃に呼応するようにオーロラが爆発的に広がつていく。

視界総てを極光に染め上げて、一夏は黒の体を弾き飛ばした。

「行けえええええッ、弾ああああああんんんッ!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

一夏によつて体勢を崩された黒の体に、弾が拳を合わせる。

「私はあなたを愛している」

Ich liebe dich

——瞬拳

まさしく全力。まさしく決死。

初めから光を凌駕する一撃が黒に叩き付けられ、木の葉のように吹きとばす。

「あなたに魅了されたのだ」

m i c h r e i z t d e i n e s c h • n e G e s t a l t ;

——瞬閃

間髪入れずに次の一撃が叩き付けられる。

周囲のスペース・デブリを吹き飛ばし轟音を上げて叩き込まれるそれは、その詠唱も合わさってまるで悪魔のようであった。

「されどあなたが望まぬというのなら、私は力を揮おう」

Und bist du nicht willig, so brauch' ich Gewalt

——瞬天

すまん、と。

弾は一撃放つたびに壊れていく愛機に語りかけた。もはや『ブラッディ・ロード』は、その原形をとどめていることすらできていない。

それでも。

「覚悟はどうにできている」

Ich habe bereits entschieden

——支瞬天

『私なら大丈夫です。あの時、覚悟をつきましたから』

声を出すことはできずとも、伝えられることがある。『ブラッディ・ロード』から流出してくる思いが、弾を焦がす。

あまりにも熱く、そして儂い。

『ありがとう——あなたといっしょにいられてよかった。』

「己の道を行け」

G e h d e i n e n W e g

——悲想天

そしてここに瞬拳から派生する総てが黒に叩き込まれ、そしてまた詠唱が完成した。もはや外気圏を超え宇宙空間まで吹き飛ばされた黒の姿は、四肢が消し飛び身体にい

くつもの大穴を開けた凄惨たるものだが、ここに最後の一撃を与えるべく弾は拳を握る。

魔人を超えて。

極拳——魔王

l e t z t e F a u s t —— D e r E r l k · n i g

振りぬかれた拳の先に存在するものに、等しく与えられる死という結末。

運命すら打ち壊し、世界意思すら駆逐するその拳を受け、黒は跡形もなく消滅した。

——これで、終わり。

反動で砕け、消え果てていく愛機と右腕を眺めながら、弾はゆつくりと地球へ落ちていく。

身動き一つとれずに落ちていく弾を、オーロラが包んだ。斬撃へと昇華する極光の粒子が、なぜだか弾にとっては温もりを持っているように感じた。

——ああ、そうだったのか……。

己の下まで駆けてくる一夏を見て。

弾はやっと、自分が『救済』されたことを実感した。

Twilight finale

夕日に照らされ黄金に染まる浜辺で、弾の治療は行われていた。右目は潰れ、喉も抉り取られ、左手が千切りとんでいる。さらに腹には大きな穴がぽっかりと開いているのだ。常人ならとつくに死んでいる。

一夏が弾を連れ戻してからそれほど時間は経っていないが、急ピッチで行われた治療により傷をふさぐことには成功していた。しかしそれでも、無くなった血が多すぎる。輸血しようにも、弾の皮膚は固すぎて針が通らない。

篠ノ之束も奮闘したが、彼の命は……。

皆がこの状況を打破するために画策する中、弾が口を開いた。けれどそれは皆が待ち望んでいたものではなく——諦めの言葉だった。

「いいんだ……これで。これ以上は無駄だ……」

「そ、そんなことない！ らしくない！ 全然お前らしくないぞ弾！」

「そうよ弾！ しつかりしなさい！」

「自分の体のことだ……それに、この感覚は一度知……」

「え……?」

弾の言ったことがよくわからなくて、一夏は問い返した。けれど、弾は自虐気味に薄く笑うだけで答えない。

そうして、弾は不意に口を開いた。遺言となるであろう言葉を、とぎれながらも残していく。

「……箒、聞こえているか」

「……ああ、ここにいます」

「前に、言ったな……傍観者にしかなれない、と。おまえは、もう傍観者ではなくなった。自分で踏み出したんだ……迷うな。決して」

「……ああ、わかつている」

踏み出したのなら、最後まで到達しなければならぬ。後戻りは許されないのだ。

箒は力を手にした。一度は失敗したが、一夏達がいれば、その暴力的な衝動に負けずに、正しい道突き進んでいくだろう。

ひとまず、安心できる。

「……鈴」

「いや、いや……弾……！」

「自分らしさを貫け……それだけで、きっと皆ついてくる」

「弾……いやだよ。こんな……！」

鈴は、光なのだ。道を見失わないように明るく照らす黄金である。故に、こんな嗚咽交じりの声は似合わない。

弾は手のかかる子供をあやすように、優しく微笑んだ。安心させるはずだったその笑みを見て、鈴はさらに泣きそうになってしまう。

——まだ、まだ。

「セシリア——」

「言わなくても、結構ですわ。私はもう、あなたから様々なものを貰いましたから。お返しすることができないことをお許しください」

「……はは、なんだよクソ。強えなあ」

さすがは、と言ったところであろう。凜々しく立つその姿は、まさにノブレス・オブリージュ。その精神が伊達ではなく、不朽のものであることが証明された。

精神面で言えば、おそらくこの誰よりも強い彼女である。箒や鈴といった不安定さが抜けきらないやつを支えていつてほしいと思う。

——もう少し。

「五反田、さん……」

「シャルロット、誰かに依存するのはやめろ……その先にあるのは、破滅しかない。俺のように……自分の足で、立つんだ」

「うん、うん……大丈夫だから。僕は、だいじょうぶだから……」

悔しそうに涙を流しながら、シャルロットは弾の手を取る。

傀儡から解放されてから、彼女は抛り所をなくしてしまった。だからこそ、救つてもらったという糸を頼りに依存してしまったのだ。

自分の足で立たなければならぬ。とりわけ、シャルロットには三年の期間しかない

のだから。

——ここじやあダメだ。

「ラウラ、俺は……お前が嫌いだよ」

「知っているさ」

苦笑しながら言い切ったラウラの顔は、学園に来た頃よりずいぶん成長して見えた。親とはぐれ泣いていた迷い後はもういないのだ。

「そうかよ……ああ、まったく、あんなだけ泣きわめいてたのにな……欲しいもん手に入れてよ。うらやましいぜ、ちくしょうが……」

最初は強がっているのが見え見えで苛立ったが、結局、その後も弾がラウラのことを気に入らなかつたのは嫉妬だったのだ。弾が欲しかったものを、ラウラは手に入れてしまったから。

醜い自分を嘲りかすれた笑い声が出るたびに、大量の血が喉からせりあがってくる。

それを吐き捨て、それでも弾は笑っていた。

「クラリツサに、伝えてくれ……約束、守れなくて、わるいって」
「……ああ。確かに」

——まだもつだろう、俺の体。

「千冬さん、アンタにはずいぶん迷惑をかけた……」

「馬鹿者……現在進行でかけてるだろう」

「かつ、はは、ほんどだな。なら、ついでだ……一夏達のこと、頼むよ」

千冬は誰よりも弾に近づいてきてくれた一人だ。だが、それゆえに弾の本質を見抜けなかった。灯台下暗し、というわけでもないが、眩んでしまったのは事実だろう。らしくもなく泣いている千冬を見て、弾は仕方ないなときこちなく笑った。

「東さん……アンタにも、頼んどくよ。一夏達のこと……」

「わかってるよ。大丈夫……大切な家族だからね」

これから、一夏と箒はいろんな組織に狙われることになるだろう。『世界最強』と『天災』の弟妹というのは、恰好の餌だ。強くならなければ、周りどころか自分の身さえ守れない。

『銀の福音』の件はおそらく束がそれを見越して仕掛けた事件であるから、言わずとも大丈夫であろう。

微笑む弾を見て堪えきれなかったという様子で、ぽつりと束が声を漏らした。

「……いいの、キミ。このまま世界に負けちゃって」

「負ける？ 馬鹿言え……どうみたって、俺の勝ちだよ……」

「……そっか」

束の問いに、やはり弾は笑って答えた。別に死を迎えることが負けることではないだろう。

弾はもう、欲しかったものを手に入れたから。

それはどう見たって、弾の勝ちだ。

——もう、いい。

もう十分。後悔こそあるが、よく生きた。これで良いのだ、と弾は瞼を下ろす。
だが、

「弾、おい弾！ そんな、そんな今わの際みたいなこと言うなよ……！」
「一夏……！」

それを一夏が強引に引き上げた。まだ終わらせないと、あらんかぎりに叫んでいた。
だけど、弾はもう生きていく気はないのだ。なにより、世界が認めないだろう。

「これで良いんだ……本来なかったはずのものが、元に戻るだけなんだ……」
「元に戻るってなんだよ！ それじゃあおまえが、いちやいけないものみたいじゃない
かよ！」

いてはいけないものみたい。

その通りである。「この五反田弾」は元来あつてはいけないものだ。

死に戻ってしまった醜い腐敗。たった一度の生に恥を塗り、その一度にすら恥を塗り重ねて、見るに堪えない死に様で存在している。

総ては、欲しかったものを手に入れるために。

それが消えるだけなのに、一夏は大切な宝物が壊れてしまったかのように泣いてくれている。

それを見て、ついに弾の心は決壊した。

心の内、今まで誰にも言わなかった本当の願望があふれ出てくる。

「俺はずっと——ずっと何かを求めていた……」

その言葉に反応したのは千冬。弾がラウラとひと悶着起こした夜に、彼自身が千冬に言ったのだ。

暴力とは求道である、と。

いまさらながらに、千冬は思い至る。なぜ気づかなかつたのだろうか？ 弾はずっと自分の力を暴力にしか使わないと言っていたではないか。つまりそれは、弾が何かを求めていることの動かぬ証拠だというのに。

「弾……」

「俺は——隣に立ってくれる奴を求めてた」

同類でも仲間でもない。対等な立場、戦友とでもいうべきそれ。普通に生きていれば抱かない、抱く必要などない願ひ。弾はそれを、心より——まさしく死ぬほど渴望していたのだ。

「俺は、化け物だ……人間じゃない」

生まれた時から、超絶の力を持っていた。物心ついたときには、それを当たり前のようふるっていた。総てを背にし、存在としての頂点に立った。

そこにいて気付くのだ。ここには自分しかないのだと。触れ合えるものなどないのだと。

「だけど——」

「——そんなの嫌だ。嫌なんだ！ 超絶的な力も、圧倒的な技術も関係ない。俺はただ、誰かが隣に立ってくれることを望んだ。一緒に戦ってほしかった！ 誰かに背中を

任せたかった！ 孤独^{ひとり}は、つらいんだ……」

悲痛だった。いつの間にか弾の双眸からは涙があふれ、親とはぐれた子供のよう泣きじやくるその姿。まぎれもなく、強がりもない。五反田弾の本当の姿。

篠ノ之束が抱いていた願望と確かに似ているが、その実は違う。

束は同類。同じ方向を向き切磋琢磨できる存在が欲しかった。

弾は戦友。共に立ち背中を預けられる者を望んでいた。

「そんなの、いつでも言ってくればよかったじゃないか！ 俺たちが嫌がるとでも思ってたのかよ！」

一夏は叫ばずにはいられなかった。そうしなければ、胸に芽生えた疑念を肯定することになってしまいそうだったから。

だから叫ぶのだ。その疑惑を、打ち払うように。

けれど、束に言われたあの言葉。『君は本当に彼を友と見ているのかな？』というあの言葉が脳裏から離れない。

弾は友達だ。親友なんだ！ 言ってくれば一も二もなく一緒に戦う！

なのにどうして、弾と共に立つことを想像できないのだろうか？

いくら叫んでも、疑念を否定することができなかつた。鈴や千冬、セシリア、ラウラ、シャルロット。それ以外も合わせた誰もが、彼と共に戦うなんて考えたことすらなかつた。

あまりに強かつたから。ただ一人、孤高の決意を持ってすべてを薙ぎ倒していく、それが五反田弾だと思っていたから。

「どうして……」

口を開いたのは、鈴だつた。

「じゃあどうして、アンタは一人でいたのよ……呼んでくれれば、よかつたのに……！」
「もう少し早く気づいていれば、違つたのかもしれない……」

でも、と。弾は思う。

きつと、それを知っていたとしても、弾は言わなかつたはずだ。最期の最後に、決壊する以外はなかつたはずだ。

だってそれが、恩返しだったから。

こんな自分に話しかけてくれた。こんな自分でも受け入れてくれた。並び立つことはなかったけれど、これ以上は高望みだと思っていた。

「そんな、こと……？」

「そんなこと、じゃあないさ……」

鈴たちからすれば、何気ないことで、意識する必要もないことなのかもしれない。だが、それで弾は救われていたのだ。

紙一重。

通じ合うことのできぬ境界線で起こった、ささいなすれ違い。

「ごめん……ごめん、弾……！」

顔を歪ませて、一夏は声を絞り出した。

「いいんだ……それが、普通なんだよ……恥じることじゃない……」

「だけど……!! だけど!!」

「それに、俺は感謝してるんだ……一瞬でも、俺と共に戦ってくれたじゃないか……」

——俺の願いは叶ったんだよ。叶えてくれて、ありがとう。

笑顔で弾は言いきった。もう後悔はないというような、本当に嬉しそうな笑顔だった。

「だったら……俺の願いも聞いてくれ、弾!」

「一夏の……?」

「ああ、そうだ。俺の願いだ! 俺と——友達になつてくれ!」

それは遅かったというしかないだろう。だけど、遅すぎたということとはなかった。ぎりぎりで、織斑一夏は間に合った。

「い、いのか……? 俺は、人じゃないんだぞ……?」

「良いも悪いもあるか! 俺とおまえは——友達だ!」

一夏は声を絞り出す。弾は目を見開いて信じられないとでも言いたげに体を震わせていたが、すぐに顔を歪ませて涙を流し始めた。一夏も、もう涙を堪えるのは限界だった。

涙と砂で汚れゆがんでしまった顔で、一夏は弾に微笑みかけた。

「なあ、だからさ。次の休みに遊びに行こうぜ……せつかく、友達になれたんだから……」

「ああ、そうだな……」

「鈴も一緒だ。中学の時のメンツをそろえてもいい……」

「ああ……そうだ、な……」

弾の音が次第にかすれていく。瞳から光が抜けていき、体から力が抜ける。

一夏は慌てて、その体を抱き起した。

「弾……なあ、弾……！ 聞いてくれよ……！」

「わ、るい……少し、寝させて……くれ……」

「だめだ、だめだ！ 起きてくれ弾！ なあ……！」

「いち、か……」

「お前がいなきやダメなんだよ！ 俺はなんにもできないんだ！ 弱くて弱くて、どうしようもなく弱いんだよ俺は！」

これまで何度弾に助けてもらったただろうか。恩返しするのは一夏達の方だ。

数え切れないほどに溜まってしまった恩を、まだ一夏達は返していない。こんなところで、いなくなってしまうては困るのに。

五反田弾は、微笑んでいて。

「だい、じょうぶさ……おまえ……なら……」

「弾、おい弾！ だめだ目を閉じるな！ おい、聞いてんのかよお！」

一夏の耳元で何かを吹き、弾は静かに瞼を閉じた。そして、もう二度と目覚めることはない。

一夏はもはや動かなくなった弾を荒々しく揺さぶった。こんなの、弾らしい質の悪い冗談だ。呼びかければすぐに「おい止めるよ一夏」と言っつていつものように笑いかけて

その意向に従ったのだ。

見つかった「遺書」という存在が、一夏を苦しめる。弾は自分の死期を悟っていたのに、自分は全く気づかなかつた。相談してくれることもなかつた。

弾を理解できず、のうのうとありもしない友情に一人よがっていた自分が腹立たしい。自身の無能さに耐えられなかつた。

一夏は自分を責め続けた。

弾の冷たくなつた体が以前の強靱なものでなく、ただの人のそれへと変わつていたことも拍車をかけた。弾が特別な存在でなく、何も変わらないありふれた人間だつたということが、皮肉なことに死後に証明されたというわけだ。

そんなことにも気づかず彼を特別だと決めつけて、尊敬を友情とはき違えて生きてきた。かつての思い出すらも色褪せて、一夏を責めているように感じてしまう。

だから一夏は葬式会場を飛び出して、雨の中一人泣いていた。

何が皆を守る、だ。かけがえのない友を失つて、無様に醜態を晒してこのザマだ。衝動のままに、一夏は拳を地面に叩き付けた。何度も、何度も。

「こんなところでしたか」

絶望にくれる一夏の背に、声がかかった。振り向けば、弾の妹である蘭が傘もささず
に立っていた。肩で息をしているので、よほど急いでいたのだろう。一夏が自殺する
でも思ったのかもしれない。

「風邪、ひくぞ……」

「一夏さんもですよ」

「いいんだよ……俺なんて」

「そんな言い方……」

「事実さ……俺は何もできな——」

パンツ、と。

乾いた音が雨の中に消えていった。鈍い痛みが疼く頬から、自分が蘭にはたかれたの
だとわかる。

「そんなこと言わないでください！」

彼女は、泣いていた。

いつからだろう。きつと、ずっと泣いていたのだ。雨のせいで気づかなかつた。いや、気づこうとしなかつた。

怖かつたからだ。咎められるのではないかと恐怖し、目を背けてしまった。

「貴方は、お兄に守られたんです！ 友達だったんです！ そんな貴方が自分を卑下してしまつたら、お兄が何のために生きていたのかわからなくなるでしょう！」

「……っ！」

「胸をはれ！ 前を見ろ！ それが貴方のできる贖罪だ！」

「お、俺は……」

「それでも、貴方が納得しないというのなら」

——強くなつてください。

彼女は泣きながらも微笑んでいた。触れば壊れてしまいそうなのに、その強さは一夏など遠く及ばない。

ただ素直に、美しいと感じた。

「お兄と同じくらいに、とは言いません。それでは、一夏さんが不幸になつてしまふ。お兄は優しいから、そんなことを望んではいらないでしょう。ですから、せめてお兄が誇れるように、貴方の『最強』を目指してください」

その時の一夏には、正直言葉は聞こえていなかった。けれど、蘭の口から出てくる音の一つ一つがどうしようもなく胸を打ち、心に響いた。

「私ではダメなんです。私は妹という存在だから、お兄の庇護からは抜けられない。どれだけ頑張ろうとも隣に立つこともできず、私にできるのはただその背に手を添えるだけ。けれど、あなたは違う。最後にお兄から言葉を託されたあなたなら、いやあなただからこそできることなんです」

「おれ、だからこそ……」

一夏は震えながら、自身の手のひらを見つめた。何度も地面に打ち付けたせいで、泥と血で汚れているその手。

守るためと剣を取った手。けれど、無二の親友を零れ落としてしまった咎の手。

「握っても、いいのか……こんな、手でも」

震える一夏の手を、蘭の手が包み込んだ。温かく、優しい手のひらがゆつくりと一夏の震えを止めていく。

「握っても、いいんだな……」

——だから今、織斑一夏はここにいる。『世界最強』を決める大会、モンド・グロツソの決勝に。

「……ちか。一夏！ 聴いているのか？」

「ん？……ああ、悪い。どうかしたか箒？」

箒に声をかけられ、一夏は意識を現実に戻した。靄がかかったような意識が次第に晴れていき、ここが選手用控え室だったことを思いだす。どうやら、浅く眠ってしまった

いたようだった。

いつまでもほうけていたからか、箒が心配そうな顔で一夏の顔を覗き込む。

「そろそろ時間だが……どうしたんだ？」

「いや、昔を思い出してたんだ」

「……そうか。あれから、もう十年も経つのだものな」

「ああ。ずいぶん時間が掛かったけど、ようやくだ。ようやく、約束が果たせる。これでやっと、スタートラインに立ってるんだ」

「おいおい、早計すぎるぞ。これからあの『世界最強』と戦うというのに、もう勝った気分か？」

「わかっている。千冬姉と戦うんだ。油断なんか毛ほどもしてないさ」

「それならいいが……妙に嬉しそうだな？」

「そりゃあ長年の夢だったし、やっぱあいつの隣に立とうっていうなら『世界最強』程度の肩書きは持つてなきやな」

「……まったく、お前はいつも五反田のことばかりだな。そういう趣味なんじゃないかと時々不安になる」

「ちげえって……さて、そろそろ行くか」

「ああ、行って来い！」

最後にハイタッチを交わして、一夏は控え室をでる。部屋を出る直前、箒が軽く微笑んでいたのがわかった。

控え室をでたところに、かつての友人たちが揃っていた。鈴、セシリア、シャル、ラウラ、楯無、簪。懐かしい顔ぶれだ。中国の国家代表の鈴とは準決勝で戦ったけれど。

「皆見に来たのか？」

「当然ですわ。世紀の一戦ですもの」

「言いすぎだ」

セシリアが相変わらず優雅な腰に手を当てるポーズで笑う。セシリアはIS学園を卒業後、国家代表ではなく実業家になった。親から託された家を守るためだという。

「頑張つてね、一夏」

「おう、シャル。任せろよ」

卒業後を懸念されていたシャルは、なんと逆に実家のデュノア社を乗っ取ってしまった。経営難であったが、武装を中心に開発していくことで会社は立てなおったらしい。今では敏腕美女社長として有名だ。

「嫁と姉、どっちを応援するか……」

ラウラは今でも現役の軍人だ。最近は新人の教育に力を注いでいるという。相変わらず千冬が存在が大きいようだ。

「頑張ってるね！ お姉さん、応援してる！」

「……ファイト」

楯無と簪は姉妹で更識を統率している。さすがに暗部だけあって苦労は多いらしいが、お互いに支え合ってるなとかしているようだ。よくよく喧嘩するのだが、そこは喧嘩するほど仲がいいというやつだろう。

「何ぼさつとしてんのよ。私に勝ったんだから、無様な姿は見せないでよね」

「分かつてるさ鈴。それと皆。ありがとな」

——勝ってくる。

それだけ言つて、一夏は振り返らずに歩き出した。

選手入場口にたてば、会場の熱気が肌を焼いた。それを心地良く感じながら、一夏はISを展開する。体を光が包み込み、『白式・立花』が展開されていた。

「やっとだ……やっとここに来た」

ハッチが開き、光が差し込む。

「今、隣に行くよ……」

刀を握りしめ、一夏は勢いよく飛び出した。

「さあ勝ちに行こうぜ、弾！」

——ああ。

——お前は勝てるよ、一夏。

i f — D e a r y o u

あつたかもしれない選択肢。

人ではなかつた彼は、それを選ぶことはできなかつた。

だが、彼の友である少年は祈る。

その姉である世界最強の女性も祈る。

彼の大切な家族である妹も祈る。

友人である少女も祈る。

少年の幼馴染みである少女も祈る。

彼と決闘をした貴族の少女も祈る。

人間にしてもらつた傀儡の少女も祈る。

彼から強さを学んだ軍人の少女も祈る。

彼に関わつたすべての人が、祈つたのだ。

彼の幸せを。

彼に与えられる、違う形の救済を。

いなくなつてしまつた彼には無駄なことだつた。死んでしまつた彼が生き返ること

はあり得ない。

だからこれは、ただの幻想。

誰もが願わずにはいられなかった、優しい優しい——奇跡のような幻想だ。

∨ 『Twilight finale』

夕日に照らされ黄金に染まる浜辺で、弾の治療は行われていた。右目は潰れ、喉も抉り取られ、左手が千切りとんでいる。さらに腹には大きな穴がぽっかりと開いているのだ。常人ならとつくに死んでいる。

一夏が弾を連れ戻してからそれほど時間は経っていないが、急ピッチで行われた治療により傷をふさぐことには成功していた。しかしそれでも、無くなった血が多すぎる。輸血しようにも、弾の皮膚は固すぎて針が通らない。

篠ノ之束も奮闘したが、彼の命は……。

皆がこの状況を打破するために画策する中、静かに弾が口を開いた。

「一夏……俺は、救われたよ……おまえのおかげでな……」

「救われたって、何言ってるんだよ……意味分かんねえよ、弾……！」

救われた。

その言葉にどのような意味があるのか、一夏にはわからない。だがそれでも、安らかに微笑む弾を見れば、その言葉に偽りがないことだけはわかる。

「隣で戦ってくれた……こんな俺には、それでだけで十分なんだ」

「そんな悲しいこと言わないでくれ弾！」

「悲しいものか……願いが叶った。それはとても、幸せなことだろう……？」

長年つるんでいた一夏ですら初めて見る、弾の微笑み。だが、その幸福が一夏にはわからない。

その悲しすぎる幸せだけは、わかりたくなかった。

「でも、おまえは消えちゃうじゃないかあ……！」

叶った後に消えてしまうなんて、それはもう現実だと言えないのではないか。夢く散りゆく、ただの夢想。

「それでいいんだ……俺は。『おれというもの』自体が……そもそも夢想なんだよ」
「だから、このまま消えようっていうのかよ……！ そんなのってねえよ、そんなの……っ」

悲しすぎるだろう——？

一夏のその言葉は、弾には届かない。

なぜなら、弾の中ではもう決着がついているのだから。悲しいとか、嬉しいとかではない。

弾はようやく、充足感を得たのである。個我が誕生してから、初めて満ち足りているという感覚を味わっている。

それを否定することは、一夏にはできなくて。

ただただ、失われつつある友人の姿を見ることがしかできない。

「俺は、しあわ——」

パン、と。

乾いた音が砂浜に響き渡った。

発生源は弾の頬。終わりを告げようとしていた弾が、引つ叩かれた音。

その人物の登場に、誰もが動きを止めていた。

さらに。

「あ、え？ あ……？」

何が起こったか分からず呆然とする弾の胸ぐらを、突然弾の頬を叩いたその人が掴みあげる。

そして――

「馬鹿じゃないですかっ!？」

ありつたけの感情を込めて、乱入者――クラリツサが叫んだ。

そのまま弾の胸ぐらを揺さぶって、次々と暴言を吐いていく。

「何が十分なんですか!? 何が夢想なんですか!? 何が幸せなんですか!? 周りを置い

てけぼりにして、ただ一人消えるのがかつこいいとでも思っているんですか!? 勘違いもほどほどにしるよこの大馬鹿者がっ!!」

「く、クラリツ——」

「うるさいっ!」

たった一つの単語すら言わせずに、クラリツサは弾の口を塞いだ。
自身の口で。

「ん、ん……!?!」

「あ、はあ……」

たつぷり数秒触れ合っていた唇からは、二人のものが混ざり合った唾液が糸を引いていた。夕日に照らされたそれは、少々赤が混じっていて、血が混ざっていることを暗に知らせる。

「な、なに——んっ!?!」

もう一度、クラリツサと弾の唇が重なる。弾はなす術もなくクラリツサに押し倒された。

また、数秒。弾とクラリツサは重なっていた。

「血、足りませんか……？」

「血って……まさか」

クラリツサの言葉に、弾は驚愕する。

クラリツサは、弾が失った血を補おうとしたのだ。針が通らないならば、直接流し込めばいいと考えたのだろう。唇を噛み切って、弾に流したのである。

笑ってしまいうぐらい愚直で、泣いてしまいそうなほど必死だった。

「クラリツサ……おれはもう……」

「もうってなんですか。幸せだって言いたいんですか……？」

「ああ、そうだよ……おれは、やっと幸せになれたんだよ」

「違う……違う……！」

幸せだと告げる弾を、クラリツサは否定する。強引に合わされた目に宿る光の強さに引き込まれ、弾は息を飲んだ。

「幸せっていうものは、なるものなんかじゃないんです。もたらされるものでもない。幸せっていうのは、作り上げるものなんですよ……あなたはただ、自分が幸せを作れないと思って逃げているだけでしょう！ そのことを誤魔化して、消えようとしているだけでしょう！ 逃げるな!!」

「う、あ……」

「それでも逃げ出してしまいそうなら——私が一緒にいてあげますから」

いつの間にか、弾の双眸からは涙がとめどなく流れ落ちていた。クラリツサも泣いていた。

弾は逃げていただけなのだろうか。いや、そんなことはないはずだ。

この時の為に、今までの弾は生きていた。それが終わっただけ。だから消えようと思つた。

ただ、それだけ。

なのに、クラリツサはそれを許してくれない。逃げだと、誤魔化すなど言っている。

反論しようにも、言葉が無かった。

「それだけそれだけって誤魔化すな！ 終わつたのなら次を始める準備をすればいい！ 勝手に終わり決めつけるのが、逃げじゃないならなんて言うんですか！」

「……っ」

分かっている。分かっている。最初から、気づいていた。

生きたい。生きていたい。

そう願う自分がある。共に生きたいと心から思える人がいる。

それを直視してしまつたら、もう戻れない。

「……クラリツサ」

結局、クラリツサの言つた通り。弾は馬鹿なのだ。

言われないと気付かなくて、一人で勝手に決めつける。

けれど、そんな自分でも救いがあるのなら。幸せが続くというのなら。

逃げずに、戦おう。

「血が……足りない。おまえを、俺にくれ」

「はい」

クラリツサは、迷わず頷いた。

そして。

光り輝く太陽に照らされて、二人の影がゆっくりと重なった。

◇ Dear you

火にかけられた鍋が、ことごとと音を立てている。その隣では、赤みがかった髪を短く切り揃えた男が包丁片手に野菜を切っていた。

慣れた手つきで、蒸したじやがいもを適当な大きさにぶつ切りに。その後、耐熱仕様のボウルに移し替えてから、ムラの無いように丁寧に潰していく。調味料と小さく切られたベーコンを混ぜ合わせて、ポテトサラダが出来上がった。

それを茹でたレタスの上に盛り付けて、さらにパンに挟む用に幾つかの食材を置く。後は、男の妻が好きな、今朝買ってきたばかりの焼きたてのプレートヒエンを用意し、火

にかけていた鍋から塩分に気を遣ったスープを器によそえば、朝食の完成だ。

男がそれらをテーブルに並べていると、彼とは別の足音が聞こえてくる。どうやら、男の妻が起きてきたようだった。

「おはようございます、弾」

「ああ、おはよう。クラリツサ」

男、五反田弾は穏やかな笑みを浮かべて妻に挨拶を返した。そこによそよそしさなんて微塵もなく、入籍してからまだ一年とは考えられぬ程の信頼関係があった。

「いないと思えば、朝食を作ってくれたんですか。ごめんなさい、今手伝いますから」

「何言ってるんだ。おまえはゆっくりしているろ」

「けど……」

「万が一、体に障ったらいけないだろ」

慈しむように微笑んで、弾はクラリツサの少し膨らんだお腹を触る。そこには愛しい一つの命が宿っていた。

余談であるが、クラリツサはこれを理由に退役している。軍を辞めるに当たって少々無理をしたらしいのだが、ラウラやドイツ軍とパイプを持つ千冬のおかげですんなりと辞めることができた。

しかし、だからと言ってかつて語った彼女の夢が諦められた訳ではない。夢を叶える場所が変わったただけ、とはクラリツサ当人の言葉である。

「さあ、座つて。朝食にしよう」

「ふふ……ええ、そうですね」

クラリツサを席に促し、弾は飲み物を用意する。カフェインは良くないらしいので、コーヒーやお茶は避けないといけない。

手慣れた様子で準備していると、弾は自分をじっと見つめているクラリツサに気がついた。

「どうした、クラリツサ」

「あ、いえ。ただ、ずいぶん手慣れたな、と思つて。最初の頃は見てられないぐらいだったのに」

「……そんなに酷くはなかった気がするが。まあ、俺は要領がいいからな」
「……言つてて恥ずかしくないですか？」

「結構やばい」

二人で一緒に笑った。

「義手の調子も良さそうですね」

「おう、束さんの力作らしいからな」

弾はその両手、どこからどう見ても普通の腕にしか見えないそれを軽く動かす。ゆつたりと滑らかに動く腕は、義手と言われなければ気づかない、あるいは言われても冗談だと流せる程のものだ。

篠ノ之束には感謝してもしきれない。これのおかげで、弾は不自由なく生活をおくれているのだから。

ちなみに、束はこの技術を使つて世界中の身体に欠損を抱えている人たちの為に生きることを決意。同時に目標であった宇宙開発の中心となりながらも医学面ですら活躍する、歴史に長く残るだろう偉人となったのだが、それはまた別のお話。

と、そこでドアベルが鳴った。

「こんな朝にだれでしょう?」

「朝って言ってもかなり遅いけどな。俺がでてこよう」

「おねがいますね」

ああ、と答えて弾は玄関に向かった。

ドアを開けたところにいたのは、少々背の低い千冬。ではなく、その妹である織斑マドカだ。

かつては『亡国企業（フアントム・タスク）』などという組織に所属し一夏を狙っていたが、紆余曲折を経て、今ではすっかり周囲に溶け込んでいる。

「マドカじゃねえか。どうしたんだよ」

「近くに来たものだから、挨拶しとこうと思ひまして」

「ああ、そういえば来週からだもんなアレ」

第四回モンドグロツソ。世界中の注目を集めるISの世界大会が来週から始まるの

だ。

思えば前回、つまり第三回世界大会に織斑千冬が復帰してからの盛り上がり様はすごかった。圧倒的な力を見せつけ女王の座に再臨し、凛々しく立つその姿はまさに刀。サムライが世界規模でブームになったのはここからだだった気がする。

そして今年、ついに我らが織斑一夏と凰鈴音が出場となれば、応援に行かぬ理由はないだろう。そんなわけで、もとよりこの地にいる弾を除いたかつての面々が集まっている。

「あなた、来たのは誰でしたか？」

「おい、クラリツサ。あんまり動くな」

「適度な運動は必要ですよ」

ひよこつとクラリツサが顔を出す。その姿を見て、マドカが目を見開いた。

「お、お腹が……大きい」

「あら、マドカさんですか。我が家にようこそ」

「あわわわ……お腹が、お腹が……」

「話が嘯み合ってねえ」

どうもマドカは生命の神秘に触れて混乱してしまったようだ。サプライズとして、妊娠のことは皆に話していなかったのが仇となってしまった。

まあ、弾としてはこれはこれで面白いので良いのだが。クラリツサもどこことなく楽しそうであるし。

マドカと千冬の顔はものすごく似ているので、見ようによつてはかの『世界最強』が慌てている様だ。それがまた笑えた。

しばらく狼狽えた後、マドカは落ち着いてきたのか今度は目を輝かせて興味心身といった雰囲気でクラリツサのお腹を見つめる。

「すごい……触ってもいいですか？」

「痛く……しないでくださいね……」

「……はっ」

どこことなく危険な香りを孕む会話をして、マドカは恐る恐るクラリツサのお腹に触れた。とはいっても、まだまだ胎内の子を感じるのには難しい。だが、マドカはそれでも興

味深そうに撫でていた。

「ここに、新しい命があるんですね」

「そうですよ、私と弾の希望がここに宿っているんです」

「希望……」

「元気に育つて欲しいもんだ。なあ、クラリツサ」

「そうですね、あなた。ところで名前はやはり日本風にしたいんですけど」

「相変わらず日本好きだな」

「あなたが生まれて育った国ですから」

「クラリツサ……」

「あなた……」

「あの、私がいることを忘れないで欲しいんですけど……」

「忘れてなんかいいですよ」

「ひどいっ!?!」

ふふふ、と微笑むクラリツサにマドカが泣きそうになっていた。どうせなら、もう少しイチャイチャぶりを見せつけてやっても良かったかもしれない。

まあ、それは置いておいて。

「他の奴らはもう現地入りしてんのか？」

「いえ、皆忙しいですから、当日ぐらいしか予定は空けられないそうです」

「で、暇人のおまえは一足早くこっちに來たと」

「喧嘩売ってんのか」

からかうように弾が言つてやると、マドカはドスのきいた声で返してきた。そういえば、学生自体には千冬にもよくこうしてからかつては怒らせたものだ。

本当に、懐かしい。

「千冬さんや一夏は元気かよ」

「二人とも、元気すぎて困るぐらいですよ」

「そいつは良かった。そういや、今回おまえはどっちを応援するんだ？」

「姉さんに決まっています」

「即答か」

あいもかわらず素直じゃない。一夏の周りにいる奴らは全員そうだ。

「とうか、あなたは戦わないんですか？ 義手だからと言って、あなたが負ける道理はないでしょう」

「無理だよ、勘弁してくれ。俺はもう戦えないし、戦わない」

苦笑しながら、弾は断言した。

せつかく安定した職業につけたというのに、それをふいにしたくはない。それに、今の自分はきつと『戦わないことで存在を許されている』のだ。

何より家族の為に、無茶はしたくない。

「もう自分だけの体じゃないんだから、無茶しちゃダメですよ」

「わかってるよ、クラリツサ」

「……はあー。お二人とも本当に熱々ですね。どうやら私はお邪魔のようなので、これで帰ります」

「遠慮するなよ。ただでさえ独り身なんだからよ」

「独り身だから遠慮したいんだよ目に毒だこんちくしょうがこの眼帯夫婦」

マドカが虚ろな目になりながらも一氣にまくし立てた。間もおかずによくそれだけ口が回るものだ。

ちなみに、眼帯夫婦というのは言葉通りの意味である。弾は右眼、クラリツサは左眼にそれぞれ眼帯を施している。

「いいでしょう？ 私が弾の右眼になって、弾が私の左眼になってくれる。お互いが支え合ってるんですよ」

「愚痴言ったらのろけ返されたっ!？」

実際、クラリツサは強敵であった。

「はあー……もう、いいです。お腹いっぱいなんで帰らせてもらいます」

「おい、新婚旅行の時の話でもしてやるからゆっくりしてけよ」

「腹いっぱいって言ってんだだろうが!」

ちくしょー、と叫んで、マドカは外へ飛び出して行った。仕方ないので、今度会った

時はボリューム三割増で話をしてあげよう決めた。きつと泣いて喜んでくれるだろう。

その涙は、もしかすると血涙かもしれないが。

ともあれ。

「さあ、クラリツサ。朝食にしよう」

「はい、そうしましょう」

せつかくの朝食が冷めてはもったいない。新しい朝を始める為に、やはり朝食は欠かせないのだから、より美味しく食べたいと思う。

弾とクラリツサは、互いの手を取り合つて、二人で家の中へと戻つて行く。

ふと、弾はクラリツサの手を少しだけ強く握つてみた。すると、クラリツサも自然に握り返してくれた。

きつとこうして、誰かのゆくもりに感動できることこそが生きるといふことなのではないか、と弾は思う。

いつでも傍らに、愛すべきぬくもりがある。

それはなんて——素敵なことなのだろう。

かつて魔人と呼ばれ、ついには魔王へと至った怪物はもういない。
いるのは、愛しい人のぬくもりを感じながら微笑む、ただの人間だった。